Newspaper in Education
教育に新聞を

実践報告書

2015年度

秋田県NIE推進協議会

Newspaper in Education

目　　次

はじめに　秋田県ＮＩＥ推進協議会会長　阿部　昇 …… 1

小学校

実践１年目

始めようＮＩＥ！　～１年目の取り組み～
由利本荘市立上川大内小学校　高橋秀樹 …… 2

新聞に触れ、活用した授業の構築
大仙市立豊川小学校　浦山ひろみ …… 7

実践２年目

主体的に情報を読み解き記者のものの見方・考え方に迫る
２紙の「比べ読み」の学習
秋田大学教育文化学部附属小学校　熊谷　尚 …… 12

実践３年目

知識を広げ、思いを発信するための新聞活用の工夫
能代市立浅内小学校　永塚　功 …… 18

豊かな表現力を育むＮＩＥの実践
秋田市立東小学校　児玉公生 …… 23

「ことばの力」を付けるためのＮＩＥの取り組み
横手市立朝倉小学校　佐々木明人 …… 31

実践４年目

学年に応じた言語活動の充実を図るための新聞の活用
大館市立成章小学校　安原幸男 …… 36

中学校

実践１年目

情報活用能力と表現力を育むＮＩＥの実践
鹿角市立八幡平中学校　駒木利浩 …… 41

ＮＩＥの視点を広げる「新聞」を活用した授業の試み
男鹿市立男鹿南中学校　田村　稔、安藤　陽 …… 46

視野を広げ、社会への関心を深めるための新聞活用
大仙市立協和中学校　金子茂子 …… 50

実践２年目

確かな読みの力を育てる「新聞」を活用した授業の試み
八郎潟町立八郎潟中学校　志田裕子 …… 55

実践３年目

ふるさとを知り、地域に思いを発信するための新聞活用の工夫
「気付き」「考え」「伝える」ＮＩＥ～小中連携での取り組みを通して～
能代市立能代南中学校　藤谷　寛 …… 60

主体的に学び、互いに高め合う由利中生
～資料活用能力・思考力・表現力をはぐくむためのＮＩＥの実践～
由利本荘市立由利中学校　板　垣　　洋 …… 65

新聞を活用した思考力・判断力・表現力の育成
～新聞にある「なぜ」から考える～
羽後町立羽後中学校　白　石　和　己 …… 70

実践６年目

ＮＩＥ実践と全国大会
能代市立能代第二中学校　秋田谷　みゆき …… 74

高　校

実践３年目

ＮＩＥ×ＳＧＨ
～スーパーグローバルハイスクールにおける、ＮＩＥを用いた問題解決力の育成～
秋田県立秋田南高等学校　關　　友　明 …… 79

ＮＩＥ活動を通してこれからのライフデザインを描く
秋田県立雄物川高等学校　工　藤　裕　史 …… 83

実践４年目

平成２７年度ＮＩＥの取り組みについて
「形式」を真似て、生かす
秋田県立横手高等学校定時制課程　小　西　宗　子、松　江　正　彦 …… 88

秋田県ＮＩＥ実践校一覧・2015年度秋田県ＮＩＥ推進協議会 …… 93

はじめに

秋田県ＮＩＥ推進協議会会長
秋田大学大学院教育学研究科教授　**阿　部　　昇**

2015年７月30日、31日に、秋田市でＮＩＥ全国大会秋田大会が開催されました。県内外から約1000人の先生方、新聞関係者の方々にご参加いただきました。大会のスローガンは「『問い』を育てるＮＩＥ―思考を深め、発信する子どもたち―」です。一日目のパネルディスカッション、記念講演、基調提案も、そのテーマにふさわしい豊かな内容を含んでいましたが、何と言っても大会の華は二日目の公開授業と実践発表です。本実践報告書には、その内容がコンパクトにまとめられています。

公開授業では、以下が本報告書に収録されています。①二つのサッカー女子ワールドカップ記事を読み比べ、書き手の取捨選択基準が違うことを見いだしていく授業　②二つの経済連携協定の社説を読み比べ、立場による見解の違いとその背景について考察していく授業　③秋田の「ゆるキャラ」の記事を読んだ上で、意見文を書き新聞に投稿していく授業　④東北六魂祭の号外の記事と写真を見て、それにふさわしい見出しを新聞社に提案していく授業　⑤新聞のスクラップを生かしながら、ふるさと秋田の将来について意見を表明していく授業　⑥多様な新聞記事を生かしながら、自らのライフデザインを構築し発表していく授業　⑦歴史新聞の制作を通して、江戸時代の鎖国を多面的に考察していく授業　⑧秋田ふるさとの良さを、英字新聞の製作によって広く伝えていく授業。

実践発表では、⑨小中連携を生かしたＮＩＥ新聞の制作　⑩新聞記事を読み、それについてのコメントをプレゼンしていく授業　⑪進路に関わる記事をキーワードでスクラップする取り組みなどが掲載されています。

＊

上記以外の実践では、「マイナンバー制度は必要か」「夫婦別姓を認めるか認めないか」「きらきらネームに賛成か反対か」などの論題について、新聞を重要資料としてディベートやディスカッションを展開していく社会科や国語の授業があります。また、政治で話題になっている事項や選挙制度に関する事柄について、記事・社説を生かして探究を行っていく社会科の授業もあります。美術や家庭科で新聞を生かす授業も報告されています。

多くの教科で本格的に新聞を生かした授業が多様に工夫され、成果を上げていることが読み取れます。

もちろん、これまでも地道に行われたきたＮＩＥコーナーの設置、ＮＩＥタイムの取り組み、ＮＩＥ通信の発行なども、それぞれ特色をもって行われています。

＊

2016年度中に新しい学習指導要領が告示される予定です。そこでは、論理的思考力、創造的発想力、主体的判断力、批判的思考力、説得的表現力、メタ認知力などの要素につながる教科内容・学習内容が提案される可能性があります。教育方法として「アクティブ・ラーニング」が提案される可能性もあります。

これらの能力･学力の育成にとって、新聞は極めて有効な教材となります。また、アクティブ・ラーニングの良さが、ＮＩＥではより発揮されると考えられます。アクティブ・ラーニングとＮＩＥは親和性が高いのです。これまで以上に教育の中で新聞が果たす役割は大きくなります。

ＮＩＥ全国大会秋田大会の成功を、秋田県のＮＩＥの発展につなげていきましょう。

始めようＮＩＥ！　～１年目の取り組み～

由利本荘市立上川大内小学校
教諭　高　橋　秀　樹

１．はじめに

本校は、由利本荘市の北東部（大内地区）、国道１０５号線沿いに学区を有し、東は大仙市南外地区と南は横手市大森地区に接する地域にある。校舎は芋川の河岸段丘の上にあり、豊かな自然に囲まれている。今年度を最後に１４１年の長い歴史と伝統を閉じ、来年度から下川大内小学校と統合して「大内小学校」として新しい一歩を踏み出す。学校教育目標は、「明るく　かしこく　たくましく」、目指す子どもの姿は、「汗の笑顔がはじけるかみかわの子ども」とし、ふるさとを支え、グローバル社会で活躍できる人材を育成するために、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の知・徳・体をバランスよく育てることを重要視し、活動を進めてきた。

研究主題は「共に高め合い、確かな学力を身につける子どもの育成」とし、学力向上推進計画の具体的施策の一つとして、ＮＩＥの充実をここ数年掲げてきた。本校のＮＩＥのねらいは３つある。

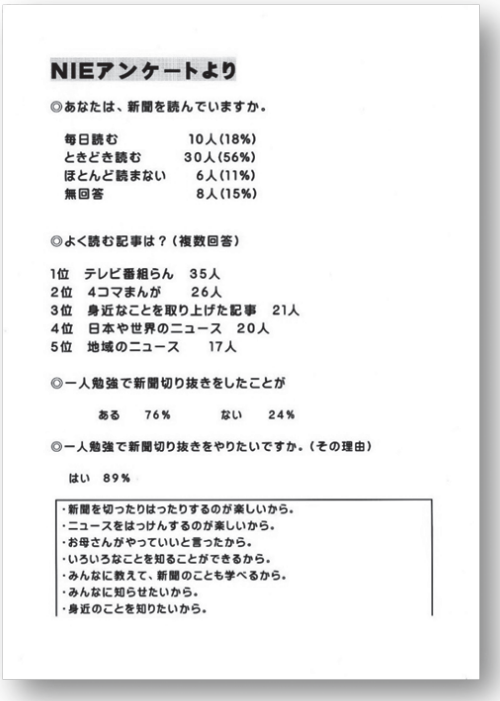
- 身近な情報源としての新聞に興味をもち、新聞に親しむ。
- 新聞記事を読んだり、記事に関するスピーチをしたりすることを通して、社会の出来事に目を向け、自分なりの考えをもつことができるようにする。
- 新聞から表現方法を学び、学習活動の中での新聞作りを通して、必要な情報を収集し、文章や写真などで表現する力を育てる。

新聞を活用することにより、児童がより視野を広げ、より知識を深めていけるよう実践を積み重ねた。

２．実践内容

①ＮＩＥアンケートの実施

家庭での新聞利用状況を実態把握するために、昨年度の初めに全校児童を対象に新聞に関するアンケートを実施した。質問項目は「あなたは新聞を読んでいますか」「よく読む記事は何ですか」「一人勉強で切り抜きしたことがありますか」などである。アンケート結果から、児童の新聞利用頻度や利用目的、新聞に対する意識を改めて把握することができた。



NIEアンケートより

◎あなたは、新聞を読んでいますか。

毎日読む　10人(18%)
ときどき読む　30人(56%)
ほとんど読まない　6人(11%)
無回答　8人(15%)

◎よく読む記事は？（複数回答）

1位　テレビ番組らん　35人
2位　4コマまんが　26人
3位　身近なことを取り上げた記事　21人
4位　日本や世界のニュース　20人
5位　地域のニュース　17人

◎一人勉強で新聞切り抜きをしたことが

ある　76%　ない　24%

◎一人勉強で新聞切り抜きをやりたいですか。（その理由）

はい　89%

・新聞を切ったりはったりするのが楽しいから。
・ニュースをはっけんするのが楽しいから。
・お母さんがやっていいと言ったから。
・いろいろなことを知ることができるから。
・みんなに教えて、新聞のことも学べるから。
・みんなに知らせたいから。
・身近のことを知りたいから。

資料１：ＮＩＥアンケート結果（一部）

②ＮＩＥ集会の実施

学年の段階に応じた新聞の活用の仕方で、学団集会を開催した。概要は次の通り。

【１・２年】「新聞グランプリ」

たくさんの新聞記事の中から、自分が「おもしろい」「かわいい」「かっこいい」と思う記事をスクラップして紹介し合った。１・２年生が選んだ記事・コメントに対し、３年生以上の児童が「いいねシール」を貼り、１・２年生のがんばりを認めた。

写真１　記事を切り抜く１・２年生

【３・４年】「新聞ＤＥスピーチ」

自分が興味をもった記事について、思ったこと・考えたことを発表し合った。発表の後には、質問・感想を話し合い、自分の見方・考え方に広がりができた。

写真２　記事の切り抜きをもとに、発表する児童

【５・６年】「新聞でワークショップ」

４、５人のグループで同じ記事を読み、自分が思ったこと、考えたことを付箋紙を使用し、ワークショップ形式で意見交換した。出された意見を分類して、各グループの最終提言として、まとめの発表を行った。記事は各グループの進行役となるリーダーが教師と相談して選んだが、社会面や地域面、スポーツ面と、バラエティに富む内容で、児童なりに記事に対して深く考え、提言することができた。

写真３　記事に対する考えを書いた付箋紙を貼りつけながら意見交換する５・６年生

写真４　グループの最終提言を発表する６年生

③各種コンクールへの全員参加

ＮＩＥに関する各種コンクールへの全員参加を行った。１～３年生は「新聞切り抜きコンクール」（主催：秋田魁新報社）への応募、４～６年生は「いっしょに読もう！新聞コンクール」（主催：一般社団法人日本新聞協会）へ応募した。新聞切り抜きコンクールは、興味を持った新聞記事の切り抜きを用紙に貼り付け、見出しやコメントを書き添えて１枚の作品に仕上げるコンクールで、グループ作成も可能である。

いっしょに読もう新聞コンクールの方は、家族や友だちといっしょに記事を読み、感想・意見を書いて、記事と共に応募するコンクールである。どちらも本校では学校で読んだ新聞記事を題材として選び、取り組むことができた。

写真５　１年生の切り抜きコンクール作品

④一人勉強での取り組み

一人勉強で切り抜いた新聞記事を貼り、心に残った言葉や大事だと思ったことにマーカーラインをひき、記事を要約したり、自分の思ったことや考えたことをノートに記入したりしている。これは毎月実施している「家庭学習強調週間」と連動して行うものであり、児童の家庭での新聞に対する積極的な活用を促すことができた。

写真６　一人勉強で新聞切り抜き

⑤新聞教室の開催

本校の今年度の活動の様子を知らせる学校新聞「くりっこ新聞」を２月１日秋田魁新聞に掲載していただいた。その学校新聞の作成にあたり、１２月中旬に秋田魁新報社　ＮＩＥ推進部の大石さんを招き、５・６年生対象に新聞教室を開催した。見出し、リード文、本文といった新聞記事の構造を体験的に学習し、自分の担当の記事を作成することができた。

写真７　新聞教室で記事作成について学ぶ５・６年生

⑥ＮＩＥサロンの常設

全校児童が比較的、目にしやすく集まりやすい一階ホールに新聞に関するＮＩＥサロンを設置した。今年度、ＮＩＥ実践指定校１年目として、学校に各新聞社の新聞６紙が毎日届いていた。その新聞を読み比べ、１面トップの扱いの違いや見出しの違い、掲載写真の違い、記事の論調の違いを比べて読む「新聞読み比べコーナー」や、担任が選んだ記事について自分の考えを書き、校長先生から講評をいただく「新聞書き慣れコーナー」を設けた。その他、本校関連の記事や前述③のコンクール出展作品も展示した。児童にとってＮＩＥサロンは交流の場、感想を話し合う場として、幅広く機能した。

写真８　ＮＩＥサロンの様子

写真９：新聞書き慣れコーナー

３．成果と課題

①成果

⑴全国学力学習状況調査　質問紙より

平成２７年４月に行った全国学力学習状況調査の児童質問紙に新聞に関する項目があり、結果は次の通りだった。

Ｑ：新聞を読んでいますか。

回答選択肢	本　校	秋田県
1　ほぼ毎日	60.0%	10.3%
2　週に１～３回	20.0%	19.1%
3　月に１～３回	10.0%	25.3%
4　ほとんど読まない	10.0%	45.2%

この１年間、新聞に慣れ親しんできたことにより、テレビやインターネットに偏ることなく、新聞も大事な情報源の一つとしていることが分かった。新聞購読の習慣化が進み、よりたくさんの情報媒体の中から必要なものを選択し、収集できる力が備わりつつあると考える。

また、得た情報から思考・判断する力の向上がうかがえた、次のような質問もあった。

Ｑ：地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがありますか。

回答選択肢	本　校	秋田県
1　当てはまる	50.0%	22.3%
2　どちらかといえば、当てはまる	40.0%	39.1%
3　どちらかといえば、当てはまらない	10.0%	28.5%
4　当てはまらない	0.0%	10.1%

普段から新聞を読み、自分の思いや考えを様々な形で表現させることによって、記事を読むだけにとどまらず、自分なりに考えることをある程度、習慣化させることができたと考える。

⑵日々の学校生活の中で

新聞記事を基に自分の考えを表現する実践を通して、普段の授業での発表や集会活動での感想発表で、根拠に基づき、説得力をもって発表できる児童が増えてきたのが実感できた。

写真 10：集会で感想発表する２年生

②課題

⑴統合小学校での指定校２年目の実践に向けて

本校は前述のとおり今年度で閉校し、ＮＩＥ実践指定校としての取り組みを統合小学校に持ち越すことになる。そのために今年度までの実践をまとめ、次年度に引き継ぐことが大きな課題である。併せて統合に絡んで、ＮＩＥに対する保護者との共通理解も必要になる。新年度からの円滑な実践に向けて、できるだけ準備を整えていきたい。

また、各教科等の学習で新聞を活用した取り組みを進めることも課題の一つとして挙げられる。普段の授業レベルでの、より有効な新聞の活用の仕方を模索していきたい。

③終わりに

「始めようＮＩＥ！」ということで、今年度は新聞に慣れ親しむ１年目だった。児童の新聞に対する意識の高まりは、初年度としては上々であったと言える。次年度は「広げようＮＩＥ！」として、ＮＩＥの可能性を更に広げた活動を展開していけるよう、更なる実践の積み重ねをしていきたい。

閉校記念　上川大内小学校「くりっこ新聞」

（平成二八年　二月一日　秋田魁新聞に掲載）

ＮＩＥ実践報告　新聞に触れ、活用した授業の構築

大仙市立豊川小学校
教諭　浦　山　ひろみ

１．はじめに

本校では、平成27年度からＮＩＥ教育の実践指定校となり、主に国語科や社会科、理科の授業や学級活動の時間に新聞活用について研究を進めている。１年目でもある今年度は、新聞活用の授業を体験し、その効果を実感することから始めた。毎日６紙が配達され、活用したいときにはいつでも読める環境になり、子ども達にとって新聞が身近に、そしていつでもふれあえるものになった。研究のねらいは、

（１）新聞に触れ、親しむ態度の育成。
（２）新聞を活用し、身近な記事を読む。
（３）新聞を活用した授業の構築。

の３つであるが、今年度は新聞を読んだことのない児童が多数であったため、（１）の新聞に触れて親しむことに重点をおいて取り組んだ。

２．実践内容

本格的な取り組みは新聞６紙が届けられる夏休み明けから始めた。中・高学年の教室がある２階に新聞社ごとに分けられた新聞専用棚を設け、いつでも自由に新聞を読むことができるようにした。

⑴４年生の実践

①英語に触れる

新聞に触れる中で、普通紙でも平易な言葉を使ったり、読みがなのルビが振ってあったりする子供向けの記事が掲載されていることに気付き、特に、小学生に人気のキャラクターが英語での言い回しを紹介する記事には強く興味を示した。毎朝新聞が届くと、進んで切り抜いて教室に掲示し、声に出して楽しむ姿が見られた。

②天気図、暦

４年生の理科で星座早見板を用いて星の動きや月の満ち欠けの学習をした。その際、月齢を知る必要があり、新聞の暦欄を見る習慣が付いた。また、秋分・春分、夏至・冬至の日の昼間の時間や夜の時間を実際に暦に書かれている日出、日入の時刻を計算して確かめていた。毎日、暦を見ることでだんだん日が短くなってきていることを改めて知ることができた。

天気図と概況を読み、「低気圧・高気圧」「西高東低」「寒冷前線・温暖前線」という言葉を知り、意味を調べたり、天気記号に興味をもったりすることができた。理科の学習が深まっただけでなく、日常の生活でも言葉を使いこなすことができるようになってきた。

③「アップとルーズ」

４年生の国語で「アップとルーズで伝えよう」（光村図書）の学習で新聞記事に使われる写真にはアップとルーズがあるということが分かった。それぞれの写真から受ける印象を話し合ったり、どんなふうに使い分けると効果的であるかを考えたりした。さっそく実際の新聞を使い、アップとルーズ、どちらの写真であるかを分けていく作業を行った。「やっぱり、勝負を決めた瞬間はアップだ。」

「大きな事故や事件はルーズにして周囲の様子も写っているから気持ちも伝わるね。」などの声も聞かれ、やはり、見出しだけより写真があると印象深い記事になるということが実感できた。

④新聞を読んでのスピーチ

朝の会で「新聞を読んで一番心に残ったこと」をテーマにスピーチを行った。どの記事を取り上げるか悩む子どもが多かったが、テレビのニュースで大きく取り上げられたものや小学生に関係のある記事を選ぶ傾向があった。家庭でも親子で新聞を手に取り、相談しながら話すテーマを決めたりすることが多く、これをきっかけに家庭でも新聞を読むことが増えたと保護者からも喜ばれている。

⑵６年生の実践

「学習新聞」づくりの取り組み

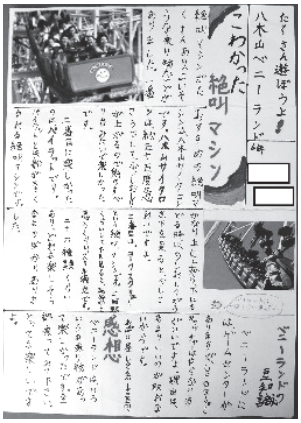
①新聞の一般的な基本構造を再確認し、自分なりの新聞づくりに挑戦

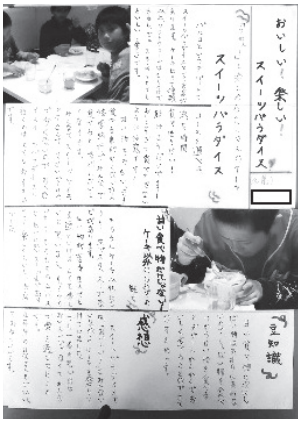
・ねらい

修学旅行の楽しかった体験を行事新聞にまとめ、全校児童に伝えることができる。

まずは、あらかじめ決めていた基本レイアウトを紹介し、自由に下書きを書かせてみた。下書きの段階で、伝えたい焦点がぼやけてしまった記事が多かった。この原因は、児童には、伝えたいたくさんの楽しい思い出がありすぎるためと思われた。そこで、個人個人伝えたい記事内容を一つに絞らせ、学級全体で修学旅行の全体像が分かるように、どうしても伝えたい、これだけは伝えたいという記事内容を再度選ばせた。

次に、その記事に合った見出しと写真選定をした。写真を選びながら、また思い出がよみがえってくるようで、写真の重要性に気付いた児童も多かった。





作成した修学旅行の行事新聞

その後、本文を推敲し、清書。キーワードとなる単語は、太字や色付き文字にするなどの工夫も見られた。

なお、本来、新聞の題字となる場所には大見出しを記入させた。児童は、修学旅行の新聞づくりに意欲的に取り組むことができ、今後の「学習新聞」づくりへの基本的な知識も身に付き、よい導入となったと思う。

②様々な教科の学習のふり返りとして「学習新聞」づくりを継続

・ねらい

単元の総括をし、自分の興味関心をさらに深めることができる。

まずは、「学習新聞」づくりで押さえるポイントを確認した。

理科の学習新聞

社会科の学習新聞

＜ポイント＞
・画用紙１枚にまとめる。
・新聞の名前（題字）を決める。
・引き付ける見出しを考える。
・絵や写真を入れる。
・キャラクターを考え、吹き出しも付ける。

次に、見出しについてグループで意見を出し合い交流させた。なぜそのような見出しを付けたのかという理由を相手に聞いたり、自分が答えたりすることにより、発表が苦手な児童も他の児童と交流できるとともに、学習内容のより確かな理解と思考の深まりにつなげることができた。

その後、レイアウトを考えさせ、絵や写真、図表等を選ばせたり本文を書いたりさせた。推敲は、早くできた児童のみとし、できるだけ１単位時間で仕上げることを意識させた。

繰り返し取り組ませることで、単元の途中でも、この最後の「学習新聞」づくりを意識した１時間ごとのふり返りができるようになってきた。また、「このデータは使えそうだ」「今朝のニュースで同じような話題が取り上げられていた。」「新聞で探して見ようかな。」などという声も多く聞こえるようになった。

⑶全校での実践

「新聞写真タイトルコンテスト」

冬休みを利用して「豊川小学校　写真タイトルコンテスト」を行った。上学年は全員、下学年は自由参加で行った。冬休みの課題にしたため、親子で取り組んだ子どもも多かった。親子で新聞を読むというきっかけ作りにもなったと思う。

写真選びから始めるのはなかなか大変だったが、新聞を自分の手で１ページ１ページ「めくる」ことに大事な意味があると考えて行った試みである。子どもらしい発想を生かした楽しいタイトル、驚きを素直に表したタイトル、被写体への共感にあふれたタイトルなど傑作が多かった。

入賞作品より

【１・２・３年生】「親子で挑戦賞」

金賞作品

「王者をゆずれない羽生結弦」

※羽生選手の闘志と重圧を、「ゆずれない」という強い言葉で表している表現力がとてもいいと思います。

【４・５・６年生】「自力で挑戦賞」

金賞作品

「背すじをのばし、新年を迎える」

※新年のすがすがしい緊張感を写真から見事にとらえ、「背すじをのばし」という言葉に表しています。

３．成果と課題

⑴成果

○新聞は大人の読むものという感覚であったが、子ども向けの記事を見付けたり、クイズやパズルを解いたりすることを通して新聞を身近なものに感じて親しむことができた。

○俳句や短歌、作文など全国の小学生が投稿したものが掲載されているのを見て、自分たちが作ったものと比べたり、よい表現を参考にしたりと刺激を受けて「また作ってみよう。」という意欲につながっていった。

○担任が読んだ新聞記事の紹介をすると、興味を示して学校や家で記事を読んでみたり、新聞を読んで分かったことを家族に話したりするなど家庭も巻き込んでの活動になった。

○読めない字があっても前後の文脈から想像して読んだり、分からない言葉でも意味を推測したりということが増え、読書の幅が大きく広がった。

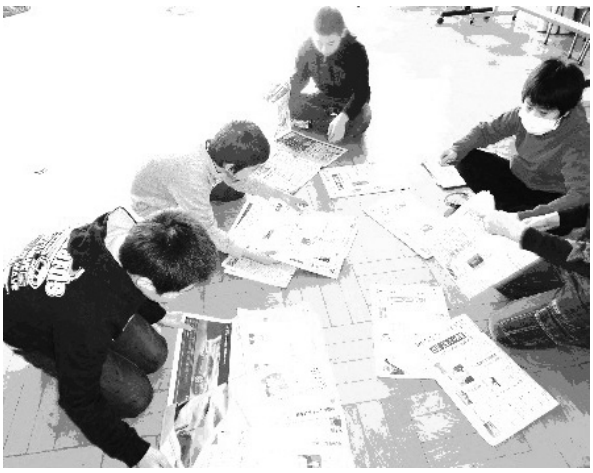
○同じことでも新聞によって取り上げ方が異なることがあるということに気付き、ものごとをいろいろな角度から比較検討してみようとする習慣が付いてきた。

○「新聞写真タイトルコンテスト」の実践を通し、短い文で相手に伝える方法を身に付けつつある。記事の中身を具体的に表している写真にタイトルを付けることは、内容をしっかりと把握することにもつながっている。興味をもった記事と写真を切り抜き、ノートに貼り付けてタイトルを付けていく活動は楽しみながら取り組んでいた。「今日はどんな記事を選ぼうかな。」と毎日、新聞をめくる姿が見られた。

⑵課題

○読んでみての感想はもつことができたが、内容をしっかりと読み取り、議論しあうというところは小学校段階ではかなり難しかった。毎日継続して取り組んでいくことができれば効果は上がると思われるが、時数の関係や新聞を購読せず、テレビのニュースやネットで済ます家庭もあり、家で新聞を読んだり、記事を切り抜いたりするという活動ができない児童もいる。学校に届けてもらう新聞だけでは一人一人が十分な活動がしにくいのが現状である。

○文章を読み取る力は個人差が大きい。子ども新聞を読むのがやっとという児童もいれば、普通紙をさほどの困難を覚えずに読んでいる児童もいる。盛りだくさんの記事の中から、どのような記事を選ぶか助言の仕方を工夫していきたい。



社会科「政治とくらし」での記事探し

○新聞の紙面構成を知り、授業のまとめなどで新聞を作るときなど戸惑いなく、見やすく、分かりやすい紙面を作る学習もこれから取り入れていきたい。

主体的に情報を読み解き記者のものの見方・考え方に迫る　２紙の「比べ読み」の学習

秋田大学教育文化学部附属小学校
主幹教諭　熊　谷　　尚

１．はじめに（実践にあたって）

新聞は、限られた紙面の中で読者に情報を伝えるために、多くの情報を整理し、その価値に順番を付け、取捨選択して記事の内容や構成を決めている。記事には「見出し」「本文」「写真」の３つの要素があり、それらがある一貫性をもって編集されている。記事を書く記者が、読み手に何をどう伝えようとしているかによって、記事の内容や編集のしかたなどが変わってくる。だから、同じ出来事を伝えた記事であっても、新聞ごとに見出しや本文の書き方、掲載する写真の選び方が違っているのである。

今回教材に用いたのは、2015年６月10日付けの朝日新聞と毎日新聞それぞれの朝刊に掲載された、サッカー女子ワールドカップカナダ大会での「なでしこジャパン」の初戦の模様を伝えた記事である。

両紙ともに日本の初戦勝利を１面で伝えており、「なでしこ白星発進」という奇しくもまったく同じ見出しが紙面を飾っている。しかし、スポーツ面の関連記事の方は、かなり中身が異っている。毎日新聞の「戻ってきた粘り強さ」という見出しからは、日本のチーム状態を肯定的に評価している印象を受ける。一方、朝日新聞の「手薄なサイド　スイス猛攻」という見出しからは、日本の初戦の戦いぶりをやや否定的に評価している印象を受ける。

これら２つの記事を比較・検討する活動を通して、「見出し」「本文」「写真」の一貫性や、「逆三角形の構成」といった新聞記事の特徴を知るとともに、記者のものの見方・考え方を想定しながら、それぞれの記事を批評的に読み深めていく学習が展開できるのではないかと考えた。

２．単元の実際　＜全２時間＞

第５学年・国語「新聞を比べて読む」
―サッカー女子W杯・初戦―

⑴単元の目標

・様々な視点から情報を読み解き、自分自身で判断しながら情報を活用しようとする態度の素地を養う。
（国語に関する関心・意欲・態度）

・同じ試合の結果を伝える２紙の記事を比べながら読む活動を通して、それぞれの記事の編集の仕方や記事の書き方の特徴に気付くことができる。
（読むこと　ウ）

・見出し・本文・写真を関連付けながら新聞記事を読み、そこに一貫して流れている記者の意図（何を伝えようとしているのか）を考えることができる。
（読むこと　ウ）

⑵学習活動

▽第１時

・見出しが隠された記事を読み、ふさわしい見出しを考える。

・同じ試合の結果を伝えている毎日新聞と朝日新聞の記事の見出しと写真に着目し、それらの表現の違いから問題意識をもち、次時に追求したい学習問題を考える。

▽第２時

・２紙の記事を読み比べ、写真から受け

る印象の違い、見出しや本文の違いなどを捉え、それぞれの記者の意図（何を伝えようとしているのか）を考える。
・話し合いを通して深まった自分の考えをノートにまとめる。

⑶学習活動を支える手立て

普段は読者（情報の受け手）の立場で読んでいる新聞記事を、記者（情報の送り手）の存在を意識して読み直し、編集の仕方や記事の書き方の奥にある記者の意図を探ることを中心的な学習活動とする。まず、記事を読み比べ、見出し・本文・写真の要素ごとに相違点を見いだしていく。次に、見出し・本文・写真の３つの要素を関連付けながら読んでいく。例えば、「毎日新聞の見出しに『心一つに』とあるが、本文にもそのことが書かれているかな。」「この写真と『宮間ＰＫ 守り抜く』の見出しは合っているかな、合っていないかな。」という具合にである。そのようにして記事の全体像をとらえながら読んでいくと、それぞれの記事が強調して伝えていること、すなわち、記者が読者に最も伝えようとしていることが次第に見えてくるだろう。

このような読みの思考過程の中に、グループや全体での話し合い活動を適宜組み入れる。その際、話題の焦点化、新たな視点の提示、補助資料の提供など、子どもの思考を揺さぶる手立てを工夫する。ぼんやりとしていた見出し・本文・写真の関連性が徐々に鮮明になっていくように、子どもたちの話し合いを整理したり方向付けたりしながら、学習を展開していく。

３．結果と考察（第２時の授業記録から）

学習問題
　それぞれの記者は、読者に何を伝えようとしていたのだろうか。

第２時は、上記の学習問題を皆で追究する時間である。授業の冒頭で、「あなたは、毎日新聞と朝日新聞のどちらの記事が好きですか。」と問うてみた。大半の子どもが「毎日新聞が好き」と答え、その理由として「なでしこジャパンを応援しようという気持ちが伝わってくるから」といったことを述べた。「朝日新聞が好き」と答えた子どもはわずかに４人だった。そのうちの一人に理由を訊くと、「（言葉に詰まりながら）うまく言えないけれどなんとなくいいなあと思って。」と話した。

全員で２つの記事を音読した後、まずは個人で本文の気になる言葉や文にサイドラインを引きながら考える時間を取った。その後、４人グループで互いに気付いたことを出し合いながら検討する時間を取った。グループの話し合いの後、学級全体での話し合いに移った。以下、その様子を授業記録から抜粋して掲載する。

〈４人グループで話し合う子どもたち〉

子どもＡ　朝日新聞と毎日新聞の共通点を見付けたのですが、どちらも最後の段落に記者が伝えたかったのではないかな、ということがまとめて書かれています。

教師１　えっ、それはどういうことですか。

子どもＢ　例えば、毎日新聞の４段落の最後に「チーム一丸で最後まで粘り強く戦うなでしこが戻ってきたことは間違いない。」と書いてあって…。

教師２　みなさん、Ｂさんの言ったところ、

見ていますか。線を引いていなかった人は線を引いておいてね。Bさん、続けてください。

子どもB　福田記者が（初戦の結果を）プラスに考えているということがここから分かります。逆に朝日新聞は、6段落に「このチームが目指すのは連覇だ。この基準で見ると、不安が残る内容だった。」と書いてあって、「不安が残る」というところからマイナスに見ていることが分かります。だから、勝見記者が伝えたかったことは、福田記者とほぼ逆なのではないかと考えました。

教師3　プラスに見ている、マイナスに見ている、という点に関連した発言はありませんか。では、3班と4班、続けてどうぞ。

子ども　朝日新聞の方は、2段落で「バッハマンのドリブルに手を焼いた」と、相手チームの選手を中心に書いているのですが、毎日新聞の方は「戻ってきた粘り強さ」ということを表すために、なでしこの選手のことを中心にして書いていると思いました。

子どもC　1班の意見と似ているのですが、朝日新聞は「このチームが目指すのは連覇だ。その基準から見ると…」と書いていて、勝見記者の基準が「なでしこの連覇」だから、そう見ると同じ試合でもマイナスに見えてしまうし…。毎日新聞の方は何を基準にしているかは、はっきりとは書いていないのですが、なでしこのことをとても誉めている感じに書いていて…。その人が考えている基準が違うから、同じ試合でも伝えたいことが違ってくるのだと思います。

教師4　みなさん、Cさんの言ったこと、分かりましたか。とても鋭いことを言っているのです…。（ホワイトボードに掲示している朝日新聞の記事を指しながら）みんなで6段落を読んでください。どうぞ。

子ども　（全員で音読）このチームが目指すのは…。

教師5　勝見記者は、何をなでしこの基準だと考えているのですか。

子ども　（口々に）連覇。2連続で優勝すること。

教師6　はい、ここで改めて考えてほしいのですが、なでしこは試合に勝ったのですよね。勝ったのなら、普通であれば「初戦突破、おめでとう」なんていう具合に書くでしょう。それなのに勝見記者は、「手を焼いた」みたいに、よくなかった点を書いているでしょう。ほかにもマイナス面のことを書いていませんか。

子ども　（口々に）けっこうたくさん書いてある。「手薄なサイド」「相手のミスに助けられた」「その判断は劣勢に拍車をかけた」「次々とかわされて」「ピンチの数は増えた」「前線に上がれる場面は少なかった」…

教師7　ほら、こんなにマイナスのことを書いているんです。勝った試合とは思えないぐらいです。勝った試合のことを、なぜ勝見記者はこんなふうに書いたのですか。

子ども　「連覇」が基準だから。

教師8　「連覇」が基準だと、どうしてこういう書き方になるのですか。

子ども　連覇を目指しているのに、初戦のようにピンチの状態だと不安があって、だから、マイナスのことをたくさん書いて「このままでは連覇できないかもしれない」ということを伝えようとしたのだと思います。

子ども　こんなふうにギリギリで勝ったような状態だと次のカメルーン戦には勝てない、連覇はできないと思ったから、勝見記者はマイナス面をたくさん書いたのだと思います。

子ども　この試合の結果をよかったと書いてしまったら、もっと上を目指してがんばる気持ちにならない。だから、マイナスのこ

とを書いて、連覇はそんなに楽ではないと言いたかったのだと思います。

子どもD　前回優勝したなでしこのがんばりを知っていて、なでしこの力を信じているから、もっとできるんじゃないかと思っているのだと思います。

教師９　ああ、そういうことか。勝見記者は、なでしこならもっとできるはずだって言いたいのか。

子ども　Dさんと似ている意見なのですが、前回大会のとき、なでしこのいい試合をたくさん見てきたから、本当はもっといい試合ができるはずなのに、まだできていないと思ったので、このようなマイナスの書き方になったんじゃないかなと思いました。

子ども　今まで言った人たちと似ているのですが、まあ初戦だからこのぐらいで勝てたけれど、決勝トーナメントに行くともっと強い相手がどんどん出てくるから、初戦で１―０だったらだめだろう、初戦は３―０ぐらいでいかなければ、という気持ちで書いているのだと思います。

〈学級全体で話し合う子どもたちの様子〉

教師10　連覇を期待しているから、あえて厳しい事を書いているということですか。（うなずく子どもたち）マイナス、マイナスと言っても、なでしこをけなしているとか、否定しているというのではないのですね。

子ども　前回優勝している分、今回は油断してこのような初戦の結果だったと勝見記者は思って、こんなふうに厳しく書いたのかもしれないと考えました。

教師11　なるほど、そういう可能性もあるかもしれませんね。勝見記者の伝えようとしていたことがだいぶ見えてきました。朝日新聞の話が続きましたので、今度は毎日新聞の方に目を向けてみましょう。勝見記者はかなり厳しい見方をしていましたが、福田記者の方はどうなんだろう。さっき５班から、福田記者はプラスの見方をしているという意見が出ていましたよね。チームワークもいいし、この調子でいけば大丈夫と、割と安心して見ているのかなあ。

子ども　（口々に）安心しているとまでは言えない気が…。チームワークが大事とは思っているけれど…。

教師12　では少し時間を取りますので、福田記者が何を伝えたかったのかについて、もう一度グループで話し合ってみて。どうぞ。（約３分の時間を取った。）

教師13　はい、話し合いはそこまで。みなさん、まず６班の考えを聞いてください。

子ども　まず１段落と２段落で試合前のロッカールームの様子を書いているのは、サッカーはチームワークがないといけないスポーツなので、なでしこのチームワークのよさを伝えるために書いたのだと思います。それから、見出しの「戻ってきた粘り強さ」についてですが、前はそうでもなかったけれどやっと戻ってきたから、この調子でがんばってくださいね、という気持ちなのだと思います。

教師14　「戻ってきた」に目を付けたのですね。そのことで意見がある班はありませんか。では、２班、７班、６班の順にどうぞ。

子ども　この前のワールドカップで、なでしこは最強だと言われていたけれど、その強さは少しダウンしていて、この試合の後半戦でその粘り強さが戻ったということを言

いたいのだと思います。

子ども　だいだい似ている意見なのですが、前回大会のとき、たしか澤選手が延長戦でゴールを決めて勝ったじゃないですか。それが福田記者の言っている粘り強さで、初戦の後半戦も相手のプレッシャーに何とか耐えたから、粘り強さが戻ってきたと書いているのだと思います。

子ども　この大会の前はあまり調子がよくなくて、前回大会の粘り強さが感じられなかったけれど、この試合で前回大会のような粘り強さがやっと出てきたと、福田記者は思ったのだと思います。

教師15　やっと出てきた、ということか。「戻ってきた」ですからね。「戻った」とは少しニュアンスが違いますよね。１班と４班、どうぞ。

子ども　まだ完璧ではないけれど、少しは戻ったという感じなのだと思います。

子ども　やっと前回大会のような粘り強さが試合で見えたので、福田記者は少しほっとして、このようなプラスの見方の記事を書いたのだと思います。

（以下、省略）

この授業の終末に、再度「どちらの記事が好きか」と尋ねてみた。すると、最初とはまったく逆転し、「朝日新聞が好き」という子どもが圧倒的に増え、「毎日新聞が好き」という子どもが全体の四分の一程度に減った。「本文」の一語一文にこだわり、友達との話し合いを通して記者の意図を探りながら読み取りを深めたことによって、子ども一人一人の中で、２つの記事に対する見方や考え方が変容したものと考えられる。

〈ある児童の授業後の振り返り作文〉

毎日新聞は「23人の心が一つになった」「粘り強さが戻った」とプラスに書いていて、記者がこのまま本気になって戦って行けるのではないかと予想している思いが読み取れました。一方、朝日新聞は、前回大会で優勝して いるので、今回はそれ以上に頑張れるのではないかという期待があるのでマイナスの書き方になっているのだと思います。記者の気持ちや基準によってこんなに内容がちがうのかと、改めて実感できました。また、記者の気持ちが読み手に伝わってくるので、言葉の 力ってすごいなと思いました。

４．終わりに

新聞が伝えていることはすべて「事実」である。しかし、それは記者の目を通して捉えられた「事実」である。その記者の意図（何を伝えようとしているのか）の違いによって、出来事のどこを切り取り、どう伝えるかが違ってくるのである。こういったことに気付いているか否かで、子どもたちが日常生活の中で様々な情報を活用する際の態度や、情報に対する見方や考え方が大きく違ってくるであろう。

高度情報化社会を生きる子どもたちには、情報を鵜呑みにして振り回されるのではなく、情報を正確に読み解く力や情報の真偽・価値を吟味し判断する力、必要な情報を取捨選択して利用する力など、健全で主体的な情報の受け手・送り手としての資質や能力を身に付けることが必要である。本単元の学びは、高度情報化社会を生き抜くための素地を養うことにつながる有意義なものであったと考えている。

【毎日新聞】

【朝日新聞】

知識を広げ、思いを発信するための新聞活用の工夫

能代市立浅内小学校
教諭　永　塚　　功

1．はじめに

本校は、平成25年度後半からＮＩＥ教育についての実践校指定を受け、効果的な新聞活用の在り方について実践を重ねてきた。今年度はその３年目にあたり、昨年度の取り組みを土台に、さらなる実践の充実を図った。その研究のねらいは、次の３つである。

⑴新聞を活用し、読む能力を高める。
⑵新聞に触れ、親しむ態度を育てる。
⑶新聞を活用した授業の在り方を検証することにより、教育課程の充実を図る。

⑴については、主に昼読書の時間を利用したＮＩＥタイムでの取り組みで、⑵については、ＮＩＥコーナー等の環境づくりで、⑶については、日々の授業と研究会を通して、ねらいに迫ることができるよう実践を積み重ねてきた。また、能代南中学校との交流を図り、小・中で連携してのＮＩＥ活動にも取り組んできた。

2．実践内容

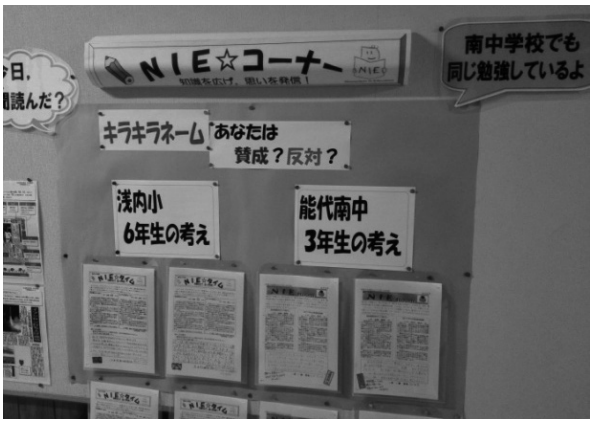
⑴ＮＩＥタイムの実施

・主に３年生以上の学年で、昼の読書タイムを活用して月２回程度実施し、新聞記事を読んで自分の感想や考えを原稿用紙形式のシートにまとめている。
・新聞への投書をもとに、自分は賛成か反対かの立場を明確にしながら意見をまとめたり俳句作りに挑戦したりと、様々な形式で新聞記事に親しんでいる。
・能代南中学校と連携して、小学校と中学校で共通した新聞記事について考えをまとめる活動に取り組んだり、お互いのシートの交換、掲示を行ったりしている。

○取り上げた主な記事
〈３、４年〉
「ネイガーがジュンサイ摘み取り」
「防ごう、外来種の被害」
「全長３メートル、網にザメ」
「あいさつで、笑顔を増やそう」
「○○に　流れ行くなり　春の川」
「未来をはぐくむ国際貢献」　…等
〈５、６年〉
「選挙18歳から投票」
「オリンピックエンブレム」
「美しい日本語を残そう」
「許せない、盲導犬を刺すなんて」
「核兵器減らす話し合い物別れ」
「学校に行きたくなかったら」　…等
〈学年共通〉
「私は鬼ごっこがキライだ」
「私はお手伝いがキライだ」
〈中学校との共通テーマ〉
「キラキラネーム、賛成？反対？」
「秋田○○空港」

⑵ＮＩＥコーナーの設置

①掲示コーナー
・ＮＩＥタイムに児童が書いたシートを各教室に掲示するとともに、３～６年生の物を１枚ずつ新聞記事と共に玄関近くのろう下に掲示している。児童のスクラップブックや中学生の取り組んだシート等も紹介し、多様な考えに触れられるようにした。



保健室前の「ＮＩＥ掲示コーナー」

②新聞閲覧コーナー

・２階多目的室（オープンスペース）に書架と長テーブルを準備し、児童向け新聞と一般紙の合わせて４紙を１週間その上に並べ、児童が手に取りやすいようにした。
・机上にはマーカーや付箋を置き、児童が気になった記事に印を付けさせ、お互いに紹介し合えるようにした。
・同じ場所に新聞記事をもとにしたクイズや学習コーナーも設置し、新聞に対する興味や関心が高まるようにした。
・１週間を過ぎた新聞は書架や図書室に移動し、授業などで活用できるようにした。

２階多目的室の「ＮＩＥ閲覧コーナー」

この他に、スクラップ用のＮＩＥノートを準備し、自分が選んだ記事に考えを書き込んだり、低学年では写真から感じたことを発表し合ったりする活動も行っている。

⑶授業研究会より

◇４年松組　総合的な学習の時間

〈単元名〉ふるさとのよさを考えよう②
「秋田の自まん」

〈本時のねらい〉

収集した興味・関心がある記事を発表したり仲間分けしたりすることにより、自分の追求したいテーマを決めることができる。

・３年生で自分たちの住む浅内地区のよさについて発見した「ふるさとのよさを考えよう②」から発展し、４年生では目を向ける範囲を秋田県全体に広げた。
・秋田県の文化・産業・環境などについて、自分のテーマを見付け、調べたり下級生へ発表したりすることを通して、秋田県のよさを知り、進んで広め守っていこうとする態度を育てることを単元の目標とした。
・導入段階で秋田県のよさに気付かせる手立てとして、地元新聞の記事の見出しを活用した。
・本時では、自分が気になった記事の見出しをカードに記入して、一人一人が黒板に貼ることにより紹介し合い、大まかに分類して仲間の名前を付けていくことにより、秋田県にはどのような種類の自慢があるのかを知ることができた。また、

新聞記事から見つけた秋田のよさを出し合う

友だちの選んだ記事も参考にしながら、自分が追求していくテーマを考えることができた。

３．能代南中学校との連携について

浅内小学校と能代南中学校では、ともに「ＮＩＥタイム」を設定し、新聞記事を読んで自分の考えをまとめる活動に取り組んでいる。記事の選定や取り組み方には違いがあるものの、社会の出来事への関心を高め、自分の考えを発信できる児童・生徒を目指しての取り組みということでは共通している。そこで、自分の考えを伝えたり他の人の考えに触れたりする機会をさらに増やし、子どもたちの意欲向上や考えの深まりにつなげたいと考え、小・中での連携を計画した。

主に次の２つを柱として、能代南中と連携を図りながら、ＮＩＥ教育に取り組んできた。

⑴ＮＩＥタイムでの連携
⑵ NIE 便り「もがりぶえ」を通しての連携

⑴ＮＩＥタイムでの連携

・浅内小５・６年生を中心に、中学校との共通の記事を読み、考えをまとめた。取り上げる新聞記事は、中学校で取り組んだ物の中から、小学生にも取り組めそうな記事を選び、必要に応じて、与える課題や書くときの条件を小学校に合うように作り変え、シートを作成して取り組んだ。
・取り組んだシートは、秀作を数点選び、お互いに交換して掲示し合うことで、多様な考えに触れることができるようにしている。

○これまでに取り上げた共通記事
〈H27「もがりぶえ」に掲載〉
「秋田○○空港」
〈ＮＩＥコーナーに小中のシートを掲示〉
「キラキラネームに賛成？反対？」
「許せない、盲導犬を刺すなんて」

⑵ NIE 便り「もがりぶえ」を通しての連携

・実践指定後２年間、年度のまとめとして浅内小学校と能代南中学校共同でＮＩＥ新聞「もがりぶえ」を作成してきた。学校で行っているＮＩＥ活動を地域の方々にも知ってもらう目的で始めたものだったが、昨年度末に発行した第２号は、地域の情報や課題などについて中学生がインタビューした記事も掲載した。
・新聞を読むことの習慣化、伝達手段としての新聞活用については、開始当初から両校の実践の柱である。そこで新聞を作ることを経験することとで、身近に新聞があることの大切さや、「新聞」という情報媒体の利便性を感じる一助となるのではないかと考え、今年度も小・中連携の一つとして計画した。
・今年度の合同編集会議は、６月と２月に行った。６月の第１回目は、新聞発行までの大まかな流れについて、２月の第２回目は、記事の選定と記事作成の分担について話し合った。浅内小学校では、運営委員と図書委員の５、６年生が編集委員となり、主に事前の記事選びの話し合いや浅内小の行事を紹介する記事の作成に参加した。

第１回合同編集会議（６月）
小・中学生混合のグループで、記事にできそうな内容を話し合う。

４．成果と課題

⑴浅内小学校での取り組みについて

○大事なことを読み取ったり考えを文章にまとめたりする力の高まりが見られ、児童アンケートでも、その意識の高まりがうかがえる。自分の立場で考えた記述が増えるなど、内容の深まりも感じられる。

○児童の新聞に対する関心を高め、一人一人が新聞を手に取り触れる機会を増やすことができた。ＮＩＥ活動を生かした朝の会のスピーチやスクラップブックへの取り組みの継続など、新聞が日常の中で活用される場面が多くなった。

昼読書の時間でのＮＩＥタイム

●読み取りの個人の差が大きく、記事の内容によっては、じっくりと時間をかけて取り組ませたいと感じることもある。事前に記事を配布したり教師が範読して説明を加えたりするなど、児童が負担を感じることなく取り組みを継続していけるよう手立てを講じていきたい。

●新聞が児童の身近な物となり、関心が高まってきているものの、実際に新聞に触れる機会の個人差は未だに大きい。家庭との連携も図りながら、新聞の有用感や必要感が高まるような働きかけが一層必要である。

●新聞の特性を踏まえた上で、様々な授業での効果的な活用の仕方について、さらに実践を積み重ねていく必要がある。文章の読み取りに生かすテキストとしての活用の他に、社会や自然に目を向けるきっかけとなる資料として、あるいは記事の中の人々の生き様について考える資料としてなど、活用の可能性を考えていきたい。

⑵中学校との連携について

○互いのシートを交換し掲示し合うことにより、他の人の考えに、より興味深く目を向けようとする姿が多くなった。小学生にとっては、中学生の深い考えや語彙の豊富さも刺激になっているようだ。

○中学生がリーダーシップを発揮し活動する姿を目にすることにより、自らが中学校に進学した姿のイメージをもつことができた。小、中で共通の活動を行うことで、中学生になったときの活動にも、戸惑いなく参加できるであろうと考える。

第２回合同編集会議（２月）
中学生が中心となって、新聞内容の話し合い

●小・中両方で取り組みやすいような記事を選定することが課題である。現在は中学校のシートをもとにして取り組んでいるが、児童・生徒自身にも記事を選ばせるなど、主体的な関わりの場を増やしていきたい。

●昨年度から、中学生に足を運んでもらい「もがりぶえ」の合同編集会議を行っている。新聞発行の主な活動を中学校にお願いしているので、小学生も主体的に関

われるよう働きかけていきたい。また各校の日程調整や準備などがスムーズに進むよう、担当者の事前の連絡、打ち合わせを行い、無理なく継続していきたい。

豊かな表現力を育むＮＩＥの実践

秋田市立東小学校
教諭　児　玉　公　生

１．はじめに

本校は、秋田駅東口近隣の住宅街に位置する児童数約470名の中規模校である。

学校教育目標は、「豊かな心をもち、自ら学び、たくましく生きる子どもの育成」であり、「確かな学力をはぐくむ授業づくり～豊かな表現力の育成を目指して～」という研究主題を基に授業改善に取り組んで４年目となる。

ＮＩＥ実践３年目となる今年度は、新聞活用を通し、さらに豊かな表現力が向上するよう実践を進めた。

２．共通の実践から

⑴ＮＩＥ推進部会、ＮＩＥ通信

学校全体で組織的にＮＩＥの実践を進めるために、昨年度から、各学年１名の教師が所属する「ＮＩＥ推進部会」を組織している。月に１度の部会では、各学年のＮＩＥタイムや授業の実践を紹介して共通理解を図ったり、翌月のＮＩＥタイムの計画を立てたりした。部会終了後は、全職員の共通理解を図るため、月に１度「ＮＩＥ通信」を発行した。

平成２７年度　秋田市立東小学校

東小NIEだより　6号

平成２７年８月２５日（火）

１　夏休み中の「きりぬき教室」について

８月４日，５日の２日間，２年生から６年生までの２５名が「きりぬき教室」に参加し，作品作りに取り組みました。秋田魁新報社の三浦ちひろ記者や，本校のたくさんの先生方がご指導くださいました。ありがとうございました。このあと，子どもたちの作品は，『きりぬきコンクール』（秋田魁新報社主催）に出品する予定です。

２　次回のNIEタイムの計画

月	日	曜日	回		内　容
9	4	金	6	1年	小学生新聞を読んでみよう
				2年	読売ワークシート「さよなら　ゆりてつのさいこさん」①
				3年	読売ワークシート「キリンの赤ちゃん」
				4年	読売ワークシート（算数）「江戸っ子には高い魚」
				5年	読売ワークシート「2018年　月への旅」
				6年	読売ワークシート「食後の昼寝で集中力向上」
月	日	曜日	回		内　容
9	18	金	7	1年	小学生新聞を読んでみよう
				2年	読売ワークシート「さよなら　ゆりてつのさいこさん」②
				3年	読売ワークシート「美容室男子　やっと公認」
				4年	読売ワークシート（社会）「万里の長城一部が消失」
				5年	読売ワークシート「避難所マーク　五輪へ統一」
				6年	読売ワークシート「守ろう自転車の運転ルール」

３　NIEコーナーについて

冬休み前までの計画です。掲示のご協力を，よろしくお願いします。

冬休み前まで	
週	担当学年
8月25日	2，3，5，7
9月　7日	1，4，6

⑵新聞委員会

子ども主体の新聞への関わりや情報発信を目的に新聞委員会を設置してから２年となった。常時活動として、ＮＩＥコーナーの掲示物（記事紹介など）作成や新聞閲覧コーナーの整理、子どものアイディアを生かした活動として、新聞見出しコンクールや切り抜きコンクールを校内で実施した。昨年に引き続き、今年も秋田魁新報社の大石記者にアドバイザーとして毎月おいでいただいた。記事スクラップのアドバイスや、校内各種コンクールの審査などをしていただいたことが、子どもたちにとって大きな励みとなった。

校内切り抜きコンクールの作品選定作業

⑶ＮＩＥコーナー

低学年玄関前に１、２年生向けＮＩＥコーナー、高学年玄関前に３～６年生向けＮＩＥコーナーを設置した。各学年や、新聞委員会、職員室の先生方のコーナーに分け

て、記事紹介やＮＩＥタイムで学習したシート、スクラップノート、コンクールの優秀作品などを定期的に紹介した。

高学年玄関前のＮＩＥコーナー

⑷ＮＩＥタイムの実施

隔週金曜日の朝学習の時間１５分間をＮＩＥタイムに設定して、ＮＩＥ推進部の計画の下、全校児童が次のような活動を行った。

【活動例】
- 記事に合う見出しを考える。
- 記事を読み、感想や考えを書く。
- 記事を読んで、ミニ討論をする。
- 「読売ワークシート」を基に、記事を読んだり考えをまとめたりする。

⑸夏休み切り抜き教室の実施

夏休み前に、新聞に関するコンクールの案内を各家庭に配付し、参加を呼びかけた。夏休み中の２日間、校内で切り抜き作品作りの講習会を実施し、２年生から６年生までの２５名が参加した。また、秋田魁新報社の三浦記者には２日間ともご指導をいただいた。

秋田魁新報社主催「第７回新聞きりぬきコンクール」には１６点の作品を応募し、６年生児童が小学校高学年の部で最優秀賞と優秀賞、４年生児童が小学校４年生以下の部で佳作を受賞した。

夏休み中にコンクールの作品作り

小学校高学年の部【最優秀賞】受賞作品

３．全国大会での公開授業から【６年生】

単元名「江戸幕府と政治の安定
～我ら歴史新聞社『鎖国編』～」

［授業の概要］

ＮＩＥの３分野である「新聞活用学習」「新聞機能学習」「新聞制作学習」を意識し、広い視野から社会的事象を捉え、思考を広げたり深めたりすることをねらった学習である。子どもたちは、前時までに徳川家光の鎖国政策とその影響について様々な立場で記事を書き、１枚の新聞にまとめた。本時では、その新聞を基に「鎖国政策を支持するか、しないか」というテーマで話し合いを進め、それを受けて「ついに鎖国完成」に添える脇見出しを考える活動を行った。

［話し合いの様子から］

子どもたちが、話し合いの中で自分の考えを確認したり、考えの変化を表現したりすることができるよう、操作しやすい２色のカードを準備した。話し合いが進むにつれて、子どもたちが鎖国政策を多面的に捉えながら思考を深めていく姿が見られた。

本単元で身に付けたい力

ＮＩＥの３分野	本単元での活動	メ　リ　ッ　ト
「新聞制作学習」（新聞に学ぶ）	○鎖国について、様々な視点で記事を書く。 ○５Ｗ１Ｈを意識して記事を書く。 ○記事に見出しを付ける。 ○新聞の構成を考える。	・社会的事象について様々な視点で考えることができる。 ・情報を主体的に捉えることができる。 ・視点を明らかにしながら取材（調べる）することができる。 ・社会的事象の意味について、思考・判断したことを適切に表現することができる。 ・構成を考えたり、見出しを付けたりするために、社会的事象についてさらに深く考えることができる。
「新聞機能学習」（新聞を学ぶ）	○主語（視点）を明確にする。	・視点を明らかにしながら、記事を書いたり読んだりすることができる。
「新聞活用学習」（新聞で学ぶ）	○記事を読み、自分の立場を明らかにしながら考えをまとめる。 ○互いの考えを出し合う。	・社会的事象に主体的に関わることができる。 ・多様な考えにふれることで、社会的事象を比較・関連・総合して考えることができる。

歴史新聞作成シート

子どもが作成した新聞

東っ子歴史新聞　2015年（平成27年）7月31日　金曜日

東っ子歴史新聞

発行者
秋田市立東小学校
6年2組歴史新聞社

ついに鎖国完成

徳川家光を中心とする江戸幕府は、貿易相手国をオランダと中国に限り、貿易船の出入りを、幕府の港町である長崎のみとした。これにより、鎖国が完成した。長崎には、出島や唐人（中国人）屋敷がつくられ、役人や一部の商人しか出入りができなくなった。このあとの貿易は、幕府だけが行うことになった。（朝鮮、蝦夷地、琉球とは付き合いがあった。）

貿易禁止で大名なげく

大名たちは、自由に貿易をすることができなくなった。「鎖国令」によって、今まで通りの貿易が禁止されたからである。

このため、武器の輸入ができなくなり、貿易で得られる利益も幕府に独占された。また、決まりを破った場合は、処罰が下されることになった。

ある大名にインタビューすると「新しい物や、武器が手に入らない。お金をもうけることも出来ない。このままでは我々の力が弱まってしまう。」と困った顔で話していた。

幕府がオランダと貿易を行った「出島」

ふるさとに帰れず…

海外に住む日本人は、日本に帰ることができなくなった。なぜなら、鎖国令によって、日本に帰ると死罪になることが決まったからである。

信者が出した答えとは

～神を信じる？未来を選ぶ？～

キリスト教信者が、鎖国によって大変な状況になった。幕府が、キリスト教信者を見つけるために絵踏みを行ったからである。

キリスト教は「神の下にいる者は、みな平等」という考えだったため、幕府の身分制度がくずれる可能性があった。

絵踏みは、聖母マリアやキリストがほられた板を踏ませて信者かどうかを見極めるもので、キリスト教を捨てなければ死罪とされた。

絵踏みに使われた「キリスト像」

その一方で、隠れキリシタンとなり、マリア観音をつくって、おがむ人もいた。百姓たちの中には、おがんでいるキリスト教信者を発見すると密告し、賞金をもらう人もいた。この弾圧は、明治時代まで続いた。

鎖国前は、東南アジアとの貿易がさかんに行われたので、東南アジア各地に、日本人が暮らす日本町ができてにぎわっていた。

日本に家族を残してきたある日本人に気持ちをたずねると「家族に会いたい。このまま家族に会えずに死ぬのは嫌だ。」と暗い表情で語った。

「幕府は強し」農民自覚

1637年、約3万7千人のキリスト教信者や農民たちが、島原・天草地方で一揆を起こしたが、幕府軍の総攻撃によりしずめられた。凶作に加え、重い年貢の取り立てや労働、キリスト教信者に対する弾圧に耐えきれなくなったことが、一揆の原因である。

一揆軍の総大将は、神の子と呼ばれた天草四郎というキリスト教信者の少年で、幕府軍の総大将は松平信綱。

一揆軍は原城に立てこもったが、幕府軍の総攻撃を受けて全滅した。この後、キリスト教信者は絵踏みなどによって徹底的に弾圧された。また、一揆は非常に少なくなった。

一揆軍の総大将
天草四郎（16）

人々の暮らし不自由に

人々の生活が、鎖国によって不自由になった。幕府しか貿易ができなくなったため、外国の文化にふれる機会が少なくなった。砂糖、生糸、絹織物などの輸入品も簡単に手に入らなくなった。

また、キリスト教信者を見つけるため、毎年正月に絵踏みが行われ、人々は必ず参加しなければいけなくなった。

ある町人にインタビューしたところ、「正月は忙しいから正直迷惑だが、幕府の言うことだから仕方がない。」と不満そうに語った。

鎖国前までの輸入品

「日本町」のあったところ

〈社説〉

［子どもたちの発言から］

【支持する】

・貿易の独占により幕府の力が強まり、大名が反乱を起こすことができなくなって、平和な時代が続いたから。
・大名が、武器を輸入したり利益を上げたりすることができなくなって力が弱まると、争いがなくなるから。
・キリスト教が広がると身分制度がくずれて、人々が幕府の命令を聞かなくなり、世の中が乱れるから。
・外国の侵略を防ぐことができたから。
・日本独自の文化にふれる機会が増え、さらに発展したから。

【支持しない】

・多くのキリスト教信者の命が失われるなど、人の命を粗末にしすぎたから。
・海外の日本町に住む日本人が帰国できなくなったから。
・幕府以外は得するどころか、生活が不自由になったと思うから。
・外国の新しい文化や知識が入らず、日本の発展が遅れてしまうから。

【どちらとも言えない】

・たくさんの命がうばわれることもあったが、結果的に平和な時代が２６０年も続いたから。

［子どもが考えた「脇見出し」］

・「日本の安定保つ政策」
・「日本、平和への一歩」
・「争い減少　平和な国へ」
・「幕府の力　さらに強まる」
・「幕府笑う　大名涙」
・「幕府 OK　大名、百姓 NO」
・「皆が迷惑　でも平和のため？」
・「だが人々から不満の声も」
・「身分くずれず　平和な世に」
・「人々が知らない　かくされたねらい」

［授業の振り返りから］

・最初は貿易が理由で支持しなかったが、身分制度がくずれなかったことで結果的に平和な時代が続いたので、支持に変わった。
・鎖国は悪いことしかないと思っていたけれど、日本文化が栄えたり、平和が続いたりしたので、いい面もあると思った。
・最初は、帰国できない人がいたから反対だったけれど、反乱がなく平和な世の中になったという友達の意見に納得した。
・マイナスイメージしかなかったけど、友達の意見を聞いて、日本が１つにまとまったから結果的にプラスだと思った。
・幕府以外にいいことはないと思っていたけれど、深く考えてみると、みんなにとっていいことだと思えてきた。
・最初よりも「支持」の気持ちが強くなった。友達の「日本文化の発展」や「平和」という考えに納得した。
・最初は支持しなかったけれど、友達の両方の意見を聞いて、最後は半分半分になった。「自由に貿易できないぶん、日本文化が発展する」という考えに共感した。
・最初は、人々の生活が不自由になると思い「支持しない」だったが、話し合いをして、平和な国を優先した方がいいと思い、「支持する」に変わった。
・最初は支持しなかったけれど、友達の意見を聞いて考えが変わった。もし、外国がせめてきたら犠牲者がもっと増えるので、やっぱり、平和で安定した世の中にするためにも、鎖国は必要だったと思う。
・はじめから支持していたが、他の支持する人たちの意見を聞いて、より考えが深まり、反乱がないことで世の中が平和になるというのにとても納得した。支持しない人たちの意見も参考になった。
・友達の「人々は苦しい生活をしたが、外国から攻撃されて死んでしまうよりはいい」という意見を聞いて、「支持する」に変わっ

た。でも、命を粗末にすることはよくないと思った。

［単元の最後に書いた「社説」から］

・鎖国は、日本を安定させるためのよい政策だと思ったし、家光の冷静な判断には驚いた。しかし、鎖国の影響で命を落とした人々もいるので、全てがよかったとは言い切れないと思った。
・鎖国によって多くの人が苦しんだが、その後は大きな争いも起こらず、日本は平和になったので、素晴らしい政策だと思う。家光は、素晴らしい将軍だと思う。
・徳川家光の計画は、直しようがないほど完璧だと思った。参勤交代や鎖国によって困った人もいたけれど、安定したことを考えると、決して悪いことではないと思った。
・大名の力を弱め、幕府の力を強めるのはいいとしても、他の人々まで苦しめるのはよくないと思う。このあと、どのように鎖国が終わるのかを調べていきたい。
・この学習を通して、徳川家光のしたことはよかったと思う。参勤交代や鎖国などをしたことで、国が安定し、不安な世の中から安定した世の中に変わったからだ。
・人々の暮らしが不自由になったり、死罪になる人がいたりと大変なこともあったが、鎖国により平和な世の中が続いたので、徳川家光は、勇気のいるよい判断をしたのだと思う。
・徳川家光が鎖国をしなければ、一揆や外国からの攻撃がたくさんあったと思う。鎖国をしたから、日本が安定し、江戸幕府が続いたので、平和にする手段としてはよかったと思う。

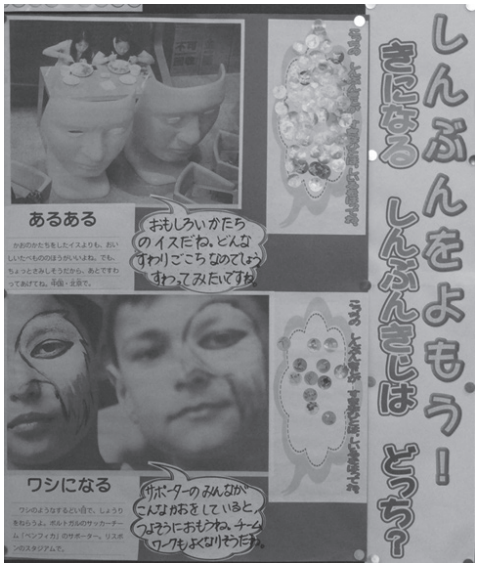
４．各学年の実践から

【１年部の実践】

○ＮＩＥタイム、ＮＩＥコーナー

「好きな記事の写真を選ぼう」

平仮名をまだ十分に学習していない子どもたちも新聞に興味をもつことができるよう、ＮＩＥタイムの際に、興味をもった写真を新聞から選ぶ活動から始めた。ＮＩＥコーナーにも新聞に掲載されていた２枚の写真を並べ、どちらか気になる方を選んでシールを貼るようにしたことで、子どもたちは意欲的に掲示を見るようになった。興味のある写真を選ぶことは、子どもたちの興味関心を広げるよいきっかけとなった。



低学年ＮＩＥコーナーの掲示

【２年部の実践】

○NIEタイム「気になる言葉を見つけよう」

昨年は、新聞から「すてきだな」「いいな」と思う言葉を見つけてサイドラインを引き、紹介し合う「素敵な言葉を見つけよう」という活動を行った。今年は、新聞の中から「気になる言葉」を見つけ、理由を書く活動に発展させた。２回のＮＩＥタイムを利用し、１回目は「気になる言葉」を見つけてサイドラインを引く活動、２回目はその中から特に心に残った言葉を選び、理由を書く活動を行った。

＜子どもが選んだ言葉と理由の例＞

・「命を学ぶ」⇒人の命を大切にすることは大事だと思ったから。
・「未来を作る人」⇒未来がどうなっているか知りたくなったから。ぼくたちも未来を作る人になるかもしれないから。
・「おもしろいと思うことは何でもやったほうがいい」…とてもいい言葉で、いろいろなことに挑戦したくなったから。

○生活科「校外学習後の新聞作り」

ＪＲ奥羽本線を利用して金足農業高校を訪問、見学し、学んだことを新聞に表す活動を取り入れた。子どもたちは、学んだことの中から伝えたいことを選び、挿絵や感想を入れて分かりやすくまとめることができた。

子どもの作品（校外学習新聞）

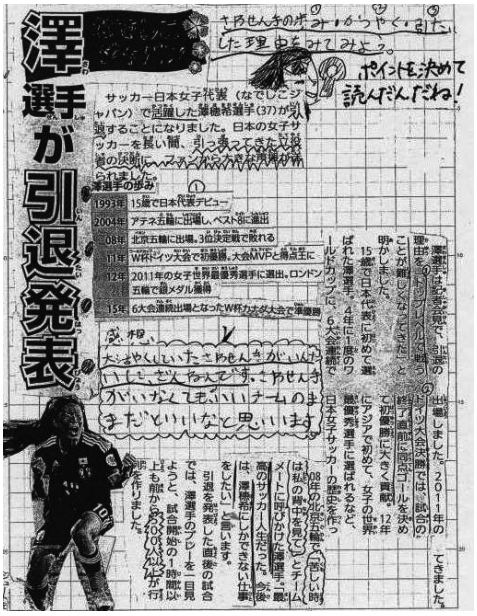
【３年部の実践】

○総合的な学習「ステキ発見新聞作り」

施設訪問を通して見つけた「まちのステキ」を、パソコンを使って新聞にまとめる活動を行った。活動を通して、子どもたちは、見出しや記事、編集後記など、新聞の基本的な仕組みを身に付けることができた。

○家庭学習における取り組み

ＮＩＥタイムや校内での新聞切り抜きコンクールをきっかけに、新聞を用いた家庭学習に取り組む子どもが多く見られた。興味のある記事を読んで感想や考えを書いたり、見出しに関連する内容に線を引いたりするなど、新聞に関心をもつ子どもが増えた。



子どもの作品（家庭学習ノート）

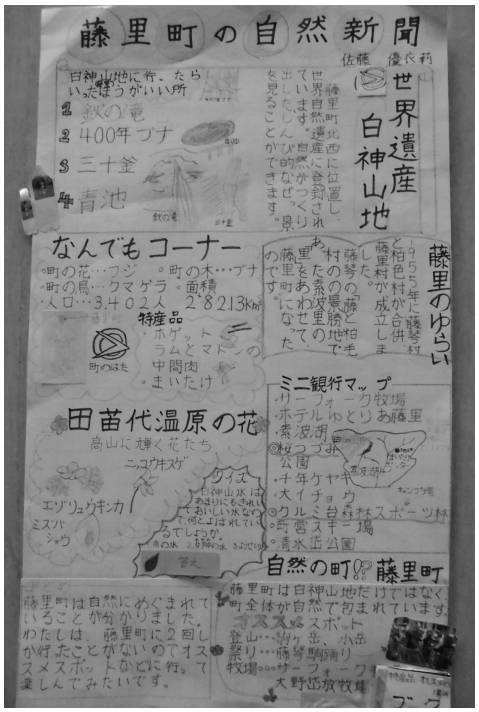
【４年部の実践】

○社会科「もっと知ろう秋田県～わたしがおすすめする市町村新聞」

県内の市町村の魅力を紹介する新聞をまとめる際、秋田魁新報社の三浦記者に、見出しの付け方について指導していただいた。三浦記者には「読者に読んでみたいと思わせるもの、見ただけで記事の内容がわかるものがよい見出しである」と教えていただいた。

【見出し例】
・自然いっぱい！三種町
・み力満さい！男鹿半島
・やっぱり横手が一番！
・たくさんあるよ、能代のみ力
・三種町の有名ガイド
・自然も生産量もいっぱい！横手盆地

新聞記者のアドバイスにより、子どもたちは、相手意識や読みやすさ、レイアウトなどを工夫しながら新聞を作ることができた。



子どもの作品

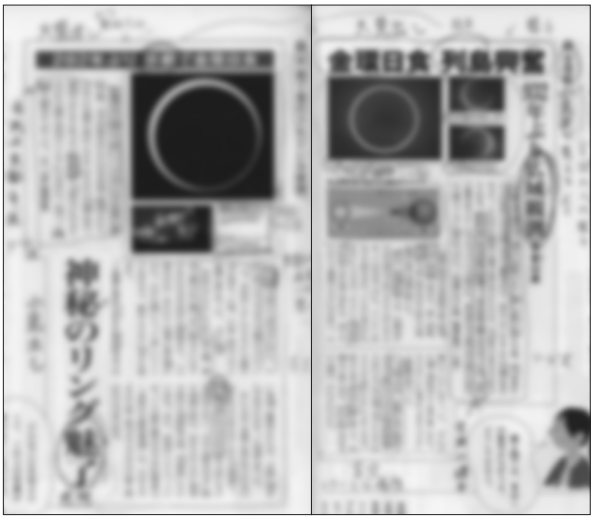
【５年部の実践】

○国語科「新聞を読もう」

同じ出来事を伝える２紙（全国紙と地方紙）の記事を読み比べて、見出しや写真、数値の用い方の違いを見付け、その理由を考える活動を行った。

「全国紙」…	日本全国の人が読めるようになっている。東京が中心の記事が多い。
「地方紙」…	地元の人の目線で書いている。地元に関係する数字が使われることが多い。

子どもたちは、新聞の構成や効果を理解したことで、記事を選んだり、記事の比べ読みをしたりと、必要に応じたいろいろな読み方ができることを学んだ。



全国紙と地方紙の比較

５．成果と課題

○子どもたちの新聞に対する関心や世の中の出来事に対する関心が高まり、視野が広がってきたとともに、主体的に情報に関わるようになってきた。

○話し合い活動の際に、新聞から得た情報や知識を根拠とする姿、作文や新聞作りの際に、新聞の構成や機能について学んできたことを進んで用いる姿から、子どもたちの表現力が豊かになってきたことが感じられた。

○ＮＩＥコーナーの掲示や新聞切り抜き教室の呼びかけ、新聞委員会の取り組み、全国大会の様子が新聞に紹介されたことが、保護者の関心を高めることにもつながった。

●教師の意図的な情報収集や新聞活用、日常の声掛けが、子どもの興味・関心に大きな影響を与えることが、３年間の実践で明らかになった。今後もＮＩＥを意識した教材研究や、記者とのつながりを大切にしながら活動を継続していきたい。

「ことばの力」を付けるためのＮＩＥの取り組み

横手市立朝倉小学校
教諭　佐々木　明　人

１．はじめに

本校は、研究主題を「みんないい顔　かかわりあい　ひびきあう　あさくらっこ」とし、ことばを通して他と関わり合って、学びに楽しみや喜びを感じる子どもの育成を目指している。ことばの三本柱として「読解力の向上」「図書館活用」「ＮＩＥの推進」を掲げている。今年度は、ＮＩＥ実践指定３年目である。７月のＮＩＥ全国大会では、本校６年生が総合的な学習の時間での授業を公開した。これまでの取り組みの一端を提案することで、新聞活用による学習の成果を感じると共に、今後の課題を見付けることができた。

２．ＮＩＥ実践のねらい

○子どもたちの新聞に対する興味や関心を高め、社会や地域・文化などいろいろな分野に目を向けたり考えたりする機会を作り、新聞に慣れ親しませる。

○新聞記事を学校の授業や諸活動に活用し、「聴いて、考えて、つなげて話す」ことを通して、読解力を育てる。

３．具体的実践内容

⑴子どもたちの新聞に対する興味・関心を高めるための学習環境の整備

①ＮＩＥコーナー（ほっとニュースサロン）の整備

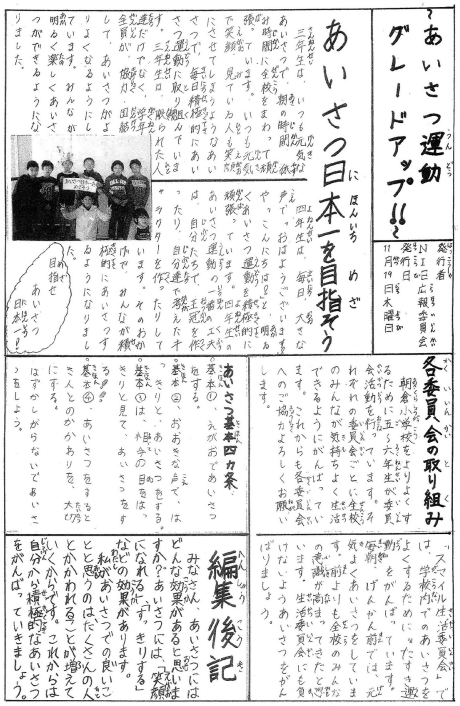
②新聞閲覧台の設置

③学級・学年ＮＩＥコーナーの整備

⑵新聞記事の諸活動での活用

①広報委員会によるＮＩＥ活動

児童会の委員会活動を通して、子どもの主体的なＮＩＥ活動を促した。今年度はもっと新聞に目を向けてもらおうと、ＮＩＥ広報委員会が、昼の放送で、新聞記事からクイズを出した。また、児童会で行っているあいさつ運動を全校に紹介する新聞を作り、全校へ配布した。



広報委員会で作成した新聞

②朝のＮＩＥタイム

朝の活動にＮＩＥタイムを月に数回設定し、新聞を活用した活動を行った。

⑶授業での新聞の活用

【単元名】「ドリームプロジェクトⅠ
～将来の秋田を考えよう～」（６年総合）

【本時のねらい】

活性化プロジェクトで伝えたい秋田の魅力やよさについて、中間発表や新聞記事をもとに意見交流をし、考えを深めることが

できる。

【本時の展開】

①本時の学習課題を確かめる。

〈学習のめあて〉
活性化プロジェクトで伝えたい秋田の魅力やよさについて考えを深めよう。

〈今日のゴール〉
秋田を活性化させるために、〇〇が大切である。※秋田のよさや魅力について、意見交流を通して再確認したことをまとめる。

②プロジェクト案を確認する。

・本時の話し合いを深めることができるようなグループのプロジェクト案を意図的に選び、紹介させた。

③新聞記事をもとに、活性化プロジェクトで大切にしたいことについて話し合う。

・秋田魁新報「何もない秋田?」を事前に読ませ、感想をもたせておいた。
・体験や収集した新聞記事をもとに発言できるように準備させておいた。
・新聞記事やインタビューしてきたこと、調べたことに立ち返らせながら、「〇〇で聞いて」「ここにこう書いてあって」という話し方で話すようにさせた。
・話し合いを通して、活性化プロジェクトでは、自分たちが秋田のよさや魅力を知り、伝えていくことの大切さに気付かせるように話し合いをつなげていった。

④本時の学習を振り返り、感想を書く。

・本時の話し合いを受けて感じたことを振り返り、シートに書かせた。

本単元は、将来の秋田を魅力あるふるさとにするために、自分たちも社会活動に参加しようという気持ちを醸成しつつ、学びを通してふるさと秋田に愛着をもち、自分の生き方と重ねながら、人や物事に積極的に関わっていこうとする児童の学びの姿を期待して設定した。単元を通して、新聞を活用した。課題設定の場面では、こどもの日の新聞記事を提示し、秋田県の人口減少率及び子どもの割合が全国最低であるという事実を読み取らせ、将来の秋田に対する危機感をもたせた。そこから、秋田を活性化させるために自分たちにできることはないかという課題意識をもたせることができた。課題を追究する段階では、スクラップする活動を行った。自分の課題と関連付けながらスクラップすることで、思考が働いたり記事からさらに問いをもったりすることができた。

本時では、それぞれが考えた秋田活性化プロジェクトを見直し、その根底を支える人々の思いについて、新聞記事を通して考えさせたかった。話し合いが授業のねらいから逸れてしまうときの軌道修正としての助言ないし発問のタイミングが難しかった。話し合いを効果的に進めるために、出番を早めたり修正したりする必要があった。

ＮＩＥ全国大会の様子

【単元名】「かたかなをみつけよう」
（１年国語）

新聞から、片仮名で書く言葉を見付けて

短冊に書き出した後、グループの友達が見付けた片仮名の言葉と比べた。同じ言葉を見付けたり、スポーツの名前・国の名前・外国の人の名前などの共通点を見付けたりして、最後に全員で確認した。

【成果と課題】

○片仮名の学習が始まって間もない頃だったので、興味をもって取り組むことができた。

△片仮名の言葉をたくさん集めるだけでなく、共通点を見付けるところまで挑戦してみたが、1年生にとっては難しかった。教師側から「スポーツの名前はなかった？」と聞くようにして確認すると、見付けることができた。

【単元名】「片仮名で書く言葉」（２年国語）

新聞から片仮名で書く言葉を探し、その言葉を使った文を作った。片仮名を集める視点として、「動物の鳴き声」「音」「外国から来た言葉」「国や外国の人の名前」の４つに絞った。

【使用した新聞記事】

朝日小学生新聞・毎日小学生新聞（数日分）

【成果と課題】

○視点を絞って片仮名集めをしたことで、新聞の中で外国から来た言葉がたくさん使われていることに気付いた。カタカナブック作りにも意欲的に取り組んだ。

△音や動物の鳴き声が新聞ではほとんど見付けられず、教科書や本から探した。事前に新聞記事を探す必要があった。

【単元名】「言葉を分類する」（３年国語）

新聞の記事の中から動詞・名詞・形容詞に分類される言葉を見付け、ノートにまとめる活動を行った。

【使用した新聞記事】

朝日小学生新聞・毎日小学生新聞

【成果と課題】

○児童自身が興味のある記事を読んだことで、教科書の例文よりも意欲的に活動に取り組むことができた。

△新聞で使われている言葉の意味が理解できず、名詞以外の言葉の分類ができない児童が複数いた。

【単元名】「昔から今と続くまちづくり」（４年社会）

種苗交換会に関する新聞記事を読み取ることを通して、昔の人が郷土のために力を尽くしてくれたことが今につながっていることを具体的に知り、興味関心をもたせて調べる意欲につなげた。

【使用した新聞記事】

「豊かな実り、人足絶えず」

（秋田魁新報 2015.11.2）

【成果と課題】

○今年138回を迎える「種苗交換会」が、どんな目的でどんなことをしているか写真や記事から読み取ることで、この会を始めた人やその背景に興味をもつことができた。

○先人の努力が今の自分たちの生活に役立っていることを考えることができた。

○展示されているものやそれを真剣に見ている人の表情などがよく分かる大きな写真があり、どのような会なのかを、行ったことがない児童でも想像しやすかった。

【単元名】「横手の魅力、再発見」

（５年総合）

横手について調べたことを、「魅力を伝える」という目的をもって新聞にまとめ、友達や保護者、地域の人、観光客に伝えた。

【使用した新聞記事】

「道の駅十文字の農産物直売所」

（秋田魁新報 2015.4.8）

「社説　打って出る気概に期待　横手十文字直売所」（秋田魁新報 2015.5.26）他

【成果と課題】

〇調べ学習としての資料、これからの横手について考えるための課題を見付けるための資料として新聞を活用し、横手のよさやこれからの課題について問題意識をもって考えることができた。

△これからの課題について考える際、新聞記事の内容が難しく、自分の課題として捉えることが難しいものもあった。

「横手の魅力」新聞

【単元名】「未来がよりよくあるために」

（６年国語）

未来の社会についての意見文を書いた。自分の意見の根拠となる資料を新聞から探した。新聞記事をもとに考えたことを再構成し、意見文として画用紙にまとめた。

【使用した新聞記事】

「人種差別はレッドカード」（朝日小学生新聞 2014.9.9）

「アメリカで今も黒人差別」（毎日小学生新聞 2014.9.2）

【成果と課題】

〇根拠となる資料を新聞記事に絞ることで、調べ活動がスムーズであった。特に平和に関する記事は、戦後70年と言うことで数多く、見付けることができた。

△テーマによっては、自分の考えの根拠になる新聞記事を探すのに難儀している児童もいた。

４．おわりに

⑴成果

・全校体制で取り組み、新聞が授業に活用されている。低学年から新聞に親しむことで、新聞に対する抵抗が少なくなっていると思う。新聞を読むことで、図表や論理的・説明的文章など多様なテキスト形式に触れることができていると思う。

・ＮＩＥノート等を活用した新聞切り抜きを家庭と連携して、家庭学習で取り組むことにより、自分の考えを話したり書いたりするなど簡潔に表現する力が付いてきていると考える。

⑵課題

・新聞記事の内容が難しく、調べ活動の資料として探す場合、自分の課題と関連付けることが難しい児童もいる。教師の方である程度探しておいて、提示するなどの工夫が必要である。

・年々、家庭での新聞購読の割合が低下してきている。パソコンやスマートフォン

の普及でインターネットを通して情報を得る家庭が増えてきている。メディアの特性について児童や家庭に知らせると共に、学校で新聞を読む機会をもっと増やす必要があると考える。

学年に応じた言語活動の充実を図るための新聞の活用

大館市立成章小学校
教頭　安　原　幸　男

1．はじめに

本校は、大館市東部に位置する児童数99名の学校である。研究主題を「言語活動の充実を図る学習指導のあり方」として、算数の学習を中心に、各教科の学習において、言語活動の充実を図る授業や活動を繰り返し実践し、児童の伝え合う力を育成することを目指して取り組んできた。

ＮＩＥ実践活動への取り組みは、今年が４年目である。児童が新聞に触れ、活用する機会を増やし、言語活動の充実を図るための一環として取り組んできた。

2．各学年の実践から

【１年部】

○国語「かたかなをあつめよう」

かたかなを習い、かたかな図鑑を作って、一人ずつこつこつと集めてきたが、語彙に広がりがなかった。そこで、新聞のチラシを活用して、カタカナの言葉集めをした。チラシは絵がついているので、漢字が分からなくても、意味を理解しながら集めることができた。また、スーパーや衣料展、ホームセンターなど教師がチラシを意図的に選んだので、様々な言葉が集まった。集めた言葉を短冊に書き、なかま見つけをして、「たべもののなかま」「ふくのなかま」など、分類も学習した。

【ペアで見つけたかたかなを囲む】

○国語「ものの名まえ」

日常生活の中の言葉を、りんご・バナナ・みかんは「一つ一つの名まえ」、くだものは「まとめてつけた名まえ」として、言葉の分類を学習した。活用問題として、チラシを使って、「まとめてつけた名まえ」を考える学習をした。チラシは、食品・日用品・工具・衣料など、最初から分類して配置されているため、低学年でも分類しやすかった。

【一人一人まとめてつけた名前を考える】

【２年部】

「かたかなで書くことば」

片仮名で書く言葉の種類を学習し、教科書に載っている片仮名の言葉以外を新聞の中から探した。外国名や地名、外国人の名前等がたくさん見つかり、意欲的に活動していた。この後、見つけた片仮名を使った文づくりへと発展させた。

【かたかなの言葉さがし】

○国語「春（夏・秋・冬）がいっぱい」

季節に関わる言葉を探す活動で、新聞を用いた。文字だけでなく、写真や広告からも情報が得られ、既知の言葉以外に語彙を増やすことができた。

２年生にとって、新聞は読めない文字も多く、あまり身近な物ではなかったが、このような学習に用いることによって、地域の行事や季節の衣食住について理解も深まり、楽しく学習することができた。

【広告を活用したたし算の学習】

【３年部】

○総合的な学習の時間「取材と新聞作りを体験しよう」

秋田魁新報社の記者の方から、新聞が出来るまでの過程や新聞の書き方について学び、きりたんぽ祭りで取材したことをもとに新聞作りに取り組んだ。

選択した体験活動ごとにグループで取材活動を行った。実際に児童が取材やインタビューができるので意欲的に取り組むことができた。新聞作りは、取材したことをもとに親子で行い、実際の新聞作りの基本となる、見出しやリード文の書き方を分かりやすく学ぶこどかできた。

３年生なりに、集めてきた記事を集約してまとめるよい機会となった。

○社会科

「はたらく人とわたしたちのくらし」

校外学習でスーパーマーケットを見学をした。店内やバックヤードの様子を見せていただいたり、店ではたらいている人にインタビューしたりし、分かったことや気づいたことなどを新聞にまとめる活動を行った。児童は自分が一番伝えたいことを選んで記事を書き、読み手を引きつけるような見出しを考えることができた。

【取材したことをもとに新聞作り】

【４年部】

○国語「新聞を作ろう」

グループごとに「クラブ活動新聞」や「新１年生しょうかい新聞」や「部活動新聞」などテーマを決めて取り組んだ。インタビューやアンケートを取ったり、グラフや絵などで表現を工夫したりしながら表した。

【記者の方から記事の書き方を学ぶ】

○総合的な学習の時間

「取材と新聞作りを体験しよう」

秋田魁新報社の記者の方から、新聞が出来るまでの過程や新聞の書き方について学び、きりたんぽ祭りで取材したことをもとに新聞作りに取り組んだ。

親子で興味をもった店やブースなどに赴き、取材をしたり新聞作りをしたりすることができた。昨年度の様子に比べると、見出しやリード文の表現が豊かになった作品が多く見られた。

○国語「アップとルーズで伝える」

学習したことをもとに、新聞の写真に目を向け、記者が何を伝えたいのかを想起し、見出しやリード文、写真説明などから、詳しく読み取った。本校に各社の新聞があるため、同じ出来事を伝える記事文や写真を比べることもでき、新聞への興味が高まった。

【５年部】

○国語「新聞を読もう」

同じ事件・トピックスを扱った複数の新聞記事を比較検討する活動を行った。ニュースソースの違いや、記事を書いた記者の事象に対する印象の違い、発行する場所によって、記事の内容がだいぶ変わってくることを学習した。

○国語「想像力のスイッチを入れよう」

客観的事実のみを報道しているのか、記者の印象を交えて報道しているのか、新聞記事の他、同様の事象を扱っている雑誌などと比較検討する活動をした。

○社会「私たちの生活と食料生産」

ＴＰＰによる国内や秋田県内への影響について調べ、その長所や短所についてまとめ、これからの食料生産の理想的な姿について考えた。

○社会「環境を守るわたしたち」

「自然災害を防ぐ」

大規模な自然災害（噴火、水害）などの写真、影響などを紹介し、防災について考えた。

【特別支援】

○国語「複合語を見付けよう」

５年の国語の教科書にある「複合語」の学習の後に、一日の新聞に複合語がどのく

らい使われているのか興味をもった。児童は、新聞に線を引いてからノートに書き出した。漢字だけの組み合わせでできた言葉や、カタカナ混じりの言葉、漫画に出てくる言葉などとても楽しく学習できた。
（児童の感想）
　複合語は、新聞にもいっぱいあることが分かったし、教室にもいっぱいあることが分かりました。複合語ってよく分からなかったけれど、新聞で調べてみたらこういうものを複合語というのだと分かりました。

○国語「俳句をよもう」
　「日常を十七音」で俳句の学習をした。火曜日の新聞に俳句コーナーがありたくさんの俳句を読み比べながら、俳句について理解を深めることができた。知らない言葉について確認をすることができた。

【６年部】

【政治に関係ある記事探し】

○国語「未来がよりよくあるために」
　いろいろな国に関するニュースの中から、復興支援や紛争に関する記事を探し、その見出しを書いて、新聞からその様子を調べてノートにまとめた。

○総合的な学習の時間「新聞にまとめよう」
　「めざせ！成章魅力発見隊」の新聞作りにおいて、目を引く見出し、キャプションの描き方などを参考にした。特に新聞に掲載されている広告部分を参考にした。

○「わたしたちの生活と政治」
　政治に関係ある記事を探し、その様子のおおよそを調べた。

○社会「世界の未来と日本の役割」
　新聞記事に登場する外国の国名を探し、地図帳を活用して、位置や特色、日本との関わりの様子を調べた。

【新聞から熟語探し】

○国語「熟語の成り立ち」
　漢字で数文字を構成する言葉を探し、その組み合わせを調べた。
＜例＞宇宙飛行士　→宇宙＋飛行＋士

３．成果と課題

○成果
・新聞を活用した取り組みとして朝の会でのニュース発表、学習活動（新聞づくり）に取り入れることで、新聞に関心をもつ子どもが増えてきた。
・図書室の新聞コーナーにより身近な記事に関心を寄せ、学習内容に沿った内容につい

て調べまとめることができた。
・中学年で行っている新聞づくりは取材活動、編集活動を行う貴重な体験である。次年度も継続して実施していきたい。

●課題
・新聞コーナーを歴史・政治経済、地域（大館市）に分けて調べやすいように掲示を工夫していきたい。
・取材活動のまとめとして、新聞づくりに活用するため、サンプルデータ（標題、画像）を保存し、活用していきたい。

「情報活用能力と表現力を育むＮＩＥの実践」

鹿角市立八幡平中学校
教頭　駒　木　利　浩

１．はじめに

本校は，県北部の内陸側に位置した，全校生徒９９名，各学年１学級（特別支援学級１年２学級を除く）の小規模校である。

生徒たちは，「素朴な心・やり抜く力・敬う気持」の校訓，兼学校教育目標のもと，「いい顔，いい声，いい動き」を合い言葉に，互いに切磋琢磨し合いながら充実した学校生活を送っている。

これまで取り組んできた教育ＩＣＴの活用に加え，今年度，日本新聞協会からＮＩＥ実践指定校としての認定を受け，情報活用能力と表現力を育むための，新聞活用の在り方について模索してきた。

初年度ではあるものの，ＮＩＥコーナーの設置や授業実践などにより，生徒たちの新聞記事に対する関心は高まりつつある。

３Ｆ中央ホールＮＩＥコーナー

２．実践内容

⑴ＮＩＥコーナーの設置

校内３箇所にＮＩＥのコーナーが設置され，新聞記事が生徒たちの目に自然に留まるような環境づくりに努めている。

また，校内に訪れる保護者や地域住民に対しても，本校における新聞を活用した教育実践について理解していただくことができるよう，その動線にコーナーを設けるように配慮している。

①エントランスホール

生徒玄関を入り教室に向かう途中，まず目に留まるのが，エントランスホールの掲示板に貼られた新聞記事である。

この場所では，新聞各紙に取り上げられた学校行事や部活動，地域行事など生徒たちが関わった記事をラミネートして貼付している。できるだけ新しい記事を上部に配置するよう留意するとともに，その記事が最新版であることが分かるように「ＮＥＷ」のプレートを記事の上部に貼るようにしている。

新聞記事として取り上げられた，学校行事や自分たちの活動を目にし，新聞がより身近なものとして感じられるようになってきている。

エントランスホールＮＩＥコーナー

②教室棟３Ｆ中央ホール

各学年の教室は，３階に位置しており，

中央にはテラスとホールがある。

ＮＩＥ実践校の指定を受け，教室棟中央ホールに閲覧コーナーを設けた。

また，既に購読している新聞に，多いときには，５紙が加わり８紙となるため，閲覧コーナーに加え，閲覧台を作製，設置することにした。

毎日，昼に新聞が入れ替わるため，生徒たちの多くは，昼休みの時間帯に閲覧しているが，月曜日には，前日までの各種大会の結果や，スポーツ関連の記事からの情報を得るために，朝から新聞を見たがる生徒もいる。

自作の新聞閲覧台

昼休みに新聞を閲覧する生徒

コーナー及び閲覧台設置当初は，なかなか生徒たちが寄りつくことがなかったが，中学校総体あたりから，他地区の情報を得ようと閲覧台の新聞は，スポーツ欄が開かれるようになった。

その後，授業で扱われるようになったこともあり，徐々にではあるが様々な記事が読まれるようになった。

中央ホールのコーナーでは，一人で読みいっている生徒もいれば，友だちと記事の内容について話している生徒たちがいるなど様々である。

③校長室前ＮＩＥコーナー

校長室前に設置されたＮＩＥコーナー

校長自らも，校長室前の掲示板を活用して新聞記事を活用した教育実践に取り組んでいる。

貼付される記事は，新聞各紙の一面のコピーで，記事の取扱い方や，配置に関心をもってもらうために，朱線を引くなどし，生徒たちの必要感に応じたタイムリーな記事を掲示している。

また，時にはちょっとしたクイズやメッセージもあり，生徒たちは校長室前で足を止めることが多くある。

⑵委員会活動の充実

新聞の入れ替えや閲覧コーナーの整理整頓は図書委員会が行っている。

毎日，給食終了後に，閲覧コーナーから前日の新聞を職員室の各紙毎のボックスに移し，当日の新聞を閲覧コーナーに再び配置する。

この作業を当番制で毎日忘れずに繰り返し行っている。単純な作業であっても，昼の時間帯は，新聞を読みに来る生徒が多い

ため忘れてはならない仕事である。

小規模校においては，各委員会の人数が少ない上，一人の生徒が多くの仕事を抱えている場合がある。本校の図書委員も，図書の整理や貸し出し，図書カードの確認など忙しくしているわけであるが，加えてＮＩＥコーナーの担当も責任をもって務めてくれている。担当しているということもあり，図書委員の新聞に対する関心は高まってきている。

⑵授業におけるＮＩＥの実践

①国語科における授業実践

国語科では柳沢昌人教諭が，１年生の授業で，新聞に親しもう「気になる記事を紹介しよう」という授業実践に取り組んだ。

事前の調査では，自宅で新聞を読んだ経験がある生徒が少なく，新聞の基本的な特徴を学ぶ必要があった。グループ発表までは，全体を通して５時間という単元構成になった。

新聞の基本的な特徴を伝える柳沢教諭

新聞について基本的な特徴を学んだ後，生徒たちは過去の新聞から，それぞれ「気になる記事」を見付け出し，その理由と感想を学習シートにまとめる活動を行う。

５時間目には，４人のグループに分かれて記事を紹介し合い，その中から最も印象に残った記事を選び，全体でも紹介するという活動に展開する。

話し合いの結果，「マイナンバー制度は必要か」，「老人の免許証は返納すべきか」の２テーマを選択。ディベートでさらに話し合った。生徒たちは自らの学校への送迎が関係してくることから，特に，老人の免許証について，身近な問題として捉えていたようである。

記事選びをする生徒たち

生徒たちが選び出す記事は，ＴＰＰや軽減税率，高齢者の運転を特集した記事，全国いじめ調査結果に関連した記事など多彩で，互いにどのようなことに関心をもっているのか，他者を理解するための一助にもなっている。

また，集めた情報（選んだ記事）を活用して，自分の考えをまとめ表現するといった活動は，本校生徒の表現力の育成につながっている。

このように，記事の選択から，自分の

４人グループで記事紹介する生徒

考えをまとめ，他者に伝えるといった一連の学習活動は，アクティブラーニングに直結するものと考える。

生徒が選んだ記事と感想

〈２０１４年度いじめ全国調査結果〉

隣県で中学２年生が自殺したことを受けて行った再調査で，いじめ件数が大幅に増加していたことを紹介。

○いじめの原因には嫉妬があるのではないか。相手のことを考え行動したり，発言したりすること。見て見ぬふりをしないことが大切。

〈高齢者の自動車運転特集〉

高齢になると認知能力が衰え，事故につながっているという記事を紹介。

○祖母は元気に運転しているが，運転することが危険になれば，いずれは運転できなくなることを知った。

②社会科における授業実践

社会科の授業では，浅水英夫教諭が３年生の公民で，「夫婦別姓の賛否について議論し合う」という学習に３時間構成で取り組んだ。

授業は，事前のアンケートから夫婦別姓を「認める」派と「認めない」派，それぞれの立場に分かれた後，２時間を使って裁判に関する複数の記事を読み，その後行われる議論の根拠となる記事をまとめる活動と，３時間目の，グループの代表者各２名がそれぞれの立場で，根拠となる記事を示しながら意見を発表する活動で構成されている。

賛否の根拠となる記事を集める活動では，情報を比べることで，新聞各紙によっても，賛否や意見に違いがあることに気付く。その上で，自分の考えに近い記事を根拠として反対意見に対峙する準備を行う。

３時間目に，それぞれの意見を聞いた後，意見交換が行われるのだが，互いの考えを尊重し合いながらの意見交換であり，最終的には，双方がいろいろな考え方があることに気付いて終わる。

記事を用いて賛否について説明する生徒

ディスカッション後の感想

○子どもの視点で考えると，別姓は不便だと思ったが，親の視点で考えると認めてもいいと思った。

○名字についてあらためて考えた。新聞は各紙によって主張が違うことが分かった。

別の日に行われた「隣国と向き合うために」という歴史の授業では，日韓国交正常化５０年にちなんで両国で記念式典が行われた記事をもとに話し合いが行われた。

話し合いは，両国のリーダー，阿倍，朴氏のあいさつやメッセージを読み，問題点の確認や今後どう向き合っていくべきかについて意見を出し合った。

生徒たちは，過去に韓国に対して，非人道的な行動をとったという事実を押さえた上で，自分たちの若い世代が今後どんな交流したり，新しい関係をつくったりしていく必要があるのかを考えたようである。

今起こっている出来事を，学習内容と

新聞記事とＩＣＴの活用を図る浅水教諭

してタイムリーに行うという点で，新聞記事活用の効果は大きい。

ＮＩＥを行うことで，生徒が自発的に新聞に目を通す，触れる機会が増えたことに，社会科の学習に興味関心をもつという点で収穫であった。

社会科における新聞活用も，議論するための情報選択と，自分の意見の根拠づくりなど，自らの考えを積極的に発言する後ろ支えとなっている。

３．成果と課題

ＮＩＥの実践指定校として１年目を終え，新聞に触れる機会がなかった生徒たちも，徐々にではあるが，新聞に関心をもち始めている。年度末の調査にからは，およそ９割の生徒が，新聞やニュースへの関心が高まったと答えている。このように，ＮＩＥの実践を通して，新聞に触れる機会やニュースに関心をもつようになったことを第一の成果と捉えている。

授業では，国語科，社会科の学習において，情報選択能力や活用力，自分の考えを交えてまとめ表現するといった授業実践に取り組むことができた。このように，アクティブラーニングに結びつけることができたことも成果である。

指定を機に，情報活用能力と表現力を育む実践を展開することができたことを有り難く感じている。

記事の内容について意見交換する生徒

今後は，ＮＩＥコーナーの充実及び新聞活用の授業実践の継続に加え，各学年・学級における，朝の会や帰りの会での新聞活用の取り組みを模索していきたい。

また，新聞に関する興味や関心を高めるために，専門家を招いての講話や，新聞作成に関する講話など，外部講師を招聘して生徒たちによい刺激を与える機会を構築したいと考える。

ＮＩＥの視点を広げる「新聞」を活用した授業の試み

男鹿市立男鹿南中学校
教頭　田　村　　稔
教諭　安　藤　　陽

１．はじめに

男鹿南中学校は、秋田県の観光地・男鹿半島の石油備蓄基地近くの小高い丘の上にあり、平成４年に船川中学校と椿中学校が統合した、創立２４年の中学校である。廊下を中心に丸窓が配置され、全体として豪華客船をイメージした作りの校舎となっている。

統合当初は５００名以上の生徒数で、学習環境はもちろん、部活動や文化的活動等で男鹿市内の中心校として地域に根ざし、発展してきた学校である。校訓は『自彊不息（みずからつとめてやまず)』である。

平成２７年度は全校生徒数１１８名、学級数４学級と創立当時の約５分の１の規模となっている。学校教育目標は、生徒の実態と目指す学校像・生徒像・教師像から『夢の実現に向かいねばり強く自らを高めていく生徒の育成』としている。ＮＩＥへの取り組みは初めてであるが、この目標達成に関連した内容にすることを意識してスタートした。

２．実践内容

⑴新聞に親しみやすい環境づくり

本校では一日に一度全校生徒が給食時に食堂に集まるが、食堂には図書スペースが併設されており、毎日の新聞も閲覧できるようにしている。係の生徒が新聞を交換にきていたが、ＮＩＥに取り組むにあたり、自由に各新聞を読めるように、また、授業でも取り扱いができるように新聞閲覧コーナーを広げた。

６誌の新聞の内容を、必要に応じて読み比べ、比較調査ができるようストックする箱もコーナーの下に設置した。

給食後に友達と当日ニュースで報道された記事を確かめたり、授業で聞いた内容に関する記事を調べる生徒の姿もあった。

食堂の図書コーナー

⑵教師の授業における新聞活用について

ＮＩＥへの授業での取り組みについて、教師側の体制として全ての教科で行うことは、厳しい面もあるということから、活用を考えられる国語・社会・理科・英語・美術の担当教師で会議を持った。今年度は大きく２つの視点として「読み比べを中心とした調べ学習の授業」また、「新聞を意識

社会科の授業風景

できる授業」として新聞活用ができる実践を中心に進めてみることとした。

⑶会科の授業の公民的分野でのＮＩＥを取り入れた実践を次に示す。

＜授業実践１＞

●【第３学年　社会】

●公民的分野（政治分野）「政治参加と世論」

〇授業のねらい

・政治参加について、複数の新聞を読み比べる活動を通して、批判的に情報を見比べ、より公正な視点で情報を得ようとすることができる。

＜学習活動＞	＜補足説明＞
1　知っているメディアの種類を確認する	・テレビ、インターネット、新聞などが挙げられた。
2　同じ内容の２つの新聞の記事を読み取る （安全保障関連法案について）　【NIE】 ＜視点＞ ①どのような内容か？ ②賛成なのか反対なのか？ ③どんな立場で書かれている？	・読み比べる視点を明示し、どのような内容が記載されているかをノートにまとめた。 ・どちらの新聞を読み取るかグループで役担をして読み取らせた。
3　２つの記事の違いを発表し合う	・それぞれ読み取ったことを発表し合い、２つの新聞の違いについて考えた。
4　授業のまとめ	・今回の授業で扱わなかった新聞にはそもそもその内容が記載されていなかったことを伝え、情報を批判的に見ることの大切さを考えた。

〇新聞の記事を比較する学習活動を取り入れた。

新聞の論調は各社で異なり、生徒は記事の立場や視点の違いに気付くことができた。

＜授業実践２＞

●【第３学年　社会】

●公民的分野（政治分野）「選挙のしくみと課題」

〇授業のねらい

・日本の選挙制度について、選挙の４原則や選出方法を調べる活動を通して、多数の意見を政治に反映させるしくみになっていることや選挙の課題を理解できる。

＜学習活動＞	＜補足説明＞
1　生徒会役員選挙の時の写真を見る 生徒会役員投票の様子（実際の選挙で使う投票用具一式）	・選挙についての意欲を喚起する。 大阪市の有権者 約210万人 投票率 約67パーセント 大阪都構想に関する記事と補助説明

2　国会議員選出の選挙のしくみや選挙の４原則について知る	・小選挙区、大選挙区、比例代表制・平等選挙、直接選挙、秘密選挙、普通選挙を知る。
3　一票の格差や投票しないことの問題点について考える　【NIE】	・新聞記事（大阪都構想について）の記事を提示し、選挙に参加しないことの問題点について考えた。

○「一人くらい選挙に参加しなくても大丈夫」と考える生徒もいたが、実際に投票しない（投票に行かない）と世の中が変わると実感をもてたようだった。

◎記事全体を活用するだけでなく、一部分を資料的に提示することも一つの NIE の視点だと思う。

体育館ディスプレイ

⑷美術科の授業でのＮＩＥを取り入れた実践を次に示す。

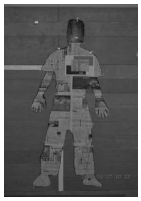
＜授業実践３＞

●【第３学年　美術】

●デザイン「私はここにいる」

○授業のねらい

・３年生の作品を「南校祭」（学校祭）で展示する際、メイン会場である体育館に最上級生の存在感を感じるようなシルエットディスプレイをする。（兼ポートフォリオ）

＜学習活動＞	＜補足説明＞
1　作品を制作する過程を示すポートフォリオについて知る	・作品展示についての意欲を喚起する。 ・学校行事において３年生としての存在の重大さを、今を報道している新聞で作成する意義を考える。
2　個人の実物大シルエットが新聞紙で体育館に展示されることの効果を知る　【NIE】	・可能であれば、新聞紙面の記事や使用されている色などの部分を活用する。
3　二人ペアでそれぞれの人型を貼り合わせた新聞紙にトレースしてもらう。	・型は大まかでも充分その人物らしさになることを伝え、自分らしいポーズを考える。
4　自分の人型を切り取り、体育館の壁にセロテープで展示する。 頭部に写真を使った作品→ 	・細かな位置調整は、学校祭の３年生展示係が行う。 全体の間隔を調整→
5　それぞれ以前作成した「心の模様」を胸の位置に貼り付る。	・以前に作成した「心の模様」が更に意味を持って展示されることを考える。

○新聞を意識できる造形物として、作品化した展示方法である。顔の部分にカラー画像部分をや新聞のタイトルを意図的に配置する生徒もあり、新聞を読んで自己との関連性を考えなければ生み出せないデザインである。

○週１回の美術の授業のため、新聞内容をじっくり選択する時間が充分とれなかったのが残念。

３．成果と課題

⑴成果

「読み比べを中心とした調べ学習の授業」として社会科の実践が行われたが、オーソドックスなＮＩＥの取り組みである。しかし、多くの記事を読み比べて比較検討をするためには時間も必要である。今回の取り組みは実践１でしっかり読み取ることを行っているからこそ、実践２の記事のピンポイント部分だけでも充分活用できるように生徒が成長していることを示している。

社会科の教師のＮＩＥと社会の変化を意識した展開が効果的であったことを示している。投票数の僅差がどれだけ重要な意味を持つか、１８歳で選挙権を持つこれからの生徒に、本校の生徒会役員選挙とタイムリーな新聞記事を合わせて授業展開していることから、多面的な視点からの迫り方は社会科の醍醐味であったことを生徒が本当の投票を行った時にフラッシュバックされるものと思われる。

昔の選挙風景

大阪都構想の記事

また、「新聞を意識できる授業」として美術科での実践が行われたが、美術という表現の中に新聞の記事内容を結び付けようとした取り組みであった。新聞は印刷されたものではなく、内容と意味を意識すれば、表現材料だけでなく生徒自身のメッセージを伝えるものにもなりうることを知ることができたのではなかろうか。実際の展示場面で作品と新聞の記事の関係を語っていた生徒が何人か居たことはひとつの成果と考えたい。

⑵課題

社会科はＮＩＥとしての活用が最も行いやすい教科とされるが、調べ学習や社会科新聞づくりという他の授業展開・地道な取り組みがあるからこそ生徒も取り組み易くなり、成果が出せるものである。ＮＩＥの取り組みを考える場合、今回のように普段の授業をしっかり行ってこそ、成果があがるものと考えたい。

美術科では新聞をただの紙と考えるかどうか、担当する教師の意識が課題である。作品制作準備のために机上に新聞を広げる場合、生徒が紙面内容に惹かれていることはよくある光景である。そこで、作業を優先するあまり、紙面を読むことをやめさせてしまう場合が多いと思うが、デザインといった別の領域で、ひとつの表現材料として使える機会を設けるといった逆転の発想を持つ必要もあると思う。

４．おわりに

ＮＩＥ推進校１年目の取り組みであったが全体的な取り組み体制を整えないまま、進んだため、他教科での取り組み成果を引き出せない状況であったと思う。もっと他校の先進的な取り組みや情報を得て、学校全体で取り組むものにしていきたい。テレビや携帯電話（スマホ）、インターネットといった素早く情報を手に入れることができる環境になっているが、じっくり読み、感じ、考え、自分のものにしていく新聞をもっと活用していくことを大事にしていきたい。

今後は、より効果的なＮＩＥとするために年間の全体計画を構築し、見通しを持って多方面からの実践を行えるようにしたい。

視野を広げ，社会への関心を深めるための新聞活用（初年度）

大仙市立協和中学校
教諭　金　子　茂　子

1．はじめに

今年度がNIE実践指定校としてのスタート。「あまり難しく考えず，新聞に触れる機会を少しずつ増やしていこう」ということで，まずは研究主任と国語科が中心となって取り組むことにした。

前年度までも，市の予算で図書室には生徒用に１紙配置していたものの，積極的な活用には至っていなかった。この指定では複数紙の提供を受けられることから，各紙の比較が可能になる。さらに，中学生が目にすることのない経済紙等にも触れることができる好機とも考えた。

NIE実践に当たっての本校のテーマを「言語活動の充実　～情報を比較したり自分の考えをまとめたり，他と意見を交換したりすることによって視野を広げ，社会への関心を深めよう～」とし，拙いながらもいくつかの実践を重ねてきた。

2．実践内容

⑴ NIEコーナーの設置

生徒玄関から教室棟に向かう廊下に掲示＆閲覧コーナーを設置。学年によって棟や階が違うため，全校生徒が朝と放課後必ず通って目にする場所を選んだ。

教室棟へ続く廊下のNIEコーナー

①各紙一面の比較

「第１面は歴史の秒針!?」と銘打ち，各紙のトップ記事を比較できるように掲示した。６紙全紙が掲載している場合は意外と少ないことに気付いたり，見出しや写真に注目するようにもなったりしていった。

全紙「安保関連」：9月20日

②地域のニュース

中央には「地域のニュース」のコーナーを設け，ふるさと秋田や大仙，地元協和地区の記事を紹介した。

生徒がよく立ち止まって読んでいるコーナーであり，自宅の新聞から切り抜いて持ってくることもあったことなどから，やはり，身近な記事には大きな魅力があることを再認識させられた。

地域のニュース

ファイル保管しなかったことを反省している。

③秋田魁新報「中学自習室」の掲示

「○○先輩も□□先生も
ずっと続けていたそうです」

上記のキャッチコピーとともに，５教科の問題を拡大して掲示。問題と答えは下にファイルして置いた。

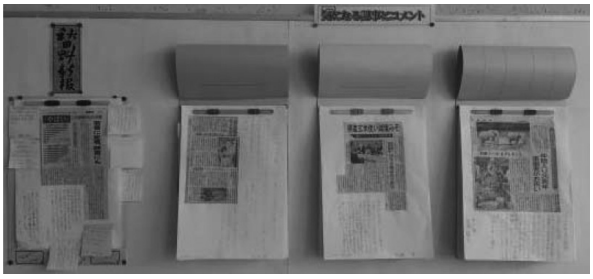
すぐ隣が図書室で，バス時間待ちの生徒が読書や勉強をしている場所なので，待ち時間を利用して挑戦してもらえるようにと考えてのものであった。

１年生にとってはやや難しい問題が多いため，主に受検を意識した３年生に向けた掲示になった。

廊下の閲覧コーナーには，スペースの関係で数日間しか置けないため，１週間を過ぎた新聞は学習室に移動させた。保管を兼ねて再展示するとともに，気になる記事を切り抜いたりコメントを書いたりして自由に活用してきた。

秋田魁新報「中学自習室」の掲示

学習室での再展示



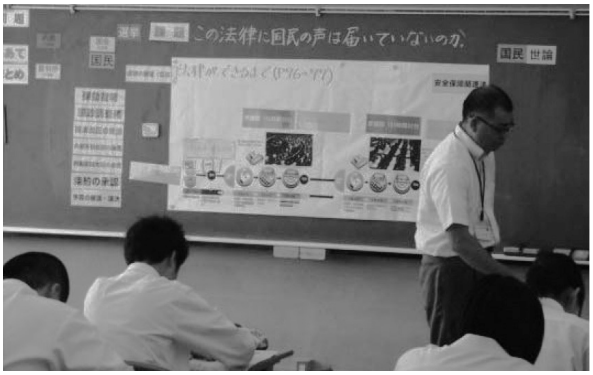
気になる記事にコメント

⑵授業での実践

①３年　社会（公民）

単元名　国の政治のしくみ

ねらい　実際の立法過程には多様な意見があることを理解し，国会と国民の関係を考える



３年Ａ組　社会科の授業風景

本時の学習展開

・新聞に掲載された２枚の写真を提示
・安全保障関連法案が混乱の中で採採決されたことを受けて，学習課題を設定
　課題：「この法律に国民の声は届いていないのか」
・基本的な立法の流れの確認
・安全保障関連法案の概要をテレビ番組を交えて学習

各紙から国民の声を探す

・新聞４紙から多様な意見を探す
※紙面から浮かび上がる多様な意見に着目して考える
・議論：「国民の声を国会に届けるにはどうしたらよいか」

②３年　国語（発展学習として）
単元名　論理の展開に着目して読もう
－新聞の社説を比較する－
ねらい　二つの社説を比較し，共通点と相違点を捉え，その効果について考える
本時の学習展開
・教科書掲載の「国語世論調査」についての社説の既習事項を確認
・「血液製剤不正」について書かれた社説の題名から受ける印象について話し合う

Ａ社　2015．12．4
巧妙な隠蔽への対応を
Ｂ社　2015．12．6
腐敗一掃に力を尽くせ

・観点に沿って批評し，どちらの主張に賛成できるか意見を述べる

③３年　国語（発展学習として）
単元名　社会への提案をまとめる
ねらい　社会的な課題について説得力のある提案をし，話し合いを通して自分のものの見方考え方を深める
本時の学習展開
・各紙のコラムについての紹介
・天声人語２００字作文の説明
・フードバンク活動の社会的認知度を上げ，広く協力・参加を促すためのアイディアについて話し合う
（班→全体→班）
※本時の活動のみ２年生でも実践

学習室での各紙コラム紹介

・話し合いを踏まえ，具体的な提案を２００字で書く
※作文はファイルして学習室へ
〈生徒作文〉

ＳＮＳの普及により，個人の意見が多くの人に届くようになった今，フードバンク活動のことを訴えかけてみてはどうだろう。多くの人は「物を捨てること」に何かしら抵抗があるはずだ。そんな人たちがＳＮＳによってつながり，捨ててしまう食品を集めるのだ。ＳＮＳが原因で起きる事件が後を絶たないが，この活動により，使う目的を改めて考えるきっかけになるとともに，貧困で苦しむ人たち，廃棄される食品の両方を救えるだろう。

私は，給食で余る牛乳やパンなどをフードバンクにまわす活動を各学校で行うと，認知度が高まると考える。多くの人が一度に食事をする機会の一つが給食だ。その機会に活動について知り，家庭で話す。主婦たちの情報網は広い。つまり，まずは子どもたちが知ることで広い範囲に広まるのだ。また，食品ロスや貧困の人々について関心をもつきっかけとなり，「もったいない」に気付ける人が増えるのではないだろうか。

200字作文に挑戦する２年生

③３年　家庭科

単元名　家庭・家族と子どもの成長

ねらい　家族又は幼児の生活に関心をもち，生活をよりよくしようとする意識を高める

本時の学習展開

・各紙から子どもに関する記事を自由に複数（できるだけ多く）選ぶ
・一番気になった記事について自分の考えを書く
・グループで紹介し，意見交換する
・ファイルして自由に見合う

⑶ NIE タイムの実施

冬休み明けからの短い期間ではあったが，金曜日に「NIE タイム」を位置付けた。それまでは，毎朝１５分間が読書の時間であったが，全校一斉に NIE に取り組み，全職員が関わって初年度を締めくくりたいということから実施した。

「今週の topics ～私はこう考える～」
新聞記事を読んで自分の考えをもとう！
お互いの考えを読み合おう！

ファイルには，上記のような見出しが書かれているが，まずは自由に感じたことや考えたことを表現させたい。やがてその記事に関連したことが，友達や家族との話題に自然に出てくるようになるだろう。実際，学校では毎週話題になる。生徒に読ませたいと思う記事を職員が順番に選ぶということも大事にしている。

ぜひ次年度も継続したいと考えている。

〈紹介した記事〉

・Voice（秋田魁新報 1/20）卒業生投稿記事
・きょうの言葉（秋田魁新報 1/26）
・もがきつかんだ進路（朝日 2/2）
・笑いのメカニズム（朝日 GLOBE2/7）
・きょうの言葉（秋田魁新報 2/18）
・TPP12 カ国署名（秋田魁新報 2/5）
・ひととき（朝日 3/3）

３．成果と課題

〈成果〉

・これまで以上に，授業の中で新聞活用の意識が高まった。複数紙あることで情報の比較ができてありがたい。
・新聞が身近にある環境に慣れ，以前より興味をもって記事に触れようとする生徒が増えた。
・新聞から得た情報を自分なりに考えて書いたり話したりすることで，少しずつ表現する意欲と力が付いている。
（インプット→アウトプット）
・入試の面接対策だけでなく，新聞を読むことで，世の中の出来事に広く目を向けようとする気持ちになってきた。
・紹介した実践以外にも総合的な学習の時間の新聞作り等に生かすことができた。

〈課題〉

・推進計画の作成
年度当初に全職員で共通理解を図る必要がある。充実した取り組みにするためには全職員でアイディアを出し合い関わり合いたい。
・実態・意識調査
新聞を購読していない家庭もあるという。家庭の状況や生徒の意識を把握して

実践することで，成果や課題がよりが明確になるものと思われる。

・取り組みを生かせる場・学べる場を

「いっしょに読もう！新聞コンクール」等，NIE の実践を有効に生かせる機会を生徒や家庭に情報提供したい。長期休業中の自由課題の一つとして提案していくことも可能と考えている。

・委員会活動の活性化に

今年度関わったのは文化委員会だけであった。各委員会活動の充実・活性化のためにも，学習委員や環境委員等と連携し，生徒のアイディアを生かした取り組みにしていく必要がある。

確かな読みの力を育てる「新聞」を活用した授業の試み

八郎潟町立八郎潟中学校
教諭　志　田　裕　子

１．はじめに

ＮＩＥ実践指定２年目の今年度は，秋田市で開かれたＮＩＥ全国大会で，２年生が授業を公開した。また，同じく指定校である能代第二中学校と，同じ記事を読み意見を交換し合う交流活動もできた。学校教育の中に新聞をどのように活用していけるのか，その可能性について探った１年であった。

２．ＮＩＥ教材を活用した授業実践（国語科）

～ＮＩＥ全国大会秋田大会より～

⑴単元の学習過程について

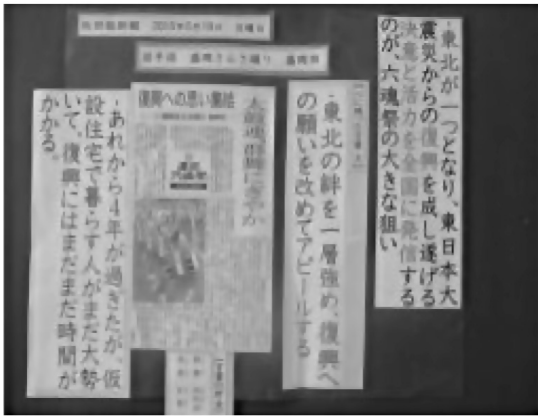
〈単元名〉号外の編集会議を開こう
～「東北六魂祭 2015 秋田」～

次のように４時間の計画で学習を進めた。

第１時　号外の記事を読み，記事に最もふさわしい写真を選ぼう。
第２時　号外の記事にふさわしい見出しを付けよう。
第３時　見出しのグループ案をまとめよう
第４時　見出しの２Ｂ案を魁新報社に提案しよう。

第１時では，写真説明付きの３枚の写真から，記事によりふさわしい写真を選択した。第２時で，個で記事本文・写真を根拠に見出しを考え，第３時で，個で作成した見出しを基にグループとしての見出しを提案する編集会議を位置付けた。個で考えた見出しを，よりよい見出しに高めることができるよう，語句の選択や配列，また表現の工夫などを視点にグループで話し合った。第４時では，各グループから提案された見出しを２年Ｂ組の号外の見出しとして絞り込む編集会議を設定した。生徒は，記事本文や写真を根拠に筆者の表現意図を読み取り，さらには読者を引き付ける見出しという視点をもち，話し合った。ＮＩＥ全国大会では，この１時間の編集会議を公開した。

「六魂祭 2015 秋田」については，開幕前から，六魂祭の目的やその準備，各県の六魂祭へかける思いなどが新聞で取り上げられていた。事前準備として，これらの記事をいくつか生徒に紹介し，六魂祭について理解を深めさせておくようにした。



〈生徒が事前に読んでいた記事〉

〈↑本時で使った号外記事〉

⑵授業の実際（４／４）

①本時のめあてを確認する。

〈編集会議その３〉
見出しの２Ｂ案を魁新報社へ提案しよう

②各グループで絞り込んだ見出しを，根拠を明らかに提案し合う。

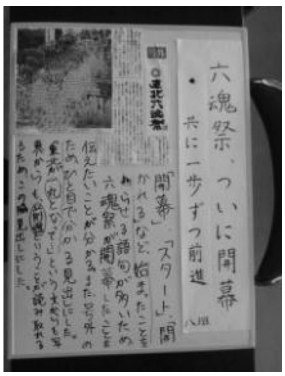
③各グループから出された８つの案を全体で吟味する。

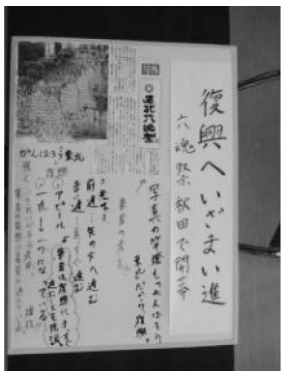
～以下授業記録から引用する～

Ｔ　「六魂祭」「開幕」が主見出しにあるかどうかで２つに分けてみましたが，この点についてどうですか？

Ｃ１　「六魂祭」「開幕」は，号外なので必要だと思います。ひと目で分かるから です。

Ｃ２　ロゴに「東北六魂祭」があるので，「六魂祭」はいらないと思います。前に読んだ記事でも，ロゴに主語の役割をさせていた記事がありました。





Ｃ３　六魂祭の目的や思いを主見出しにして，情報として必要な「六魂祭」「開幕」は脇見出しでもいいと思います。今回は特別な号外なので。

Ｃ４「竿燈」という言葉は見出しにはどうかと思います。竿燈まつりではないし……。

Ｔ　提案理由の中で，写真に竿燈が写っているということも挙げていましたね。では，この写真から読み取れることは？

Ｃ５「がんばろう東北」と書かれた竿燈が真ん中にあるので，東北が一丸となって復興に邁進することだと思います。

Ｃ６「東北魂」は，おかしいと思います。よく「八中魂」と 言います。これは，大会前の激励会で使われ，試合で頑張ってくる意味なので，ふさわしくないと思います。

Ｃ７「東北魂」は，東北６県が１つになっていることを表した言葉です。

Ｃ９「東北六魂祭」を省略して何かできないかなと考えて「東北魂」としてみました。

Ｃ10　私は，やはり「東北魂」は少し気になりました。復興に邁進するという東北魂という意味もあるけど，六魂祭は東日本大震災で亡くなった人を悼むためのものでもあるから，

東北魂だけではだめかなと思います。

C11　主見出しは「東北1つに六魂祭開幕」脇見出しが「みんな笑顔に復興願う」となっていますが，主見出しが１０文字なのは，だめではないですか。

C12　提案理由でも話したとおりに，あえて助詞の「に」をいれて，六魂祭の目的や進む方向をはっきりさせました。

～以下省略～

⑶授業を終えて

〈↑２Ｂ案として，よりふさわしい見出しを選んだ〉

・編集会議を開くという設定をしたこと，そして最後には２Ｂ案として秋田魁新報社へ提案するというゴールを示したことにより，最後まで意欲的に話し合いができた。
・授業の最後に，秋田魁新報社の記者の方からコメントをもらい，生徒の読みを価値付けて頂いた。さらに新聞社としての視点も聞くことができ，理解を深めることができた。
・見出しを吟味する視点として「本文を根拠に」ということから離れずに思考している姿が見られた。
・号外の記事は短く，短時間で行うことができるため，年間指導計画に容易に位置付けることができた。

・事前に東北六魂祭に関する記事を多く読んでいたことにより，六魂祭の背景にある出来事や各県の人たちの思いを知ることができ，生徒が主体的に号外に向き合うことができた。

３．他校とのＮＩＥ交流

秋田魁新報社ＮＩＥ推進部より提案された記事を，本校と同じくＮＩＥ実践指定校となっている能代二中とが読み，それぞれ自分の意見をまとめ，新聞社へ郵送した。それを新聞社が，毎週日曜日に掲載されるＮＩＥコーナーで取り上げた。

両校の生徒で，掲載された意見文を読み合い，さらに考えを深めたり，友達の意見に学んだりすることができた。

〈秋田魁新報社が提案した記事←〉

〈交流した意見 ↓〉

私もあいさつはコミュニケーションの基本だと思っています。だけど，私は，知らない人と話すのが苦手で，知らない

人には自分からあいさつをすることができません。だから，いつも通り過ぎてから後悔します。この女児もきっと後悔したのではないかと思います。「あいさつをしない」ということは，やはりお互い気持ちはよくないと思います。だから今度は自分から積極的にあいさつしていきたいです。

（八郎潟中学校　２年生）

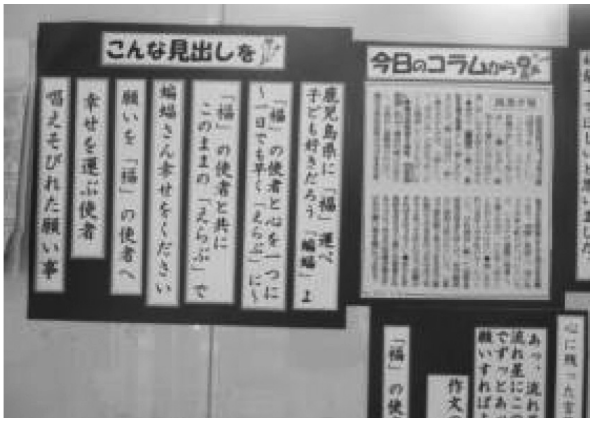
あいさつは大切なことだと思います。あいさつの仕方や返し方で，相手の性格や気持ちが表れると思います。あいさつは人に教えてもらってするのではなく自分からするべきだと思います。大人の事情で子どもが犠牲になるのはすごくかわいそうです。

私はあいさつをすると爽やかな気持ちになります。だから，爽やかな気持ちを周りの人にも味わってもらいたいと思います。

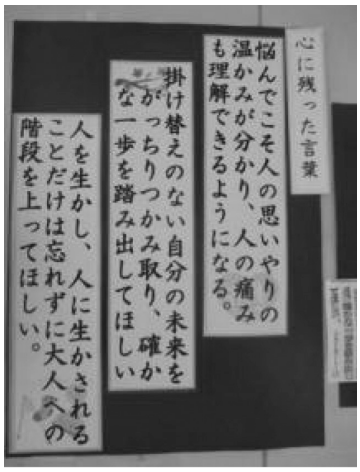
（能代第二中学校　２年生）

４．コラム学習

国語科の授業の最初の１５分間を用いてコラムを読み，自分の感想をまとめ，コラムの内容にふさわしい見出しを考える「コラム学習」を行ってきた。生徒は，筆者の文章構成や表現の工夫，語彙の豊かさに学ぶことはもちろんだが，コラムに描かれた出来事や人との出会いに学ぶことが多くあった。



〈↑　讀賣新聞「編集手帳」2015.5.30 から〉



〈秋田魁新報「北斗星」２０１６・１・１８〉

〈コラム学習で生徒の書いた感想から〉

〈自分を信じて挑戦するのみ〉

「受験はまさに挑戦だ」という言葉は，今年受験生になる自分にもエールとして届いてくる。挑戦と変化を上手く引用して，誰が見ても前向きになれる文章にしていて，受験は辛いだけじゃないと教え

てくれている。

〈challenge ～見えない助けに支えられて～〉
挑戦には変化が含まれ，挫折も伴うけれど，自分が成長するために大切なことだと思った。私も目に見えない助けに支えられていることを改めて感じた。

５．おわりに

ＮＩＥ推進校２年目の取り組みとして，朝のスピーチ活動やコラム学習，日々の小さな取り組みを大切にしてきた。また，各教科の授業のねらい達成のために新聞を活用した実践に取り組む教員も増えてきた。

ＮＩＥ全国大会で公開したクラスの生徒がこんなことを話していた。「東北六魂祭について，今回の学習をしたことでよく分かった。東北の一員として何ができるかなと考えた。」と。国語科の授業として実践をしたが，新聞を教材にすることで，社会を見つめる目や心が育っていくのではないかと改めて思った。

ふるさとを知り，地域に思いを発信するための新聞活用の工夫
「気付き」・「考え」・「伝える」ＮＩＥ　～小中連携での取り組みを通して～

能代市立能代南中学校
教諭　藤　谷　　寛

１．はじめに

ＮＩＥ教育の実践校指定を受け，本校は，地域に目を向け，地域と共に行う新聞活用に取り組んできた。

３年目となる今年度は，これまでの実践が指定終了後も継続されることを念頭に，校内および地域の両方に目を向けながら実践の整備・改善・発信を行った。具体的実践事項は次の２点である。

①全校新聞読書を各教科の学習と関連付けて実施する。
②学校と地域とを結ぶ媒体としてＮＩＥ新聞を作成する。

①については，朝読書の時間を利用したＮＩＥタイムでの取り組みと授業とを関連付けながら，②については，過去２年間作成してきた新聞作りを生かし，生徒の手で発行することを目標としながら実践した。また，浅内小学校との交流を図り，小・中で連携してのＮＩＥ活動にも取り組んだ。

２．今年度の取り組み（中学校分）

⑴朝読書での全校新聞読書「ＮＩＥタイム」の実施

①第Ⅰ期ＮＩＥタイムの実施（H25・９～H26・12）

ＮＩＥ担当者が選んだ新聞記事を，毎週水曜日の朝読書の時間帯に読んだ。感想記入後（記事欄と感想欄をあわせてＡ４用紙１枚）は，各自のＮＩＥファイルに保存し，振り返りができるようにした。記事に触れることを狙ったＮＩＥタイムだったが，回数を重ねるごとに，記事に対する考えをもち，豊かに表現する生徒が増えてきた。

②第Ⅱ期ＮＩＥタイムの実施（H27・１～）

定着してきたＮＩＥタイムの教科活用を目指し，「情報の取り出し」や「意見や考えの表現」といった各教科で付けたい力を念頭に置いたシート作りに取り組んだ。具体的な活動イメージと実践内容は以下の通り。

【学習委員会担当週】
生徒目線で記事を選定し，選定側の意見を添えたシートを作成し，担当者と生徒間による紙上討論会を行う。その後，紙上討論会に保護者を巻き込む形態に発展させていく。
【教師担当週】
各教科の立場から記事を選び，「情報の取り出し」「背景の読み取り」「意見や考えの表現」等の力を生徒に身に付ける場とする。一方でＮＩＥタイムでこれまで行ってきた内容については，「道徳性の育成」部門として取り組んでいく。

◎国語での実践例
「きらきらネーム討論」
〈記事内容〉
きらきらネームを付けることに対する賛成派，反対派２名の中学生の意見文
〈出題〉

きらきらネームに賛成か？反対か？
記事を読み比べて自分の考えを述べよ。

◎英語での実践例

「A　Guide　Dog　Stabbed」

〈記事内容〉

盲導犬が何者かによって傷つけられたことに関する英文の意見文

〈出題〉

この記事に関する自分の意見を Tool を活用し英語か日本語で述べよ。

◎社会での実践例

「産業革命遺産の世界遺産登録」

〈記事内容〉

世界遺産登録に向けた日本の動きと韓国の主張

〈出題〉

世界遺産登録に賛成か反対かについて自分の意見を述べよ。

全校新聞読書「ＮＩＥルーム～社会編～」

⑵「ＮＩＥコーナー」の設置

各学年の廊下と職員室前にＮＩＥコーナーを設置し，ＮＩＥタイムで読んだ記事や書いた感想，関連記事などを掲示した。また，秋田魁新報社から発行された新聞活用ガイドブックから，書き方のポイントとなる部分も合わせて掲示した。

また，図書館には図書司書に協力していただき新聞閲覧コーナーを設置した。「今日の新聞コーナー」と「過去１週間分の新聞コーナー」の２カ所を設け，生徒が自由に閲覧できるようにした。

⑶ＮＩＥ新聞「もがりぶえ」の発行

過去２年間同様，今年度も近隣の浅内小学校と共に活動のまとめとして新聞を作成し発行した。（作成の詳細は連携部分に掲載。）

３．今年度の取り組み（連携分）

⑴ＮＩＥタイムでの連携

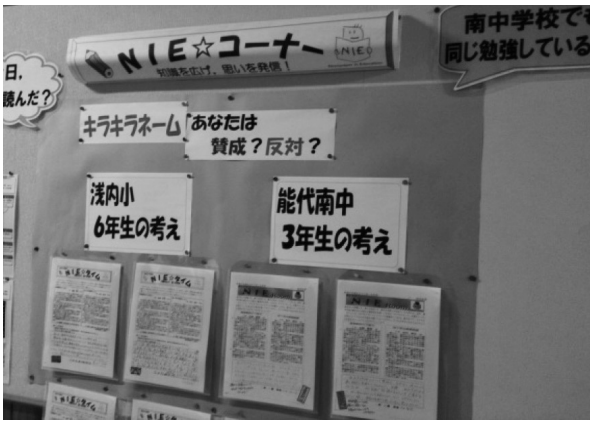
浅内小学校と能代南中学校では，ともに「ＮＩＥタイム」を設定し，新聞記事を読んで自分の考えをまとめる活動に取り組んできた。記事の選定や取り組み方には違いがあるものの，社会の出来事への関心を高め，自分の考えを発信できる児童・生徒を目指しての取り組みということでは共通している。そこで，自分の考えを伝えたり他の人の考えに触れたりする機会をさらに増やし，子どもたちの意欲向上や考えの深まりにつなげたいと考え，小・中での連携を計画した。

【連携した取り組み】

・浅内小５・６年生を中心に，中学校との共通の記事を読み，考えをまとめる。取り上げる新聞記事は，中学校で取り組んだ物の中から，小学生にも取り組めそうな記事を選んでもらう。必要に応じて，与える課題や書くときの条件を小学校に合うように作り変え，シートを作成して取り組んだ。

・取り組んだシートは，秀作を数点選び，お互いに交換して掲示し合うことで，多様な考えに触れる場とした。

【これまでに取り上げた記事】
「バット職人　今週引退」
「ようじ動画　１９歳逮捕」
　　…ＮＩＥ新聞「もがりぶえ」に掲載
「キラキラネームに賛成？反対？」
「許せない，盲導犬を刺すなんて」
　　…ＮＩＥコーナーへ



連携したＮＩＥコーナー

⑵ＮＩＥ新聞での連携

実践指定後２年間，年度のまとめとして浅内小学校と能代南中学校共同でＮＩＥ新聞「もがりぶえ」を作成してきた。学校で行っているＮＩＥ活動を地域の方々にも知ってもらう目的で始めたものだったが，昨年度末に発行した第２号は，地域の情報や課題などについてインタビューした記事も掲載した。

新聞を読むことの習慣化，伝達手段としての新聞活用については，開始当初から両校の実践の柱である。そこで新聞を作ることを経験することとで，身近に新聞があることの大切さや，「新聞」という情報媒体の利便性を感じる一助となるのではないかと考え，今年度も小・中連携の一つとして計画した。

①第１回小中合同編集会議
（H27.6.30　浅内小学校）

浅内小学校と南中学校の代表児童生徒（浅小：運営委員・図書委員南中：学習委員）で合同編集会議を行い，活動計画と掲載記事について話し合った。

話し合いの結果挙げられた記事候補の中から，掲載記事を次回の編集会議まで検討することにした。

第１回合同編集会議の様子

②小中合同ＮＩＥタイムの実施
（H27. 1～　浅内小・南中各校で実施）

「もがりぶえ」掲載に向け，各校同一記事でＮＩＥタイムを実施した。

今回取り上げた記事は，鳥取県が「鳥取空港」を「鳥取砂丘コナン空港」に呼び名を変更したというもので，それを参考に，「秋田空港」の愛称を考えるＮＩＥタイムに取り組んだ。掲載作品の一部を紹介する。

〈秋田【うめな】空港〉
私がなぜこの名前にしたかというと、秋田はおいしいものがたくさんあって、ゆっくりできる場所もあるから、観光客の方にここはよいところだと思ってほしいからです。　5年　男子

〈秋田【スギの木】空港〉
秋田県には世界自然遺産の白神山地、日本一高いスギの木があるから、秋田の良い自然を取り上げた空港名にしました。
6年　男子

〈秋田【さきだ】空港〉
「秋田さ、きだ」は「秋田に来た」という意味です。この秋田の方言を使って秋田ならではの特別感のある名前にしました。秋田に来たら、少しでも方言に詳しくなってほしいと思いました。
1年A組　女子

〈秋田【なまっこ】空港〉
「なまっこ」の「なま」の由来は秋田弁はすごくなまっているから。「っこ」は「なべっこ」や「わらしっこ」などからとった。二つの良いとこ取りが「なまっこ」です。　2年A組　女子

〈秋田【福来】空港〉
この名前は、秋田に来たお客さんを秋田の優しさで対応する空港になってほしくて付けました。秋田はどの県にも負けない優しさを、もっとアピールしてほしいです。
3年C組　女子

なお，浅内小学校中学年については，俳句に挑戦した別課題を掲載した。

【ゆうやけ】に流れ行くなり春の川　四年　女子
【ひとびと】に流れ行くなり春の川　四年　男子
【まえむき】に流れ行くなり春の川　四年　男子
【かわ戸川】に流れ行くなり春の川　三年　男子
【あさやけ】に流れ行くなり春の川　三年　男子

③第２回小中合同編集会議
（H28.2.17 浅内小学校）

再び編集委員が浅内小に集まり，第２回編集会議を行った。ここでは，記事候補に対する検討結果を持ち寄り，掲載記事と執筆担当者を決定した。選考基準は「地域の方々に伝えたい浅内小と能代南中」で，六つの記事が選ばれた。

第３号ＮＩＥ新聞「もがりぶえ」

【掲載記事】
・ＮＩＥタイム「秋田空港の愛称」「俳句作り」
・ＮＩＥ全国大会に参加して
・浅内小創立１４０周年
・南中部活紹介
・行事紹介「南中三大行事」
　「浅小服のチカラプロジェクト」

４．終わりに

⑴成果

ＮＩＥタイムは１年間を通してほぼ毎週水曜日に実施することができた。感想の内容に個人差はあるが，年々深い読み取りのもと，出題者の意図などにも思いを寄せながら，意見や感想を述べる生徒が多くなってきている。また，新聞コーナーで，より詳しく時事について情報を得ようとする生徒も増えた。

小中合同での取り組みにより，地域全体で新聞と関わっていこうとする姿勢，委託終了後も家族で新聞に親しもうとする姿勢を育んでいこうとする素地が確実に培われてきている。

⑵次年度からの取り組みについて

前述の通り，３年間の取り組みで生徒の読解力や表現力はある程度成長した。そこ

でこれまでの積み重ねを生かしながら来年度以降も継続した取り組みを願っている。

そこでこれまで取り組んできた活動の中で，最も継続して行われ，かつ，生徒に受け入れられている「ＮＩＥタイム」を月１回のペースで実施していく。また，不定期ではあるが浅内小との課題の交換による連携も継続していきたいと思っている。

主体的に学び　互いに高め合う由利中生
～資料活用能力・思考力・表現力をはぐくむためのＮＩＥの実践～

由利本荘市立由利中学校
教諭　板　垣　　洋

１．はじめに

本校は由利本荘市の中央部の農村である由利地域にある唯一の中学校で，全校生徒は１０４名，４学級で，生徒は「進歩」「健康」「協力」の校訓のもと，相互に協力し合い，高め合いながら活動している。

今年度は，日本新聞協会のＮＩＥ実践指定校の指定を受けて三年目に当たる。各教科・領域において，積極的に新聞資料を活用することにより，「学ぶことと実生活の接続」を促し，「資料活用能力・思考力・表現力」の育成を図るとともに，「『問い』をもち，思考を深め発信する子どもたち」の具現化を目指してきた。

全校体制による「ＮＩＥ推進」により，課題意識をもった主体的な課題解決や相互啓発による学び合いの質の向上が図られている。

２．実践の内容

⑴新聞講習会の実施

本校では昨年度より，秋田魁新報社の記者を講師に新聞作成講習会を行っている。総合的な学習の時間のまとめの段階では，講習会で学んだ内容を生かし，学習の成果をまとめた新聞を作成し，発信した。

キャリア教育の視点からもプロの記者から指導していただいたり，話を聞くことの意義は大きく，読み手を意識した文章表現など，新聞作成の力は確実に伸びてきている。

①新聞作成講習会　５／１８（月）

○講師　秋田魁新報社ＮＩＥ推進部
　　記者　大　石　卓　見　氏

○講習内容
・紙面レイアウトや記事の書き方
・動画を見ながらの記事執筆

新聞作成講習会記事執筆の様子

〈生徒の感想〉

○メモを取るこつや，記事を書くポイントを知ることができた。

○見たこと，伝えたいことを一度整理してから書くと，記事が書きやすいと分かった。

②「新聞きりぬきコンクール」講習会
７／２１（火）

○講師　秋田魁新報社ＮＩＥ推進部
　　記者　大　石　卓　見　氏

新聞きりぬきコンクール講習会の様子

⑵ＮＩＥ全国大会秋田大会おける
授業提示「３年生英語科」７／31（金）

ＮＩＥ実践指定校３年目となる今年度は，「ＮＩＥ全国大会秋田大会」において，英語科３年生の授業を提示した。本校は文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」の指定も受けており，この事業と連携を図った英語学習の実際を全国に向けて発信することができた。

授業では「ふるさとのよさを英語で伝えよう」というテーマのもと，地元の「由利高原鉄道」に関する新聞記事を切り口にして取材活動を行い，ふるさとのよさやふるさとへの思いを英字新聞にまとめ，発信した。授業の様子は全国紙，他県の地方新聞にも紹介され，「新聞作成から発表までの学習活動を通して，４技能の能力を総合的に育成強化する先進的な取り組みである。」「内容レベルが高く，日頃の実践の質の高さが分かった。」など，県内外から高い評価をいただいた。

来年度は「ＮＩＥ」と文部科学省指定「英語教育強化地域拠点事業」の研究実践を一本の糸に紡ぎ，日常的な取り組みを学校体制で進めることにより，生徒一人一人の「主体的に学習する意欲」を喚起し，英語の「読む力」，「書く力」をさらに高めていきたい。

ふるさとの良さ 英字新聞に

秋田・由利中

「読む」「聞く」「話す」「書く」網羅

取材通し「学び」能動的に

11月札幌で北海道セミナー

7/31NIE 全国大会英語授業の様子と9/28 北海道新聞に掲載された提示授業の記事

⑶学習のまとめの新聞づくり

各学年とも，総合的な学習で調査したことを新聞形式でまとめた。

１年生は「職場訪問」２年生は「職場体験」３年生は「高校調べ」「職業調べ」をテーマに新聞形式でまとめた。

２年生は，紙面のレイアウト，大見出し，小見出しの位置を指定し，紙面構成の基礎を学びながら作成した。

３年生は昨年度の学びを生かして，自由なレイアウトで紙面を構成した。また，グループで新聞形式の発表資料を作成し，全体発表会や下学年に向けた発表会を行った。

◇生徒の変容◇

１枚の紙面に必要な情報を載せることは，情報の取捨選択，文章の要約，見出しの工夫，レイアウトの工夫等，これまで行ってきたプレゼンテーションソフトを活用したまとめ以上に思考と工夫を要するものであった。

また，新聞形式で発表会をすることは，紙面や字数，発表時間など，制約が多い分，思考し工夫することもさらに多くなる。内容を付け加えながら話す技術も必要となり，思考力と表現力の向上に効果的であった。

２年生生徒作品

１年生生徒作品

⑷各教科，領域での実践

各教科のＮＩＥ年間指導計画に沿って，新聞資料を活用した学習活動が展開された。

【国語科】

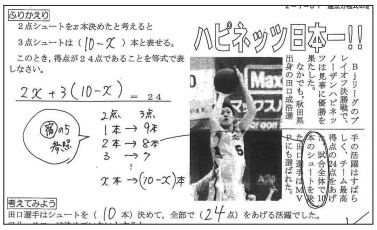
学習のまとめとして「パネルディスカッションを生かした意見文」を秋田魁新報「読者投稿欄」に全員が投稿した。

国語科では意見文の作成と新聞投稿による自分の考えを発信する学習が定着しており，生徒の主体的・協働的な課題解決学習の充実が図られている。

秋田魁新報投稿欄に掲載された生徒意見文

【数学科】

地元バスケットボールの新聞記事を活用して「連立方程式の意味」を考える学習を行った。学ぶことと実生活が接続し，課題意識，課題追究意欲の高まりが見られた。



数学ノート
指導計画より

【英語】

英語科では「英字新聞づくり」を導入している。新聞の作成からまとめ，発表，質疑応答を通して４技能を総合的に育成することをねらいとしている。来年度は本校の課題である「読む力」「書く力」の向上を図るため，ＮＩＥと連携した取り組みを学校体制で進める。

２年生が作成した英文新聞

【社会科】

今年度は全学年で「みんなで読もう新聞コンクール」に参加した。社会的事象に向き合い，多面的・多角的な思考力と判断力の育成をねらいとした。

【技術・家庭科】

次の単元で，新聞記事を活用した授業を行い，課題意識の高い課題追究が見られた。

①食品の保存（１年）
②加工食品の選択（１年）
③環境に配慮した生活（３年）
④幼児とのふれ合い（２年）

【道徳】

道徳主任から各月のねらいとする「価値項目」に合わせ，授業で活用できそうな新聞資料が紹介され，全校体制による新聞資料を活用した道徳の実践が推進されている。

⑸投稿やコンクールへの参加を通した「思考を深め発信する場」の設定

「資料活用能力･思考力･表現力の育成」を図ること，「『問い』をもち，思考を深め発信する子どもたち」の具現化に迫ることをねらいとして，地元新聞社「読者欄」への投稿や各種コンクールに参加した。これらの取り組みにより，思考力，判断力，表現力の高まりが見られるとともに，自己の考えを進んで発信しようとする生徒の姿が多く見られるようになってきている。

①国語科における取り組み

「１８歳選挙権」をテーマとしたパネルディスカッションとそれを生かした意見文を新聞社の「読者の投稿欄」に投稿した。この取り組みを通して，社会のできごとに関心をもつとともに，自分の考えをもつ面白さ、自分の考えを他の人と話す大切さを実感することができた。

国語の取り組みを紹介した記事　10/18

②社会科における取り組み

社会科の取り組みとして，全校生徒が日本新聞協会主催「みんなで読もう！新聞コンクール」に参加した。生徒は社会的事象に向き合い，自分の考えをもつとともに，生徒の多面的・多角的な思考・判断を促すことができた。この取り組みは高い評価を受け，「優秀学校賞」を受賞した。

③全校の取り組み「新聞きりぬきコンクール」

全校生徒が秋田魁新報社主催「新聞きりぬきコンクール」に出品した。作品のテーマを見ると，秋田の伝統・文化や自然，米作りなど多岐にわたり，ふるさと秋田や由利地域のよさと課題を発見するよい機会となった。

④全校の取り組み「新聞を読む週間」と「由利中スピーチタイム」

「社会に関心を向ける」こと，「公の場で自分の考えを積極的に発言できる生徒」を育成することをねらいとして，新聞を読み，気に入った新聞記事をシートにまとめ，それをクラスのみんなに紹介する活動を今年度から取り入れた。

由利中スピーチタイム　生徒発表の様子

３．終わりに

ＮＩＥ実践校としての成果と課題は次の通りである。

〈成果〉

①「学ぶことと実生活との接続」が促され，学習する必要感や課題意識の高まりにつながった。その結果，意欲的で主体的な課題追究が見られるなど，課題解決学習の充実が図られている。

②読み手を意識した新聞づくりや自分の考えを他者と交流する場を通して，各教科，領域で思考力，表現力の向上が見られた。

〈課題〉

①文部科学省指定「英語教育強化地域拠点事業」とＮＩＥを関わらせた取り組みを全校体制で進め，「読む力」と「書く力」の向上を図っていきたい。

②新聞記事の活用や新聞づくりを通して主体的・協働的な課題解決学習を充実をさせ，「分かった」・「できた」という満足感や達成感の充実を目指していきたい。

来年度もＮＩＥを文部科学省指定「英語教育強化地域拠点事業」の研究実践にからめながら計画的に進め，英語の「読む力」「書く力」の育成強化を図っていきたい。

新聞を活用した思考力・判断力・表現力の育成
～新聞にある「なぜ」から考える～

羽後町立羽後中学校
教諭　白　石　和　己

1．はじめに

本校は，生徒数216名の学校であり今年度をもって閉校し，来年度は，羽後町3中学校統合となる。ＮＩＥ実践指定校としては，平成25年度から3年間実践を積み重ね研究を進めてきた。生徒たちは，緑あふれる豊かな自然と「重要無形民俗文化財西馬音内盆踊り」に代表される地域の伝統文化に誇りをもち，ふるさとを大切にする気持ちにあふれている。また，作家井上靖氏作詞，作曲家芥川也寸志氏作曲の校歌を「日本一の校歌」と称して，敬愛するなど愛校心に満ちあふれている。生活や学習活動に向かう姿勢もよく，部活動等，様々な分野で成果を上げている。全国学力学習状況調査や秋田県学習状況調査のアンケート結果も「学校が好き」「毎日が楽しい」等，情意面における割合が100％に近い。反面，筋道を立てて考え，伝えようとするなどの思考・判断・表現力に課題がある。特に，秋田県学習状況調査からは，「必要な情報を取捨選択し，自分の考えを論理的に説明する力」の不足が課題として見えてきている。そのため，情報活用から思考力・判断力・表現力を身に付けることをねらいとして新聞を活用し，さまざまな情報の中から自分の考えを深めることができるような実践に取り組んでいる。

H27.6.30 秋田魁新報より

2．実践内容

(1)日々の実践

①新聞閲覧台の設置

図書室の閲覧

新聞からの情報に触れやすい環境づくりの一環として，新聞閲覧台を校舎3階図書室と2階第2音楽室（多目的スペース）に設置し，4社の新聞を常に閲覧できるようにした。新聞の交換等は，毎日の生徒会図書委員会の活動として取り組んでいる。また，過去の新聞をストックし，スピーチや授業で活用できるようにした。これによって，昼休みや放課後などに新聞を読みにくる生徒が増えた。また，複数の新聞記事を比較して読むことができるようになった。

ストックされた新聞

②ＮＩＥコーナーの設置

新聞に親しむ環境づくりの一環として，各学年教室壁面に「ＮＩＥコーナー」を設けた。そこに各紙のトップ記事を掲示し，出来事の取り上げ方を比較したり見出しの言葉を工夫したりしていることなどが分かるようにした。全国紙の中でも記事の取り上げ方に軽重があったり，見出しの言葉に違いがあったりすることに興味をもつ生徒も出てきている。

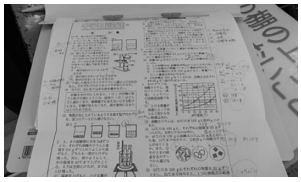
多目的スペースの掲示

教室の掲示

また，秋田魁新報の「週刊ＮＩＥ」のコーナーや日本経済新聞の「ニュースクール」のコーナーを掲示している。最近のニュースを分かりやすく解説したものや職業についてのインタビューや紹介など，中学生向けの記事が多いため，興味をもって読む姿が多く見られた。

③秋田魁新報中学自習室の活用

３年生の基礎・基本定着の一助として，秋田魁新報の中学生自習教室を毎日の課題として取り組んでいる。毎日の集配は，生徒会学習委員が担当している。


中学自習室ファイル

⑵授業の実践

①「羽後中新聞をつくろう」（国語１年）

実際の記事を読みながら比較検討することで，新聞の紙面構成や，記事の取り上げ方，５Ｗ１Ｈについて学ぶことができた。

第１時

教科書教材「新聞の紙面構成の特徴を知ろう」と秋田魁新報社「新聞を読めたよ」を読み，紙面構成の特徴を理解する。

第２時

教科書教材「二つの記事を比べよう」を読み，新聞によって同じ事を扱った記事でも，取り上げ方や伝え方が違うことを知る。

第３時

羽後中の魅力を伝えるために，どのような題材を選ぶか，グループで考える。

第４時

選んだ題材についての情報を収集し，内容ごとに整理して，何を伝えるのかを話し合う。新聞の構成，割り付け（レイアウト）を考え，分担を決める。

第５・６・７時

記事を書き，班員で推敲し合って清書し，新聞にまとめる。

②「プレゼン名人になろう」（国語３年）

新聞記事を読み，記事に書かれている「メインメッセージ」,「補足」,「意義」を読み取り，記事に対する自分の感想や考えを「コメント」として書く学習を行った。さらに，そのコメントを声に出して発表する「３０秒プレゼン」に挑戦した。自分の興味ある記事を探すという作業を楽しく進めることができた。また，５Ｗ１Ｈや事実と

意見の区別について学ぶこともできていた。

③「スピーチをしよう」（学級活動）

本校では，朝の会で新聞記事をもとにしたスピーチに取り組んでいる。日直が記事を選び，記事の概要とみんなに知ってもらいたいことや伝えたいこと，自分の考えを発表している。始めたころは，スポーツ記事などの身近で興味のある記事を選ぶ生徒が多かったが，回を重ねるごとに社会的な内容や地域の話題が多くなった。また，学年が進むにつれて，事実を伝えるだけでなく，感想や自分の考えも聞き手から受け入れられるように工夫して伝えようとする姿が見られた。この実践で身に付けた力は，入試での面接や作文等で直接活用することができると考えられる。これらの活用は，学校生活や学習活動に関連性もあり活動を継続していきたいと考えている。

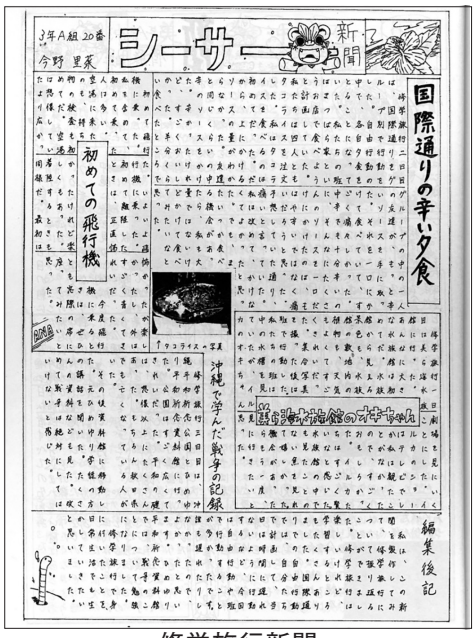
スピーチ原稿

④「新聞形式で伝えよう」

（総合的な学習の時間・学級活動）

国語の時間に学んだ新聞制作のノウハウは，総合的な学習の時間や学級活動における探究活動のまとめや情報交換の場面で生かされている。２年生の職場体験や３年生の修学旅行のまとめの活動では，記録するためだけでなく発表資料としても使っている。

伝えることを意識した新聞づくりは，学年が進むにつれて内容が濃くなり，積み重ねによって相手に自分の考えを確実に伝える力の育成になっていると感じられる。



修学旅行新聞

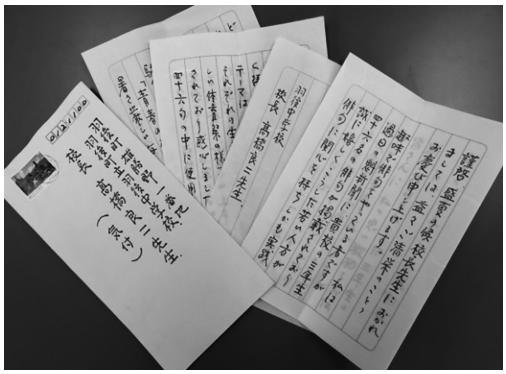
⑤「新聞から発信しよう」

（３年国語・キャリア教育）

各教科の授業でキャリア教育の基礎的・汎用的能力の育成を意識した授業に取り組んでいる。国語の授業では，人間関係形成・社会形成能力の育成を意識した作文指導で，修学旅行のひめゆり平和祈念資料館や旧海軍司令部壕見学のまとめをした。そこで，新聞から伝える方法を学んだ生徒の一部から

秋田魁新報に掲載された作文

実際の新聞から発信してみたいとの声が上がり，秋田魁新報の読者欄「ボイス」への投稿が実現した。羽後中生の作文（記事）が掲載された新聞を読む生徒の姿は，うれしそうで，どこか誇らしげに見えた。これがきっかけとなり「体育祭の俳句」「私のおすすめの一冊」等，読者欄投稿に意欲的に取り組んだ。この取り組みは，投稿を読んだ地域の方から手紙が届くなど発信することの喜びを味わうよい機会となっている。



投稿を読んだ地域の方からの手紙

３．成果と課題

⑴成果

○新聞閲覧台に向かう生徒の姿が日常の光景となった。生徒が新聞を身近に感じ，興味を示し記事を読む習慣が身に付いてきた。

○スピーチや新聞づくりをするときは，必要な題材を新聞記事から積極的に活用するなど，情報の取捨選択能力が高まってきている。さらに文章を書き情報を発信することに興味をもち，記事を読むだけでなく書いて発信するようになった。さらに，スピーチの能力も向上しており，はっきりと簡潔に話す生徒が増えた。

○新聞の記事を教材として取り上げ，授業の中で活用しようという教師側の意識が高まった。生徒も資料から客観的なものの見方を学んだり，社会に対する視野を広げたりすることができるようになった。

○新聞から，見やすい・理解しやすい表現方法を学ぶことができた。トップ記事の見出しや，各面の特徴等，新聞の構成を意識するようになり，自分たちが新聞をつくる際の手引きとして活用することができた。さらに，新聞づくりを通して見出しの付け方や要約の仕方，記事に必要な要素（５Ｗ１Ｈ）を入れることなどを学ぶことができた。

⑵課題

●学校では新聞を活用した学習活動を行って，様々な学習効果がえられている。反面，家庭においてはインターネット等のメディアによる情報収集の量が新聞による情報収集の量を上まわっている生徒が多い。家庭と連携しながら新聞に親しむ時間を増やすことを啓発したが，学校と家庭のみの取り組みには限界がある。そこで地域全体で関わっていく等，広範囲にわたる取り組みも必要と思われる。

４．おわりに

新聞記事には，必ず「なぜ」がある。それは，新聞記者の「なぜ」であったり，読者の「なぜ」であったりと様々である。しかし，それを読んだり，活用したりすることは，記事の中の記者や読者の「なぜ」に触れることになる。そして，読み手が書き手の思いや考えを共有したり，それらに同調したりすることで，さらに新たな「なぜ」が生まれることになるのではないか。そして，それが生徒の学ぶことへの意欲に結び付き，自分の考えを深め，発信しようとする姿勢に結び付くのではないだろうか。

ＮＩＥ実践指定校３年間の取り組みで新聞による様々な教育効果を実感できた。これらの取り組みや効果が統合羽後中学校に受け継がれていって欲しいと思う。

ＮＩＥ実践と全国大会

能代市立能代第二中学校
教諭　秋田谷　みゆき

１．はじめに

ＮＩＥの実践の６年目の今年は、全国大会秋田大会で授業を公開することとなった。

今まで、新聞を活用した取り組みは続けてきたが、朝の１０分～１５分を使ったものであり、新聞を中心に据えた授業実践は、それほど多くはなかった。

そこで、どんな授業にすべきかかなり悩み、秋田魁新報の大石さんのアドバイスを受けながら、今まで続けてきたことを生かす方向で、考えた。つまりコラムを読んで、意見を交わす授業が本校には、自然だと思えた。

２．なるべく通常通りの活動を

公開授業の学年は、３年生と決まっていたが、他の学年も通常通り金曜日の朝15分間を使って、コラム記事を読み、意見を書くことは続けていた。

全国大会は、あるけれどもそのための特別なことは、なるべくしないこととした。特に、夏休み前は、部活動も忙しくなる時期であり、授業も大切にしなければならないという考えからである。

コラムに取り上げたのは、「コンビニ弁当を考える」「悩み事相談・夕食後お菓子やめない父」「あいさつ・大人のあいさつに警戒？」「18歳の選挙権」「もしも～と考えるとき」（保護者の意見も）「悩み・取り柄のない私の就活は？」「勝者の所作は美しく・武道にガッツポーズは必要か」など内容は、多岐にわたる。

昨年度から他校の生徒（能代南中や八郎潟中）と同じコラム記事を読んで、意見を交換したり、親子でのこのような企画は、生徒にとって新鮮であり、意見文を書くときも意欲的になり、内容の濃いものになっていった。

【緊張しながらも自分の意見を主張】

「コンビニ弁当を考える」

私は、子供からお年寄りまで安心して利用できるように地元で取れた野菜をたくさん使うことやできるだけできたてを食べてもらうことなどを気をつければよいと思いました。また、バリアフリーの設備をつければいいと思いました。

３年　Ｍさん

僕は、これから増えていく高齢者のためにも老人ホームや高齢化が進んでいる住宅地などに老人向けのコンビニを造ればいいと思う。硬いものや消化しにくい物を使っていない弁当などを取り扱うようにすれば、活発に外に出る高齢者も増えて、孤独死とか筋力の低下も防げると思う。

３年　Ｓさん

「悩み事相談・夕食後お菓子やめない父」

続けてきた習慣を急に変えることは大変なことだと思います。少しずつ変えていっては、どうでしょうか。例えば、量を減らしたりお菓子を果物に置きかえたりすることができると思います。「今日から食べない」を目指すのではなく、長い目で食べないようにできればいいのではないでしょうか。

3年　Oさん

自分の思っている素直な気持ちをそのまま父に伝えればよいと思う。家族にとって父は、大切だから、死なないでほしいとはっきり教えてあげればいいと思う。お菓子を食べるのを急にやめるのはできないから、少しずつでも減らしていけばいいと感じた。父には、子供が直接言うのが一番効果的だと思う。

2年　K君

私もＪ子さんの気持ちがよくわかります。なぜなら、私の父もいくら言ってもタバコをやめないからです。私たちは、もしものことがあったら大変だと思って、今のうちに忠告しているのに。言うことを聞いてくれなくても、とにかくあきらめないで父に忠告し続けることが大事だと思います。家に一切お菓子を置かないとか、ちょっとした意地悪するのもいいかもしれません。これからもお父さんが夕食後のお菓子をやめられるようにがんばってください。

1年　Ｉさん

「選挙権１８歳から」

私は、今後18歳になった時、このような記事の気持ちになれるのだろうかと思った。私もまだ、「早いのでは」と正直思った。でも、18歳の力も社会には、必要とされている。

そう思うことは大事なことで社会もよりよくなればよいと思った。

約５年後，私も社会の力に少しでもなれたらいいなあと感じることができた。

1年　Oさん

僕は選挙権が18歳からになってとてもありがたいと思っています。そのわけは、ニュースを見たり、選挙速報をみたりするとこの人が当選しそうだなと思っても、別の人が当選したりするからです。何十年人生を歩んできた大人が選んだのなら仕方がないと思うかもしれません。しかし、若者の考えにも目を向けてほしいと思います。これからの日本を担っていくのは、若者たちです。だからこそ、今の日本には何が大切か、この地域には、どんな人が向いているかなどを若い世代が中心となって決めていけばいいなと思います。

2年　N君

【朝のＮＩＥ活動・短時間で集中して】

選挙権が18歳からに引き下げられ、より政治という世界が身近になった。でもそうなってしまった以上、政治に背を向けることはできない。むしろ向き合っていくべきだと思う。成人から18歳に選挙権がうつされたということは、世の中は我々子どもたちが政治の世界に入ることを許し、未来の決定権を委ねたということだ。

責任は重大である。　　３年　Ｋ君

このように、生徒たちは、柔らかい家庭的な話題にも社会的な話題にも、精一杯考えて、自分の意見を主張するようになっている。

しかし、授業で新聞を使い、意見を交換し合うには、どのような授業がよいのかかなり悩んだ。

３．ＮＩＥ全国大会

全国大会に向けて、悩んだのは記事選びとどのように話し合わせていくかだった。

文章は、書き慣れているがその意見をどのような形で出し合い、比較し、検討させていけばよいのか。

生徒の意見は、多様でその面白さや視点にはいつも感心している。その良さを生かし、新聞記事になるべく関わらせる授業としたいという希望があった。

コラム記事選びに関しては、秋田魁新報が報じた「ぐんまちゃん悲願の金メダル」という「ゆるキャラグランプリ」に関する事実を伝える記事と「秋田の新ゆるキャラ」に対するコラム（記者の意見も含まれる記事）を取り上げることにした。

当初は、練習用にと考えていた記事であったが、生徒が興味を示しやすい点、わかりやすく短時間で内容を理解しやすい点、発言しやすい記事である点からこの記事で行こうと決めた。単元名は、「秋田のゆるキャラから秋田の未来を考えよう」

【多くの人に見守られながら】

単元の構想は、次の通りである。

１時　事実を伝える記事をもとに意見を交換する。

２時　コラム記事をもとに立場を決めて話し合う。

３時　前時までの考えをまとめ、投稿文を書いて，実際に投稿する。

本時の授業の大まかな流れは，初めにコラムを読み，「秋田に新ゆるキャラが必要か不必要か」つまり，「スギッチを生かすか」，「秋田の新ゆるキャラをつくるか」で自分の立場を明確にして自分の考えをもつ。それからその根拠をもとに話し合わせた。注意したのは、コラム記事のどの部分に着目して、その意見を述べるか、はっきりさせることである。つまり根拠を記事の文章としっかり絡めるようにした。

そのために、コラム記事を拡大し、着目し

【コラム記事を拡大して掲示】

た部分に線を引いて注目させるようにした。その後,「ゆるキャラは，何のためにあるのか」を考えさせ,「秋田をアピールするためのゆるキャラ」であることを確認した上で，最終的に自分の意見を書かせることにした。

話し合いに関しては，新聞の記事を根拠に，指名なしでフリーに発言させる場面と意図的に指名する場面を組み合わせて行うことにした。この話し合いの部分は、大切であるため、生徒が一番やりやすい方法がよいと考えた。生徒にアンケートを採り，この形に決めた。

夏休みに入って１週間後の授業である点，会場が秋田市である点，教室ではなく，大会

【根拠を示して自分の意見を発表】

議室でマイクを使っての授業となる点など不安な要素は多かった。

当日は，多くの人に囲まれた状態であったが，普段と変わらない様子で堂々と発言する生徒の姿が見られた。生徒たちも自分の考えを十分発言できて満足したようであった。

物怖じせず，生き生きと自分の考えを話す二中生に支えられ，緊張しながらもどうにか授業を終えることができ，本当にほっとした一日であった。

９月に入って，正式に県の新ゆるキャラが発表され，それに対する投稿文を書き，実際に投稿した。「秋田魁新報」に４名の意見文が掲載され，コラムでも取り上げていただいた。

私たちは、授業で、「秋田の新ゆるキャラについて」の話し合いをした。みんなは、動きがあるキャラクターを作り出すや秋田だけの特徴のあるキャラクターを作るという意見を出していたが、自分は、それ以前に問題があると思う。それは、秋田県の人がそのゆるキャラを見て秋田の良さに気づくことができるかだと思う。秋田県の人が気づくことができないことを他県の人が気づくのは難しいと思う。結論として、秋田の人が「秋田にそんな魅力があったのか」と気づけるキャラクターであること。その次に動きが軽いや子供受けがいい、などのことを含んだ キャラクターを作ってほしいと思う。

今後、秋田県が他県の人たちの話題になることを願っている。

授業後の感想から

投稿文「言葉でも特徴をPR」

新聞で県の新キャラクターの記事を読み、クラスでの話し合いを思い出した。そこでは、「手足を長くしたほうがよい」という意見があり、僕も共感した。今回誕生したキャラクターを見ると、その通りのデザインで良いと思った。

モチーフはなまはげで、未来から来た子ども型ロボットとのことだ。秋田＝なまはげというイメージは、多くの人が持っているだろう。だが、県外の人にとって詳しく知らない部分もあるのではないだろうか。そこで、秋田弁が好きという特徴を活用し、見た目だけではなく言葉でもなまはげとはどのようなものかを伝えれば、県外の人にもより知ってもらえると思う。スギッチも引き続き活動するということなので、これからは二人三脚でがんばってほしい。

３年　M君

４．おわりに

全国大会が終了した後も、記事を読んで、意見を書く活動は続いている。継続的な取り組みで、生徒が自分の意見を表現することに自信をもってきているように感じているし、内容も説得力のあるものになってきていると感じている。

ＮＩＥ×ＳＧＨ
～スーパーグローバルハイスクールにおける、ＮＩＥを用いた問題解決力の育成～

秋田県立秋田南高等学校
教諭　關　　友　明

１．はじめに

本校は、今年度より文部科学省の「スーパーグローバルハイスクール（ＳＧＨ）」として、グローバルリーダー育成の研究指定を受けている。ＮＩＥ実践指定の３年目となる今年度は、３年間の実践の集大成と位置づけ、特にＳＧＨと連携した授業実践を行い、ＮＩＥ全国大会で公開した。その報告を中心に今年度の実践について述べる。

２．実践内容

⑴ＳＧＨについて

本校は、平成２８年度に中高一貫教育校となる。その基本理念は、郷土や国家を支える高い志と国際的視野を備えたグローバルリーダーの育成である。ＳＧＨの趣旨は、本校の基本理念と合致しており、学校全体のＳＧＨ研究開発構想を、“「こまちの里」の高校生が、「地球村」の食糧問題に挑む！”と題して、秋田とオーストラリアの農と食の課題を調査検討しながら、地球の食糧問題の解決策を提言することをテーマとした。

さらに、ＳＧＨで育成すべきグローバルリーダーに必要な能力について、課題設定能力・課題探究能力・論理的思考力・プレゼンテーション能力・実践力の５つの力ととらえることとした。それらの能力を磨き、身に付けていくための課題研究活動として、教育課程上の特例により、学校設定教科「国際探究」を設定している。

今年度は、ＳＧＨに関わる授業研究の試みとして、この「国際探究」の授業にＮＩＥを取り入れ、「時事問題について資料を比較検討して、討論する」という単元を設けて、４時間配当で１年生全クラスに実施した。生徒たちに、課題設定能力・課題探究能力の基礎として「情報を読み取って吟味する力」や、論理的思考力・プレゼンテーション能力の基礎として「根拠に基づいて自分の考えを表現する力」をさらに磨いてほしいと考えたからである。

⑵ＮＩＥ全国大会における公開授業

７月、秋田市を会場に行われたＮＩＥ全国大会高校分科会において、１学年学校設定科目「国際探究Ｉ」の授業を公開した。

①教材について

前述の能力を磨くためには、相手の主張に共感したり、自身の考えを問い直したりする、お互いを高め合う協働的な学び合いの場が必要と考えた。その点から、複数の新聞社説の比較と討議を学習活動の中心に据え、ＳＧＨのテーマと関連して日豪ＥＰＡ合意について扱った社説を選んだ。用いたのは、社説Ａとして「北海道新聞 2014 年４月８日の社説」、社説Ｂとして「神戸新聞 2014 年４月９日の社説」である。

②単元のポイント

・本文中の根拠に基づいて読解する姿勢や、相手の意見を踏まえて持論を表現する論理的思考力や表現力の育成。
・課題解決能力を育成する授業の観点の

うち、メディアリテラシーの向上と戦略的表現力の育成。

・アクティブ・ラーニングの要素として話し合い・意見交流・討論など協働的学習活動を経て、生徒たちが相互の思考を吟味して主体的に問い直していく活動の推進

教材「社説Ａ（北海道新聞）」

教材「社説Ｂ（神戸新聞）」

③全体計画

【第１時】社説Ａ・Ｂの内容を理解し、主張の違いを読み取る。

【第２時】社説Ａ・Ｂを比較し、取り上げている内容や表現の違いを整理する。

【第３時】（本時）社説Ａ・Ｂの「書かれ方」を吟味した上で、どちらの社説を支持するか討論する。

【第４時】社説の範囲外の資料や情報を持ち寄って議論を深め合い、わかったことをまとめる。

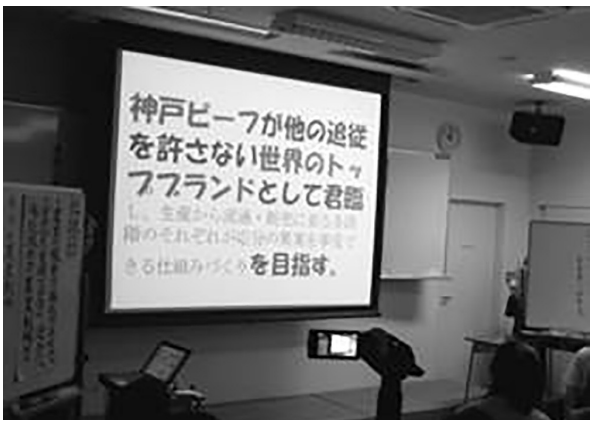
④指導方法について

二つの社説を比較し、社説の主張や根拠について整理して読み取っていく学習活動は、昨年度、１学年の「国語総合」でも実践した。その概況は昨年度のＮＩＥ実践報告書に記載の通りである。

今年度、新たな試みとして、国語科と地歴・公民科のティームティーチングを取り入れた。社説の読み取りを深めていく上で、論点についての背景知識や資料を扱う技能が必要となる場面が少なからず出てくる。そこで、教科横断的な学習が効果的であると考えたからである。

指導に当たっては、言語活動を中心とした学習活動の進行については国語科教諭が主に担当し、時事問題や用語・資料を扱うことについては地歴・公民科教諭が主に担当することとした。

国語科教諭が中心となって討議を進行



地歴・公民科教諭がプロジェクターで、
地域や自治体の状況などについて説明

⑤授業者より

本時の目標は、根拠をしっかりと示した上で討論ができるということ、そしてその活動から「社説」というものの書かれ方について気付いてほしい、クリティカルな読解力を養ってほしいと願い、設定した。その上で新聞の主張である「社説」は、教材として好適であった。

ＮＩＥとしての先進性は、同じ事柄についての、ローカル紙の社説を比べ読みするということにある。大手新聞社の記事の比較などの授業実践の事例はよくある。しかし、同じ事柄についてのローカル紙の社説の比較は、地域性や読者への書き手の意識を垣間見ることができ、文章自体やデータや資料の取り上げ方を比較吟味する活動に非常によくマッチする。この授業はそうした提案でもあった。

⑥研究討議の概要

授業後の研究討議には８０名以上が参加した。参観者や助言者からは、特にローカル紙を用いた点について、論点の明確化につながった、新聞の教材化の可能性を広げた等、高い評価を受けた。また、次時以降の展開については、特に地歴・公民科の観点から関連する資料を検討することで、例えば北海道新聞は政治的な視点、神戸新聞は輸出拡大という経済的視点から論じているなど論拠をもって比較でき、社説の読み込みがさらに深まるという点が挙げられた。

一方、生徒の言語活動については、クラス全体でも小グループにおいても、発言の数や内容に温度差があった点が指摘された。発言を引き出す対応については、本時のような討論を軸に据えた授業を展開する上での課題であろう。またそのほかにも、評価に関する質問や、家庭で新聞を購読していない生徒への対応についてなど、様々な角度で議論が展開され、活発な討議となったことを付記する。

⑵新聞記事スクラップの掲示

１学年では、昨年度途中から行っていた、新聞記事をスクラップにして廊下に掲示するという活動を年度当初から行った。記事の選別やスクラップの作成は、毎週輪番で、新聞を設置した３クラスの生徒が担当した。特に「国際探究」のテーマに関わる記事が多く選ばれ、生徒たちはポイントをまとめたり所感を書き込んだりして、読者の目を引くよう工夫していた。また、新聞の設置場所については、教室のほか、設置時期の過ぎた紙面を校内の共同スペースに集積させ、新聞コーナーとした。

ＳＧＨの探究活動では、これらの新聞記事が食糧問題についての興味を喚起したり、研究のきっかけを作ったりすることにつながっていた。例えば、「国産小麦の普及と世界の小麦の適正配分」について研究したグループが、県内産小麦を使用している近隣のパン屋についての記事を見つけ、そのパン屋に電話インタビューを実施した。そのグループはその後、大潟村の小麦生産農家でフィールドワークを行って、県内産小麦パンのレシピ開発を行うという研究成果を発表した。

新聞スクラップ

⑶教科・総合的な学習の時間での実践

昨年度までの経験をもとに、今年度は国語総合や現代社会、日本史Ｂなど多くの教科・科目でＮＩＥの授業実践が意欲的に行われた。これらの実践では、教科の枠を超えて、インターネットとの関わり方について考えさせたり、自身の進路や生き方について深めさせたりしたものも見られた。

また、２年生の総合的な学習の時間において、進路指導と連携して、小論文試験や面接試験への対策に新聞の活用を検討した。

２月、秋田魁新報社ＮＩＥ推進部の大石卓見氏を講師に迎え、「新聞と大学入試」というテーマでの講座を実施した。一昨年度に引き続いての実施である。秋田魁新報のコラムを教材として、あえてやや抽象的なテーマを設定した記述演習に、生徒は頭を悩ませながら取り組んでいた。実施後の生徒の感想からは「記者の方から実際の新聞記事の書き方を伺い、論理的な文の組み立て方を学ぶことができた」、「新聞には、ニュースの情報だけではなく、小論文のテーマになるような内容も多く含まれていることがよく分かった」、「これまでと違った新聞の読み方ができるようになったと感じた」などの声が見られた。

ＮＩＥ講座「新聞と大学入試」

３．まとめとして

今年度のＮＩＥは、ＮＩＥ全国大会秋田大会における公開授業という、大きな事業があり、それに向けて準備を進めてきた。研究指定を受けた学校で陥りがちなのは、「実践研究のための実践」という状況である。そこで、ＳＧＨ指定や中高一貫など大きな変革の時期を迎える本校にとって、ＮＩＥは大きな助けになると考えた。新聞記事を用いた学習活動は、生徒の主体的な探究活動に非常に有効であり、また、批判的な読解や論理的な思考を深めることにつながる。これは、先に述べた本校の基本理念に照らしても、グローバルリーダーに必要となる資質・能力を育む上で特に重要な部分であり、ＮＩＥとＳＧＨの連携はごく自然に取り入れられることとなった。そしてその結果、「国際探究」の諸活動を進める上で、ＮＩＥの存在意義は非常に大きなものであったといえる。また、各教科や総合的な学習の時間での実践から、進路指導や生徒指導などにおいてもＮＩＥの有効性が感じられた。

こうしたＮＩＥ活動の成果は教員の間にも浸透したようで、各担任によって、朝のＨＲで新聞記事を用いたスピーチを実施したり、学級日誌に新聞記事欄を設けて記事の要約や感想を書かせたりする試みも見られ、生徒の新聞講読習慣の向上につながっていた。

ＮＩＥを進める上で、教員間でおもな課題として挙げられていたのは、必要な記事の入手である。授業で多く用いるのは新聞紙面の印刷物である点を考えると、紙面のデジタルアーカイブ等の充実を求める声は多い。しかし、例えば新聞各社に協力を依頼することで、記事検索・提供をしていただくことも可能である。教員が積極的に新聞社側にコンタクトし連携していくことで、ＮＩＥの活用場面はもっと増えるだろう。

本校のＮＩＥの実践研究も３年を数えたが、これまでの成果を基に、ＮＩＥの実践は今後も継続、深化させていきたい。そして中高一貫校においても、本校の特色ある授業研究のひとつとして、さらに発展させていければと考えている。

ＮＩＥ活動を通してこれからのライフデザインを描く

秋田県立雄物川高等学校
教諭　工　藤　裕　史

１．はじめに

⑴本校の概要

本校は１９５１年（昭和２６年）に創立され、今年は創立６５年目の年にあたる。普通科各学年３クラス編成であり、「特別進学」は入学次から、２年次からは「情報処理」、「教養」、「福祉」の３コースに分かれ、進路希望や個に応じた学習が可能となっている。

本校の最も大きな特色が、総合的な学習の時間「パスカルタイム」である。「パスカルタイム」で目指すものは、「向上心と探求心をもって現代社会をたくましく生き抜く社会人（職業人）の育成」、そのための「未来を切り拓く未来型学力の育成」である。

⑵「パスカルタイム」におけるＮＩＥ

新聞記事を読むことは、社会に対する興味関心が高まり、問題意識が芽生え、ものの見方や考え方が深まるなど、たくさんの効果が認められる。そのためパスカルタイムでは以前から新聞を活用した取り組みを行ってきたが、平成２５年度に秋田県ＮＩＥ推進協議会からＮＩＥ実践校の指定を受け、パスカルタイム委員会・ＮＩＥ委員会により、新聞記事を活用したキャリア教育の推進を研究している。

そこで「ライフデザイン」の取り組みに新聞を活用することにした。「ライフデザイン」とは、様々な生き方や考え方に触れ、自分自身の在り方生き方を考えることをねらいとした活動である。生徒のライフデザインをより明確にするために、新聞記事を読んで感想や意見をまとめさせ、社会や職業に対する興味・関心を広め、社会の一員として自分にできることを考え、感じたこと・考えたことを表現し発信する活動を計画した。

２．実践内容

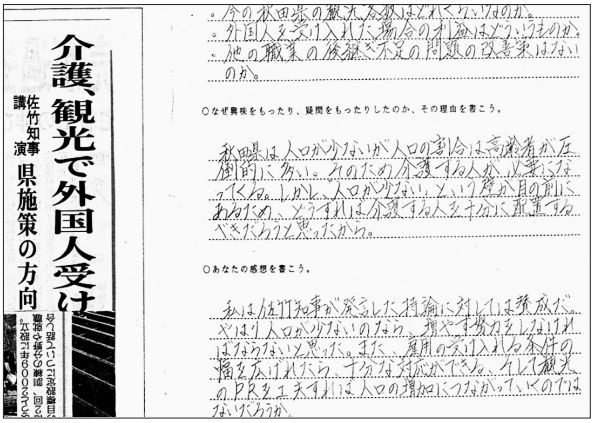
⑴三年間の計画

年度	実施日	実施内容	生徒の活動
平成25年度 1年次	夏季休業中	職業人インタビュー	身近な社会人にインタビューを行い、働くことの意義について考える。
	夏季休業中 冬季休業中	新聞を読もう①②	自分の興味のある分野や職業に関する記事を見つけ、感想や意見をまとめる。
	9/10(火)	分かりやすく伝えるために	新聞記者から新聞の構成や記事の書き方、記事を読み取るポイントなどについて話を聞き、新聞についての理解を深める。
	1/28(火)	６人の人生	６人の生き方についての文章を読み、自分はどのような生き方をしたいか考える。
		ライフデザイン①	
平成26年度 2年次	毎週	新聞を読もう	記事を集め、感想や意見をまとめる。
	5/29(木)	新聞を読もう③（まとめ①）	集めた記事やその感想を発表し合い、様々な分野や職業についての興味・関心を広める。
	11/11(火)	新聞を読もう④（まとめ②）	同じような分野や職業に興味のある者同士で記事や感想を発表し合い、意見や感想を深める。
平成27年度 3年次	毎週	新聞を読もう	記事を集め、感想や意見をまとめる。
	6/10(水)	人生の流儀 ライフデザインを考える②	社会人の生き方や考え方を聞き、自己の在り方生き方についての考えを広める。
	6/23(火)	ライフデザイン③	これまでの活動を振り返り、自己の在り方生き方、社会の一員としてどう貢献するかについて考えを深め、表現する。
	7/14(火)	ライフデザイン④	同上
	7/31(金)	ライフデザイン⑤	これまでの活動を振り返り、自己の在り方生き方について考えを深め、社会の一員としてのライフデザインを完成させる。

⑵新聞スクラップ（３年次）

○ねらい

将来就きたい仕事に関する新聞記事を探し、記事の要約や感想、意見を書くことで、進路意識の高揚を図ると共に、自己のライフデザインを考える一助となるようにする。


介護、観光で外国人受け
佐竹知事講演 県施策の方向

○なぜ興味をもったり、疑問をもったりしたのか、その理由を書こう。

○あなたの感想を書こう。

生徒が書いたスクラップシート

⑶ライフデザインに関する授業実践

①「人生の流儀～ライフデザインを考える～」（社会人インタビュー）

○ねらい

社会人の生き方や考え方を聞き、自分自身のあり方・生き方を考える。

○講師

有限会社　伊藤製作所
社長　伊藤　俊明様

横手やきそばサンライ’S
代表　田畑　晃子様

秋田魁新報社 NIE 推進部
三浦ちひろ様

生徒の価値観や将来に対する考え方が広がるように、様々な職種の方や最初の職業と現在の職業が違う方、秋田県出身者ではないが秋田県、横手市の活性化のために尽力している方を講師にお招きした。

○質問事項（アンケート）

・高校時代の目標や夢、ライフデザイン
・高校時代、進路選択する際に影響を与えた人や言葉、出来事など
・人生のターニングポイント、転機
・現在の職業に至るまでの経緯
・生活信条やモットー、大切にしていること
・今後の目標や夢、ライフデザイン
・高校生へのメッセージ

○生徒の感想

・社会に出て一流の人間として働いている方々のお話は、とてもためになり説得力があると思いました。今は先生や親、友人に情報でも何でも与えてもらっているけれど、社会に出たら、他人に頼らないで自分を探していかなければならないので、今から訓練していきたいです。自分の周りだけ見て可能性を見つけないで、広い視野をもって自分に向いているものを見つけていきたいです。
・今回の講演で３人の方々から進路選択について、仕事の中で今後の生き方を見つけたというお話を聞き、参考になることがたくさんありました。また「ライフデザイン」を考えていくには、何事も自分なりに考えたり、人との付き合いの中でヒントを見つけたりしていくことが大切だと分かりました。私は今保育士になるために短大への進学を考えているので、今日聞いた話を参考にしながら、自分のライフデザインを考えていきたいと思います。

生徒に自分の経験を話す講師の方々

・高校時代は意外とみなさん漠然としていて、なかなかイメージが持てなかったということに驚きました。私も自分が将来やりたいことが見つからなくて悩んでいるので、たくさん悩んでたくさんのことを経験して、自分に合った仕事を見つけられれば良いと思いました。これがあるからこの仕事は無理だと否定的に考えるのではなく、できないけれどこのやり方ならできるかもしれないと肯定的に考えて、行動していくようにしようと思いました。失敗して怒られるのは怖いけれど、失敗しなければ分からないこともたくさんあると思います。自分から教えてもらう環境を作り、失敗から成功を学び、たくさんの人と関わっていきたいと思いました。

・今回３名の講師の方々から、それぞれのライフデザインや人生経験についてのお話を聞いて、高校時代に将来何をしたいのかを決めるのは難しく、何かのきっかけで全く違った見方になり、さらにそれはその時は良いか悪いか分からないものだが、意味が無いことはないということが分かりました。今自分ができることを見つけ、それが正しいか分からなくても全力でやってみようと思いました。また思っていることを口に出すように心掛けていきたいです。

②「ライフデザイン～蓄積した新聞記事を活用して自分の将来と夢を考える～」（第３学年・総合的な学習の時間）

○ねらい

これまでの活動を振り返り、これからの自分の在り方や生き方について考えを深め、これからの生き方をデザインする。

グループ内で自分のライフデザインを発表

○学習過程

	学習内容	生徒の活動	指導上の留意点	評価
導入 ５分	・３年間の取組を振り返る。 ・自分の進路目標や興味の変化を確認する。	・これまでのライフデザインに関する取組を振り返る。 ・新聞スクラップやワークシートを振り返り、自己の考え方の変容に気づく。 ・本時のねらいを確認する。	・これまでのまとめとして、グループでライフデザインを発表し合い、各自のライフデザインを修正することを確認させる。 ・自身の変化に着目させる。	
展開① １５分	・グループでライフデザインを発表し合う。	・３～４人のグループを作り、自分のライフデザインについて発表する。 ・聞く側は、印象に残ったことや共感できること、疑問に感じたことをワークシートにメモし、発表者に質問する。（グループ）	・類似した進路希望の生徒３～４人でグループを作らせる。 ・発表時間は１人３分以内とする。 ・新聞スクラップを根拠に発表させる。 ・相互評価をし、グループ内で意見交換させる。 ・話を聞く側の姿勢が大切なことを意識させる。	・自信を持って自分のライフデザインを説明できるか。（発表） ・新聞などの根拠を示して説明できるか。（発表） ・相手の話を聞き、評価や意見交換ができるか。（シート）
	発表を参考に、自分のライフデザインを見直し、さらに明確にしよう。			
展開② １０分	・ライフデザインを修正する。	・グループでの発表をもとに、自分のライフデザインを見直す。（個人）	・グループ内での相互評価をもとに、自分のライフデザインを修正させる。 ・机間指導をし、必要に応じて助言する。	・自己の在り方や生き方についての考えが深まり、ライフデザインが明確になったか。（シート）
展開③ １０分	・全体でライフデザインを発表し合う。	・指名された生徒は、全体の前で自分のライフデザインについて、聞く側に分かりやすいように発表する。 ・聞く側は、印象に残ったことや共感できること、疑問に感じたことをワークシートにメモし、発表者に質問する。（全体）	・グループ内から１名推薦させ、全体に発表させる。 ・発表者は全体に伝わるように発表させる。 ・聞く側に伝わるように、適宜実物投影機でワークシートや新聞スクラップを映して発表させる。 ・聞く側にメモを取るように指示する。	
まとめとｼｪｱﾘﾝｸﾞ １０分	・これまでの取組について感想と自己評価を書く。 ・全体に感想を発表する。	・これまでの取組を総括しての感想を書く。 ・これまでの取組を振り返り、自分のライフデザインに対しての考えが明確になったか自己評価する。（個人） ・感想を発表し、全体でシェアリングをする。（全体）	・これまでの取組でライフデザインがどのように深まったかに着目して感想を書かせ、自己評価させる。 ・今後も新聞に学び、ライフデザインをよりよく修正することの大切さに気付かせる。	・これまでの取組を振り返り、自分のライフデザインに対する考えが明確になったか。（シート）

○指導・助言

外池智様(秋田大学教育文化学部教授)より

・ライフデザインを考えることで、人生全体、どう生きるかを考えることができる。意見の交流が自分の考えを磨き上げる。最後に自己評価し感想を書き、考えをアウトプットすることは非常に大切である。今後の課題としては、「やりたい＝できる」とは限らないため、現実はどうなのか、社会の事象に関心を持つことが大切である。今後も積極的に新聞を読み、社会に関心を持ち続けるような指導が大切ではないだろうか。

荒海謙一様（朝日新聞社秋田総局長）より

・今日の授業が出発点となる。思い描いたライフデザインと比べて現実はどうなのか。関心を持ったことを今後深めることが必要となる。今後も情報を集めていく習慣を身に付けてほしい。政治や社会（例えば選挙年齢の引き下げやブラック企業）との関わりなど、避けては通れない問題とどう向き合っていくかが重要となる。今後も新聞を通して関心を高めてほしい。

全体に自分のライフデザインを発表

3．成果と課題

○成果

・広い視野で将来を考えることができるようになり、進路選択の幅が広がった。

・入学次に比べ新聞を読む習慣が付き、社会に対する関心が高まった。

・新聞スクラップが面接や小論文等の進路指導に役立った。

○課題

・授業内での新聞の活用が難しく、日常的に使用することが難しかった。

・生徒にＮＩＥ活動を発信する機会が少なく、全校にＮＩＥ活動を浸透させることができなかった。

・ＮＩＥに関する職員研修を実施し、新聞を活用した授業や取り組みについ全職員が勉強する機会があれば良かった。

公開授業後の研究討議

○総括

３年間の新聞記事のスクラップ活動を通して、最初はスポーツや異常気象、天災など身近な話題や興味のある記事が中心だったが、徐々に視野が広がり幅広い記事を読むようになってきた。また学年を重ねるにつれて、将来自分が就きたい仕事に関する記事を読むことが増え、今後必要となる知識を付けようと情報収集するようになってきた。そして新聞記事から様々なことを感じ取り、さらにこの取り組みが仕事や生活をする上で大切となる、将来のビジョンや自分はどういう生き方をしたいのか、社会

の一員として何ができるのかといったことが考えられるようになってきた。この３年間を通して考えたライフデザインはあくまでも現段階のものである。今後も新聞や体験から、よりよく生きるためにライフデザインを修正して行くことが大切になる。卒業後も新聞を活用して、ライフデザインを修正し社会貢献できる人物となってほしい。

平成２７年度ＮＩＥの取り組みについて「形式」を真似て、生かす

秋田県立横手高等学校定時制課程
国語科　小西　宗子・松江　正彦

１．はじめに

横手高校定時制は平成２４年度からＮＩＥに取り組み、今年度で４年目となりました。本校がＮＩＥを始めたきっかけは、生徒の「コミュニケーション能力」を育成する手段として試してみたいという思いつきでした。

生徒たちは就職・進学どちらの進路を選択しても、その多くが「面接」を受けることになります。卒業後を見据えながら、生徒たちの姿を眺めたとき、そこには他者とのコミュニケーションに対して消極的な生徒像が浮かび上がってきました。授業を通して気付いたのは、他者との距離の取り方や人間関係の築き方に不安を抱えていることが生徒の受動的な態度に繋がっているということでした。そこで生徒が他人と関わりながら取り組めるもの、経験を積むための方法として「新聞」という形式が使えるのではないかと考えるようになりました。

そう考えた理由は「新聞」の持っている情報の多様さ、記者が取材をして記事を書くという基本的な構造にあります。また、常に変化し続ける社会の動きを捉えようとする新聞には人と人との関係性についてのあらゆるバリエーションが掲載されているともいえます。そこで、まずは生徒が情報を仕入れる環境の整備から始め、新聞の購読をお願いしました。

このような経緯から、本校のＮＩＥは「コミュニケーション能力の育成」というねらいから始まりました。振り返ってみるとこの４年間は新聞の「形式」を真似ることから始まり、やがて学び取った「形式」を活かして表現することを目指した期間だったといえます。

この４年間の具体的な実践内容については、主立ったものを以下に記しました。それぞれの実践の目的や課題についても簡単に記しています。これらの実践の中から一つでも興味を持っていただけるものがあれば幸いです。

２．実践内容

平成２７年度テーマ「『見出し』の活用」

①多目的ホールに新聞を設置

年度によって購読した新聞の数は変化がありましたが、学校事務部の協力を得て、新聞を手に取りやすい配置・表示を工夫しました。発行３日以内の新聞はホルダーに挟んで吊し、発行から４日経った新聞は段ボールで作った箱に二つ折りの状態で、下から上に新しいものを重ねていくように配置しました。

多目的ホールには大きな机がたくさんあるため、そこで紙面を広げることができ、新聞を読む環境としては恵まれていたように思います。

課題としては、新聞の整理を継続して行わないとすぐに乱雑になってしまうこと。また、購読紙が少ないときには新聞の取り合いになってしまうことです。今後はＮＩＥで購読できる新聞はなくなりますので、全教職員の協力を得て、紙面を確保したいと考えています。

②進路スクラップ

平成２６年度からスクラップの形式をプリント・紙ファイルに統一し、毎年改良をしています。今年度は生徒が記入する項目

として「見出し」を設けました。

スクラップ作成の流れは以下の通りです。月に１０枚、自分の進路希望に関わる「キーワード」を決め、それにまつわる記事を探し出す。マーキングしながら記事を読み、出典を明らかにして貼る。次に、記事に対する自分の考えを記す。最後に、自分の書いた文章に「見出し」をつける。これを一年間継続し、進路に関する１２０枚の資料をファイリングするのが理想の形でした。

スクラップ開始時は各自の用意したノートに好きなように書かせるスタイルで実施していました。しかし、生徒によって取り組みに差が生まれやすいという問題点がありました。その後、提出用紙を統一したことで埋めるべき「枠」が明確になり、そこに収めたいという生徒の気持ちを触発することができました。

また、教室後ろにファイルの置き場所を作り、誰のものでも見られるようにし、国語の授業やＬＨＲで使用する機会を設けました。この場合も、用紙の形式を統一したことで、それぞれの内容を比較しやすくなり、他の生徒に対する興味や関心が深まるようになりました。

例えば、スクラップを通してその人がどのような記事を選び、どんな意見を書いていたかを知っていれば、相手の思考を推し量る想像力が育成されます。また自分が気にとめなかった記事に出会うことで、新しい分野・未知の世界に出会うきっかけにもなりました。

進路スクラップの目的としては、他者理解から始まるコミュニケーションを活性化させ、最終的には生徒の想像力を伸ばすことが挙げられます。課題としては、スクラップをチェックする担任の負担を減らしつつ、進路面談に生かせる情報の蓄積をすることです。

なお、平成２８年度は担任の検印欄を作る予定です。同じ形式にすることで管理がしやすくなることはよいことです。ただし生徒が書いてみようと思える気安さ、担任が手に取って生徒と話すきっかけになったり、授業に使ってみたいと思わせる余白＝遊びの部分があることが、今後の改良のポイントと考えています。

③学校壁新聞コンクール

学校祭をきっかけにクラス単位で新聞を作成し、コンクールを行っています。他人と力を合わせて一つのものを完成させる経験をさせることが当初の目的でした。しかし、学校祭の催しが多彩であるために、新聞作成にクラス全員が関わることが難しいことが課題です。ただし個々の変容という意味では、クラスの特定の生徒の編集力、記述力が上がっていくことは間違いないので、目的自体が変化したとも言えます。

④「国語表現」のディベート

国語科の科目である「国語表現」の時間でディベートを行う際にはさまざまなものを資料として扱います。各メディアの特徴を考察しながら、自らの論拠を固めていく際には当然のことながら「新聞」を扱うことになります。特定の問題に対して「新聞」毎に論調が違うことを理解し、その背景になっているものを考えることで、生徒は「伝わってくること」と「伝わってこないこと」に気付きます。目的としては、自分で情報を集める方法を知ることにあります。

⑤冬休み新聞

冬休みを利用した国語科の課題として、生徒の生活を新聞の形式でまとめてもらいました。おおまかな設計図を示しており、書籍や映画のおすすめ欄や冬休み明けの百人一首大会にまつわる記事、今年度は学

校全体で取り組んだ地域ぐるみの防災訓練にまつわる記事を全員に書いてもらいました。提出されたものは、学年毎にファイリングし、図書室で閲覧できるようにしています。国語の授業中に回覧した際には、予想以上の反響がありました。自己開示を避けてきた生徒であっても、書いたからには多くの人に見てもらいたいという欲が生まれます。課題としては、多くの生徒に多くの紙面を見せる機会を作ることです。

⑥「いっしょに読もう！新聞コンクール」

新聞のコンクールは様々なものが立ち上げられており、それぞれ特徴がありますが、本校は日本新聞協会主催の「いっしょに読もう！新聞コンクール」への応募を継続して行ってきました。

記事を選び、自分の考えを書き、それを他者に見てもらってコメントをもらう。そのうえでさらに自分の考えを練り上げることが求められます。生徒が他者と関わる機会を得られるということもあり、夏休みの課題として実施しています。

⑦学校新聞「青雲館新聞」の発行

本校には、学内の情報を共有する場として「青雲館新聞」があります。各クラスの出版委員が中心となって作成し、今年度は年間で４回、新聞を発行しました。第一号の新聞を作成後、県の新聞講習会に参加し、「割り付け」の仕方について改善を加えました。また、委員会内での話し合いを密にすることで、新しい新聞が発行される毎に読みやすさ、記事内容の精度が上がっていったという印象があります。

課題としては、外部へのインタビュー記事に力を入れたために、経験知の高い４年次生が記事を担当することが多くなり、次年度に取材のノウハウが伝わっていない可能性があることです。実際のところ、出版

青雲館新聞

今年もやってきた！！
伝統のかまくらまつり

今年は寒かった！
吹雪に負けない

横手市役所危機管理課取材

「楽しく作業できた」

委員長コラム

平成 27 年度最後の青雲館新聞

委員の生徒だけでは記事を全て書くことができないため、委員以外の生徒にも記事を執筆してもらうことがありました。平成２８年度も出版委員はもちろんのこと、図書委員に書評を書いてもらったり、授業で作成したレポートを記事に取り込むなどして、紙面の多彩さを高めていきたいと考えています。

⑧「見出し」を意識した授業の振り返り

「国語総合」の授業では、新聞の「見出し」に見立て、毎時間の授業内容をノートの最後に自分の言葉で一行にまとめさせました。「見出し」を見れば、その時間の授業内容を思い出せるようにすることが理想でした。しかし、教師側の指示が不徹底で継続した指導ができず、「見出し」を上手く学習に生かすことができませんでした。来年度は、毎時間の初めと終わりの９０秒をそれぞれ前時の復習と本時の振り返りに充てたいと考えています。

⑨記者による授業内公開インタビュー

平成２７年６月２９日付けの秋田魁新報に、本校のNIEの取り組みについての記事が掲載されました。この記事のための取材を受ける際に、取材者である三浦ちひろ記者に、取材をする様子を生徒に見せたいという申し出をしました。快く引き受けてくださり、６月８日の国語表現の時間を使って、授業内公開インタビューを行いました。

生徒には「インタビュー」や「取材」に関する質問を事前に募り、その内容に答えていただく時間も取りながら授業を行いました。生徒達は、現場で活躍する新聞記者の話し方や質問の仕方、進行の仕方など様々な視点で観察を行い、最後に質問書にまとめました。三浦記者からは丁寧な回答をいただき、その後、記事の掲載を待って、紙面を確認しながら振り返りの授業を行いました。

公開インタビューから実際に記事に使われた部分と使われなかった部分の違いやそこから見える記者の意図、紙面構成のための工夫や技術など、「新聞」というメディアの持っている特性について深く考察することができました。

実際に掲載された本校ＮＩＥの記事

本校では、ＮＩＥを実施してから年に一度新聞記者の方を招いて授業の講師をお願いしています。専門家の仕事と技術に触れられることは、生徒のみならず教職員にとっても多くの刺戟を得られる特別な時間といえます。

３．成果と課題

これまでの成果

この４年間の成果として、まず思い浮かぶのは、生徒が自然に新聞を読むようになったことです。この年度末には、次年度のスクラップについて生徒、そして教職員からも質問がありました。緩いペースで長く継続していくことの大切さを改めて感じました。また、職員の異動に伴い「青雲館新聞」の担当が変わりましたが、昨年度の出版委員だった生徒や経験知を蓄えた四年次の生徒が中心となり、取材・執筆・編集・校正・発行という流れを作っている姿が見えました。本校がＮＩＥに取り組んだ当初のねらいは他者と関わる場面をたくさん作ることにありました。それは新聞という一つの「形式」を利用して、生徒が失敗と成功を数多く経験できるようにすることでもあります。 授業、委員会、行事、コンクールとＮＩＥを設定した場面は様々ですが、どの試みでも、他者との関わり方を学ぶことができたことは本校の生徒にとって大きな成果であると考えています。

今後の課題

平成２７年度のＮＩＥのテーマは「『見出し』の活用」でした。具体的には、「進路クラップ」に「見出し」の項目を加えたことが挙げられます。自分の考え・意見に「見出し」を付けることで、文章を見直す機会を増やし、読み手に伝えたい内容を絞らせることをねらいとしました。「書き手」として見出しを付けることは、「読み手」として読解力を向上

させます。そこで、情報を伝える側・受け取る側、その両方の立場に立つ場面を一枚の紙面の中に設定しました。

実際のところ、生徒たちに「見出し」の意図がなかなか伝わらず、年度当初は戸惑う様子が見受けられました。担任のチェックやアドバイスを経て状況は改善されましたが、まだまだ「見出し」を生かしきっているとはいえない状況にあります。次年度は、国語科を中心に全ての学年で「授業の振り返り」に「見出し」を生かすことを考えています。

本校のもう一つの大きな取り組みである「青雲館新聞」に関しては、委員会の生徒が中心であるため、年度ごとにメンバーが変化し、新聞作成の「ノウハウの伝達」が難しい面があります。今年度同様に委員以外の生徒も巻き込んだ活動が紙面を充実させる鍵になります。学校のシンボルとなり、学校情報を継続的に外部に発信していけるような媒体を目指していければと考えています。

そして、次年度最大の課題はＮＩＥの取り組みが生徒はもちろん教職員にとってどのように捉えられていたのかを振り返ることにあると考えています。教科から始まった取り組みが、学校全体の取り組みとして定着していくためには、教職員全体の理解と協力が欠かせません。

端的に言えば、生徒と教職員がＮＩＥから充実感を得られる場面を作る必要があります。そのために現在考えているのは、卒業生の声を生かすことです。就職・進学した生徒たちにとって高校での取り組みがどのように位置づけられているのかを分析し、後輩である現在の生徒たちにフィードバックしていくことが本校の遺産になっていくと考えています。

よりよい形を模索しながら、この取り組みを緩く長く継続していくことを目指したいと思います。

これまでの秋田県のＮＩＥ実践校一覧

1995年度　秋田市立明徳小学校、秋田市立築山小学校、天王町立東湖小学校

1996年度　秋田市立明徳小学校、秋田市立築山小学校、若美町立払戸小学校

1997年度　若美町立払戸小学校、秋田市立中通小学校、能代市立崇徳小学校

1998年度　秋田市立中通小学校、能代市立崇徳小学校、雄和町立雄和中学校

1999年度　雄和町立雄和中学校、秋田市立大住小学校、峰浜村立峰浜中学校

2000年度　秋田市立大住小学校、峰浜村立峰浜中学校、秋田市立川尻小学校、横手市立横手南小学校、秋田市立桜中学校、秋田県立男鹿高校

2001年度　秋田市立川尻小学校、横手市立横手南小学校、秋田市立桜中学校、秋田県立男鹿高校、秋田大学教育文化学部附属中学校、大館市立城西小学校

2002年度　鷹巣町立鷹巣小学校、大館市立城西小学校、秋田大学教育文化学部附属中学校、二ツ井町立二ツ井中学校、横手市立金沢中学校、県立大館高校

2003年度　鷹巣町立鷹巣小学校、鳥海町立笹子小学校、二ツ井町立二ツ井中学校、秋田市立御野場中学校、横手市立金沢中学校、県立大館高校

2004年度　鳥海町立笹子小学校、鹿角市立尾去沢小学校、秋田市立御野場中学校、本荘市立本荘南中学校、横手清陵学院中学校・高校、秋田和洋女子高校、大館市立矢立中学校

2005年度　鹿角市立尾去沢小学校、能代市立朴瀬小学校、秋田市立金足東小学校、由利本荘市立本荘南中学校、大館市立矢立中学校、横手清陵学院中学校・高校、秋田和洋女子高校

〈県協議会指定〉
大館市立南小学校、大仙市立船岡小学校、北秋田市立阿仁中学校、大仙市立太田中学校

2006年度　能代市立朴瀬小学校、秋田市立金足東小学校、大館市立南小学校、大仙市立船岡小学校、北秋田市立阿仁中学校、大仙市立太田中学校、大館国際情報学院中学校

〈県協議会指定〉
男鹿市立鵜木小学校、にかほ市立小出小学校、横手市立横手西中学校、秋田県立雄勝高校

2007年度　大館市立南小学校、大仙市立船岡小学校、大仙市立太田中学校、大館国際情報学院中学校、秋田市立金足東小学校、男鹿市立鵜木小学校、にかほ市立小出小学校、横手市立横手西中学校、秋田県立雄勝高校

〈県協議会指定〉
八峰町立水沢小学校、秋田市立下北手小学校、由利本荘市立亀田小学校、大仙市立土川小学校、美郷町立千屋小学校、湯沢市立山田小学校、北秋田市立鷹巣中学校

2008年度　横手市立横手西中学校、八峰町立水沢小学校、秋田市立下北手小学校、由利本荘市立亀田小学校、美郷町立千屋小学校、湯沢市立山田小学校、北秋田市立鷹巣中学校、男鹿市立鵜木小学校、にかほ市立小出小学校

〈県協議会指定〉
大仙市立土川小学校、秋田市立旭北小学校、三種町立金岡小学校

2009年度　三種町立金岡小学校、北秋田市立鷹巣中学校、由利本荘市立亀田小学校、八峰町立水沢小学校、秋田市立下北手小学校、秋田市立旭北小学校、五城目町立五城目小学校、五城目町立大川小学校、にかほ市立象潟中学校

〈県協議会指定〉
鹿角市立平元小学校、横手市立朝倉小学校

2010年度　三種町立金岡小学校、秋田市立旭北小学校、にかほ市立象潟中学校、五城目町立大川小学校、五城目町立五城目小学校、横手市立朝倉小学校、鹿角市立平元小学校

〈県協議会指定〉
県立五城目高校、県立（定時制）本荘高校、能代市立能代第二中学校、大館市立南中学校、湯沢市立山田中学校、大潟村立大潟小学校、仙北市立神代小学校

2011年度　横手市立朝倉小学校、鹿角市立平元小学校、能代市立能代第二中学校、大館市立南中学校、湯沢市立山田中学校、大潟村立大潟小学校、仙北市立神代小学校

〈県協議会指定〉
県立五城目高校、県立（定時制）本荘高校、五城目町立大川小学校、五城目町立五城目小学校、男鹿市立五里合小学校、湯沢市立皆瀬小学校、北秋田市立綴子小学校、鹿角市立尾去沢中学校、由利本荘市立鳥海中学校、大仙市立太田中学校

2012年度　能代市立能代第二中学校、大館市立南中学校、湯沢市立山田中学校、大潟村立大潟小学校、仙北市立神代小学校、湯沢市立皆瀬小学校、由利本荘市立鳥海中学校

〈県協議会指定〉
県立五城目高校、県立本荘高校定時制、男鹿市立五里合小学校、北秋田市立綴子小学校、鹿角市立尾去沢中学校、大仙市立太田中学校、大館市立成章小学校、潟上市立出戸小学校、横手市立十文字第一小学校、県立秋田北鷹高校、県立横手高校定時制

2013年度　湯沢市立皆瀬小学校、大仙市立太田中学校、大館市立成章小学校、潟上市立出戸小学校、横手市立十文字第一小学校、県立秋田北鷹高校、県立横手高校定時制、能代市立能代第二中学校、能代市立浅内小学校、秋田市立東小学校、横手市立朝倉小学校、由利本荘市立由利中学校

〈県協議会指定〉
県立本荘高校定時制、男鹿市立五里合小学校、北秋田市立綴子小学校、鹿角市立尾去沢中学校、能代市立能代南中学校、羽後町立羽後中学校、県立秋田南高校、県立雄物川高校

2014年度　大館市立成章小学校、潟上市立出戸小学校、横手市立十文字第一小学校、県立秋田北鷹高校、県立横手高校定時制、能代市立能代南中学校、羽後町立羽後中学校、能代市立能代第二中学校、能代市立浅内小学校、秋田市立東小学校、横手市立朝倉小学校、由利本荘市立由利中学校

〈県協議会指定〉
県立秋田南高校、県立雄物川高校、秋田大学教育文化学部附属小学校、八郎潟町立八郎潟中学校

2015年度　大館市立成章小学校、能代市立浅内小学校、秋田市立東小学校、横手市立朝倉小学校、大仙市立豊川小学校、能代市立能代第二中学校、能代市立能代南中学校、由利本荘市立由利中学校、羽後町立羽後中学校、鹿角市立八幡平中学校、男鹿市立男鹿南中学校、大仙市立協和中学校

〈県協議会指定〉
秋田大学教育文化学部附属小学校、由利本荘市立上川大内小学校、八郎潟町立八郎潟中学校、県立秋田南高校、県立雄物川高校、県立横手高校定時制課程

2015年度　秋田県ＮＩＥ推進協議会　（2015年12月時点）

顧　問	米田　　進	秋田県教育委員会教育長
〃	越後　俊彦	秋田市教育委員会教育長
会　長	阿部　　昇	秋田大学教育文化学部教授
副会長	鎌田　　信	秋田県教育庁教育次長
〃	鈴木　誠孝	秋田県高校文化連盟新聞部会長、県立金足農業高校長
〃	工藤　絹子	秋田県小中学校校長会代表、秋田市立太平中学校長
〃	秋元　卓也	ＮＩＥ実践校代表、能代市立能代第二中学校長
〃	加賀美俊一	ＮＩＥ実践校代表、秋田市立東小学校長
幹　事	鐙　隆千代	秋田魁新報社取締役編集局長
〃	荒海　謙一	朝日新聞社秋田総局長
〃	中尾　卓英	毎日新聞社秋田支局長
監　事	宮川　　宏	河北新報社秋田総局長
〃	渡辺　　浩	産経新聞社秋田支局長
〃	花田　吉雄	読売新聞東京本社秋田支局長
会　員	曽我真粧巳	日本経済新聞社秋田支局長
〃	八代　　保	北羽新報社常務取締役編集局長
〃	大河原義仁	共同通信社秋田支局長
〃	張替　昭彦	時事通信社秋田支局長
〃	外池　　智	秋田大学教育文化学部教授
〃	神居　　隆	秋田大学教育文化学部教授

秋田県ＮＩＥ推進協議会

事務局　秋田魁新報社内
（読者局ＮＩＥ推進部）
nie@sakigake.jp

〒010－8601　秋田市山王臨海町1－1
☎ ０１８－８８８－１８２２
Fax ０１８－８２３－２０９６